

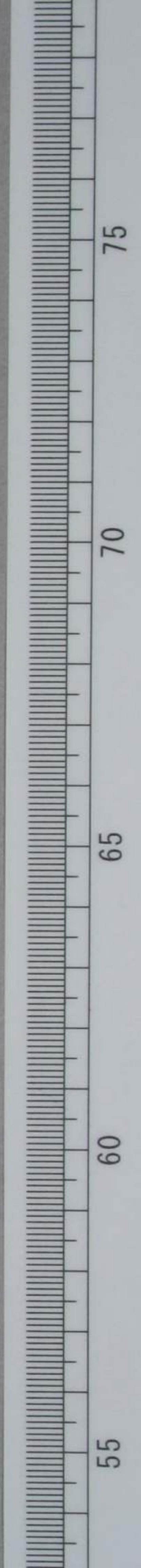
大正
十一年
五月



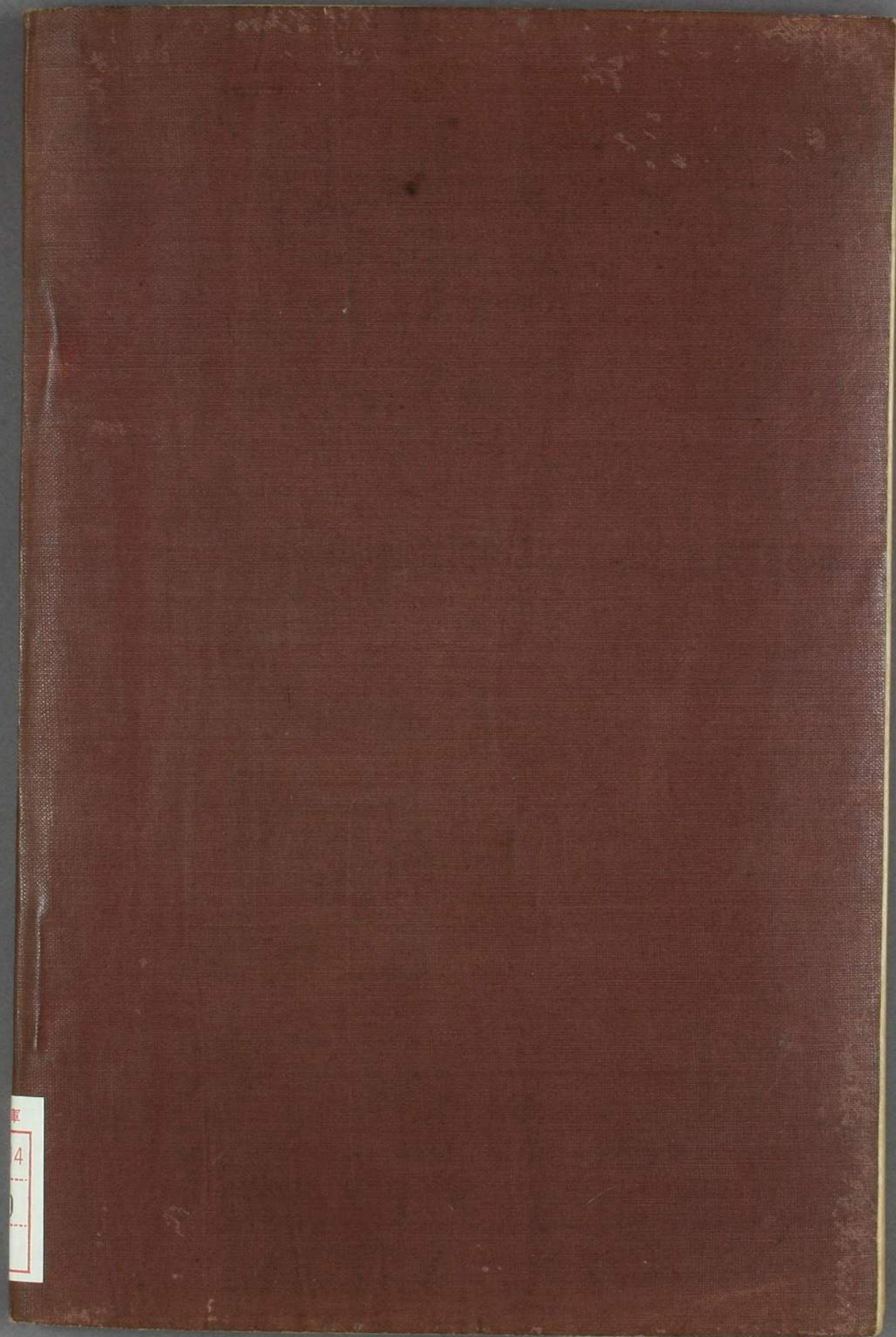
大
正
十
一
年
五
月

大
正
十
一
年
五
月

本
文
D



問文庫
庫 1
270



紅
4
〇

文庫14
D270

庫14
270

春之舍著譯

『春舍漫筆』(華文)

明治廿四年九月出版
實價 金卅錢

「壹圓紙幣の履歴はなし」は壹圓紙幣の物語に托して中流以下の情態を描ける一種の小説、「様みこ」は神子の語を假りて近松、馬琴、西鶴を評論し兼りて明治の文壇に及べる諷刺滑稽の文、「なかし」は歐米詩文人の奇譚逸話等を集め、「政界叢話」は歐米名士の珍聞を蒐めたり

『小羊漫言』(評論)

明治廿六年六月出版
實價 金卅錢

「春舍漫筆」は著者が明治廿三四年間の叙事の華文を集め本書は同年間の批評及び論辨を集めたり明治二十二年のころの文界の傾向は本書によりて瞥見するを得べし

『桐葉』(脚本)

明治廿九年二月出版
實價 金卅八錢

豊臣氏の末路を舞臺として片桐且元の苦忠逆殿の猜忌等を描きいだせる著者が脚本の初作なり

『文學其の折々』(評論及び隨筆)

明治廿九年九月出版
實價 金壹圓

千ヘーヅに垂んたる大冊、明治廿四年以後廿九年までの諸種の評論、漫筆等を集めたり

『梨園の落葉』

明治廿九年十一月出版
實價 金 五十 錢

前書と同種のもの、但し専ら演劇及び脚本に關する評論のみを集めたり

『ふたごゝろ』(小説)

明治卅年三月出版
實價 金 卅 八 錢

米國作家某の作を義譯せるもの、大膽不敵なる悪人を主人公させる物語なり

『列傳赫徳川小説史』

明治卅年五月出版
實價 金 七 十五 錢

水谷不倒氏と共著なり、紙數七百頁に餘る大冊、古くはお伽草子、怪談もの、昔より近くは假名垣魯文に至るまでの諸作家の傳統は此の書によりて詳かに知るを得べし

牧の方はしがき

此の作は明治廿九年一月にはじめて稿を起し、さて引きつゞき『早稲田文學』の紙上に掲録し、同じ年のうちに完結すべかりしを、種々の塵事いできて思ふまゝならず、遷延して同三十年の春に及び、かくてやうく、三月のなかばに稿を脱し、更に修正の筆を加へ、こゝかしこ添削して、こたび一卷となし、なり。事柄の大むねは、正しき史乘に據りたれど、枝葉は悉く作者の想像に成りて、殆ど何の據り所もなきが多し。されば人物の都合、舞臺の趣など考へて、年月、地理など

庫14
270



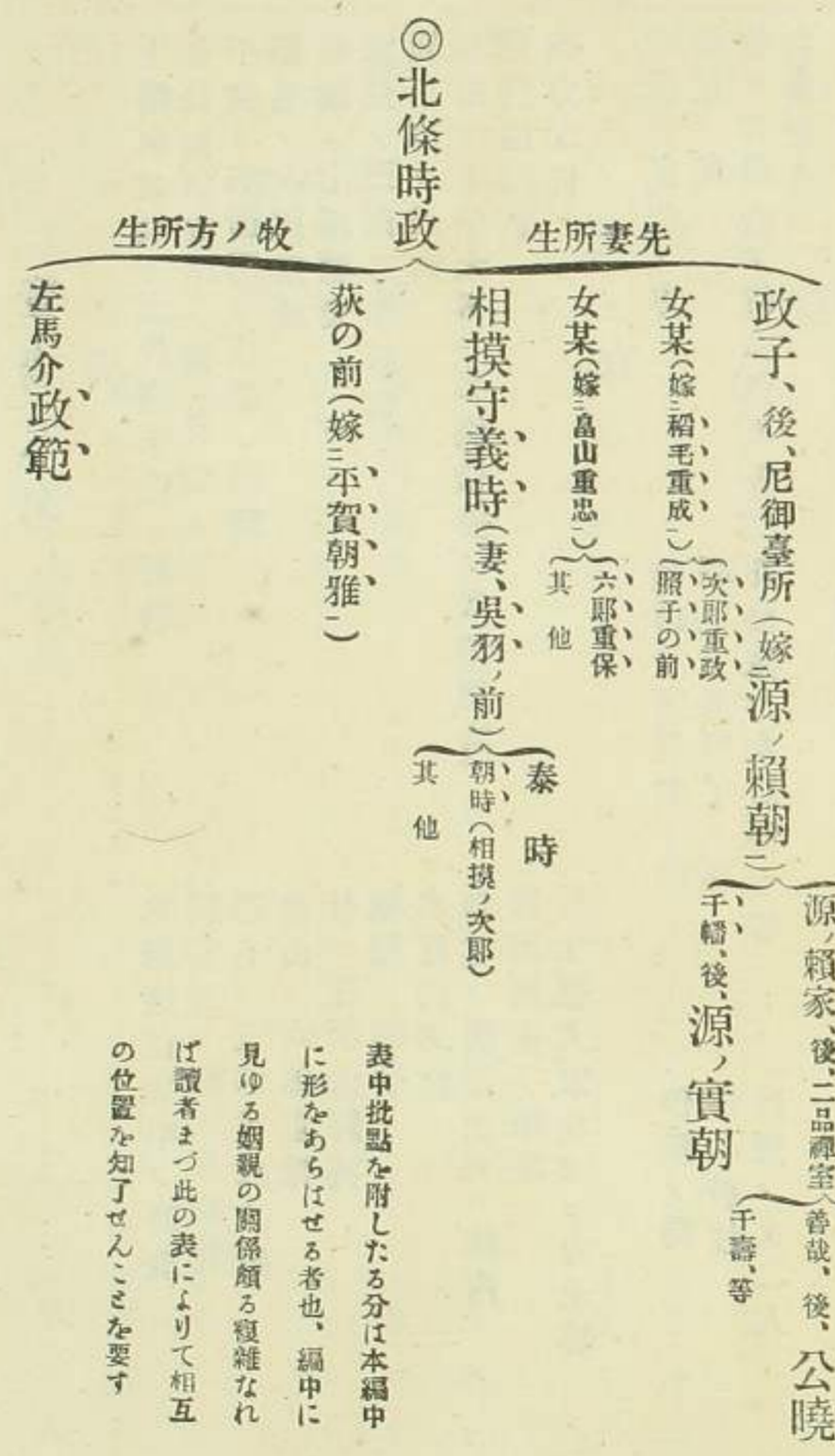
は、ほしいまゝに伸縮せり、例へば、實朝、政範の年齢の如きは、おのゝ二年づゝを減じたり、義時、牧の方は、同例なり。又鎌倉府の廣袤の如きも、其の實の二倍大となし、御所と北條邸との距離をも其の實より遠きものとなしたり。かゝるたぐひの事柄尙あまたあり、讀者心得たまひてよ。

四

明治卅年四月中旬

春のや主人識

北條氏血統



表中批點を附したる分は本編中に形をあらはせる者也、編中に見ゆる姻親の關係頗る複雑なれば讀者まづ此の表によりて相互の位置を知了せんことを要す

庫14
270

登場人名

男

千幡御前後ニ三代將軍源ノ實朝
 北條相摸守平ノ義時
 平賀ノ右衛門ノ佐源ノ朝雅
 稻毛ノ次郎重政
 結城ノ七郎朝光
 深見ノ三郎二郎致興
 籠手田ノ勘六
 和田ノ小平太井ニ北條相摸ノ次郎(朝時)
 琵琶法師某
 商賈工匠

北條遠江守平ノ時政
 同左馬ノ權ノ介政範
 稻毛ノ三郎重成入道
 畠山ノ六郎重保
 牧ノ左源太輝英
 穂積ノ瀬平
 木匠四郎作
 輝英ノ僕藤太井ニ藤内
 醫師紀河ノ宗近
 侍士雜人軍兵及ヒ力士等

女

時政ノ室、牧ノ方
 笹尾ノ局
 牧ノ方腹心ノ侍女魚米、升
 女童數人

義時ノ室、吳羽ノ前
 稻毛ノ女照子ノ前
 北條家ノ女房、侍女等

伊豫ノ局
 侍女、折枝
 呼賣ノ女、二人

場に登らずして屢々編中に見えたる人名
 二品禪室(賴家)
 畠山ノ次郎重忠

尼御臺所
 萩ノ前

牧の方目次

第一段

(其二) 往來の雜説……………自第一頁
 (其二) 中門外の爭論……………自第一三頁
 (其三) 奥殿の風波……………自第二一頁

第二段

(其二) 藥師堂の落慶供養……………自第三一頁
 (其二) 堂内の密談……………自第四五頁
 (其三) 山下の人殺し……………自第五八頁

第三段

(其二) 七夕の大雷雨……………自第六八頁
 (其二) 旅館の曲者……………自第八六頁
 (其三) 奥庭の落花狼籍……………自第八九頁

庫14
270

第四段

(其一) 閉室の密談……………自第一〇〇頁

(其二) 噴志の狂亂……………自第一〇四頁

第五段

(其一) 杜かげの伏兵……………自第一一七頁

(其二) 由比が濱の血の雨……………自第一二〇頁

第六段

(其一) 浴室の逆謀……………自第一二八頁

(其二) 築山邊の小道逢……………自第一三八頁

第七段

(其一) 月前の平家琵琶……………自第一四四頁

(其二) 橋殿の一刹那……………自第一五〇頁

(其三) 釣殿の大團圓……………自第一五三頁



牧の方

春のや主人

第一段

(其一) 往來の雑説

鎌倉今小路と長谷小路との間に懸りたる橋の袂に、五六人の工匠商賈、壁塗鍛冶、檜物師、染殿など、今や店先から飛んで出たといふ風にて、各々商賣道具を手に持ったまゝ、烏帽子袴の時服、一同今小路のかたを見込み立ちかゝりある九月下旬晚景

「あんだっぺい」。あんだって大名衆が泡アくってぶツをろって御所のはうへ出掛けるだか。これハア只事ぢやアあんめいぞ。三何んでもハア此間中から地震のでツけいのかつゝくだから縁起でもねえこんだと思ッてゐたい。地震

(四) 牧 の 方

ト皆々大きな聲する。

一呼「ア、コレ。すぐ橋むかうは由縁のお邸牧の左源太輝英さま。

ト皆々よろしくこなし。

呼「それぢやによつていつ何時 呼「軍がはじまらうも知れぬゆゑ今から直に私
したちは 呼「こちのに知らせてまさかの用心。呼「そんなら皆さん 二人さらば
でんす。

ト二女は急ぎ橋を渡り長谷小路の方へ走りゆく。

二「こりやかうしてはをられましない。四「喚に知らせてまさかの用心。三「そんだ
ら皆の衆。皆々「ござれ〜。

ト皆々あわてゝはいる。ト橋向より牧の方の甥、牧の左源太輝英直垂を裏が
へしに被て袴を前うしろに穿き、その裾をひきすり、烏帽子はかぶらず、すべて
トンチンカンの服装家来甲乙のうち、乙は佩刀と取りちがへて櫂の棒をさし、
げ持ち、主従大あわてにて出で來たり橋を渡り今小路の方へかけゆく。開始終

第 一 段 (五)

棄せりふにて家來を叱ること。

左身仕度にて餘程のひまいり遅参いたしては相すまぬワうつけとは汝等がこ
どらぬらゆるにかくの仕合せエ、急げ〜。たどへ酩酊いたしをらうと〜
エ、急げ〜。たどへ熟睡いたしをらうとなせ早く起しをらぬ 甲「へい〜
左エ、急げ〜。遅参いたしては相すまぬワ。

家來乙輝英の袴の裾をふまへる。輝英つんのめる。

左「アイタ〜。甲「こりや何となされました。左「ヤイ〜。ガツといへば
すつと申す急ぎをれと申せばとて主人を突倒すちふことがあるか。乙「ま、眞
平御免下さりませ。左「氣をつけをれうつけものめ。ヤ最前から脚のあがきが合
點ゆかずとぞんじをったが〜。ヤこりや成らぬワ後まへだ。ヤこりやどうだ此
の直垂は。ヤイ〜。如何に狼狽いたせばとて汝よく裏がへしに被せをったな。
甲「へい〜。左「うぬ〜。ヤ、無いぞ〜。烏帽子が無いぞ。こりや成らぬワ。
取ッて返さば時刻がおくれるさりとて此のま〜。エ、是非が無いからいたそ。

(六) 牧 の 方

予はこれにて身仕度致す、藤太はすぐさま取ッて歸し、予が烏帽子を持參いたせ。
家來甲、一散に橋向うへかけてはいる。

左エ、重ね々、不届至極。ヤイ、ぬがせをれ—さうではないわい、右から先へぬがせをれと申すに。ヤ、何だ、そりや何だ。うぬ、そりや何を持參いたした。乙、ヤ、こりや如何ぢや。お太刀と思つた此の品は、左、ヤア重ね々、不届者めが。如何に狼狽いたせばとて、佩刀は武士のたましゐ、うぬ、よくも、取りちがへずでの事に予が面に、泥を塗らうといたしをッたな。乙、ま、眞平御免下さりませ。左、うぬ、此の分にはさしおかれん—手打にする、覺—ヤ、右手指は、いかゝいたした。さては心の焦だつま、—こりやわりの不覺ぢやわい、君を思へば身を忘る、こりや有りがちの粗相ぢやわい。ヤイ、藤内、うぬも早速はせかへッて、予が兩刀を持參いたせ。

家來乙、どツちてはいる。あとに輝英一人残り、棄せりふにて小言をいひ、
橋の袂にたちて衣裳を着直すこと。こゝへ畠山六郎重保が、僕穂積の瀬平、今

第 一 段 (七)

小路筋を一散に走り來る。あとについで、稻毛入道重成が、女照子の前の腰元折枝、武家女房のこしらへ、かつぎなしの下髪姿。モウシ、と呼びながら、息を切ッておひすがら。

折ア、コレ待ッて、瀬平どの—これはど呼ぶのに聞えぬかいの、待ッてというたらまッていの。瀬、ヤ、誰れかと思へば折枝どのか。何の用かは知らぬが、若殿を火急のお迎ひ—御免なれ。

トゆかうとする、折枝あわて、止め

折ア、コレ待ッて、瀬平どの、是非頼まれて貰はにやならぬ。外でもない、此のお文を、そちの若殿六郎さまへ、瀬、何ぢやお文ぢや。文と聞いては、ひらさらまッびら文なら餘人に頼まッしやれ。目のまはる急ぎのお迎ひ

トかけいだす袂をとらへ

折エ、マ、もぎだうな、またしやんせ。照子の前さまのお心を、知ッてゐながら他人らしい—是非さいてもらはにやならぬ—たとへ親御さまと親御さまとが御中た

がひをなされうと、お二人はおいとこどし、筒井づゝの幼な馴染御婚禮の其の折を、指折敷ぞへて待ちこがれ。瀬エ、そのやうな長物語り、さいてゐる間は無い。大事のお知らせがおそなはるゝそ離した。折、イエ、離さぬ、離さぬわいの。いと、しほや照子の前さま、ひよんなことが元となり、御破談となつてそれから、只くよ、と物案、三度のお物も進まぬが、一日、く、に瘦さッしやる、はたの見る目も痛くしい、親御さまは兎も角も、聞えぬはそちの重保さま、瀬、それをおれが知ることかえ。折、それにまた憎らしいは、新大名の左源太づら、牧の方さまを笠に被て照子の前さまへ無體の戀慕、一怒には目の無い入道さま、どのやうな間ちがひから、諾どおッしやるまい物でもない、若さうなッたら如何あらうぞ、いちぢらしいは照子の前さま、其のお心を推量して、お前もどうぞ傍から口をへ元の通りに直るやう、其の掛橋は此の玉章、六郎さまが御覽じたら、瀬エ、それならば尙さら御免だ。折、イエ、如何あつても頼まにやおかぬ。瀬、イ、ヤ離せ。折、離さぬ。瀬、こりや叶はぬ。

ト瀬平ふりはなし、逃げだすをおひかくる。此のうち左源太、たちぎ、腹の立つこなし、つゝと出る、薄くらがりの心。出あひがしらに、かけだす瀬平と、双方見事に額あはせする。

左源、アイタ、左、ヤ、イ、うぬれ、無禮者めが。瀬、何だ、無禮だ、額あはせはあひみたがひ、身勝手なことをいはッしやるな。左、こいつが。それがしを誰れだと思ふ。うぬ、此の分にはさしおかれん。おのれ、如何様なる遺恨あつて、不意にそれがしを突倒した、真直に白状いたせ。瀬、とんだいひが、りをいはッしやる。知りもせぬお身さまに、遺恨も執念もあるものかえ。左、ヤ、イ、一言はせて置けば、雑言過言、うぬ、それがしを誰れだと思ふ、北條どの、奥方牧の御方には、實の甥、牧の左源太、輝英、だわやい。瀬、折、エ、左、只今かしこで、ちらときけば、うぬはたしか、畠山の惣領、六郎重保が下郎だ。瀬、エ、左、重保が下郎とあれば、ハ、アわかッた、こりや何ぢやな、主人の羽ふりよきを鼻にかけ、新参者のそれがしゆゑ、何がな耻辱を興へんとて、ウ、ン、ニ、ヤ、さうだ、さうだ、さうだ、北條どのへ、参第の、其の妨げを

いたすのぢやな。瀬め、めッさうな、毛頭さやうな 左「ヤア、いふなく、一定それ
に相違はない。新参なれども當將軍家の直参たる此の左源太を悪口なし、うぬい
ひが、りだどぬかしたな。瀬「サアそれは、薄くらがりのゆゑ、あなたさまとは夢さ
ら存せず 左「ヤア、さかぬ〜。うぬ、此の上は 折「ア、申し、慮外ながら、あなたさ
まへ申上げます—只今のお粗相は全くわらはの不束ゆゑ、そのお人の存じませぬ
こと—どうぞ此の場は、此のまゝに 左「ム、さう申すは、稻毛どのの腰元な。
折「ハイ。左「そもじが折入ッての取做しなら、魚心あれば水心さいてどらすまいも
のでもなければ—ヤイ、よく聞けよ、新大名は一段と、當座の面目が大切なるに見よ、
晴衣裳にまッこの通り、泥を塗ッた不屈奴、無禮至極の下郎め。此の分にはさしお
かれん、此の處にて、手「ヤ、こりや成らぬ。アノ家來共は、エ、何をいたしをる。おの
れ手打にせば、刀の汚れ—かうしてくれう。
ト「たちかゝる。

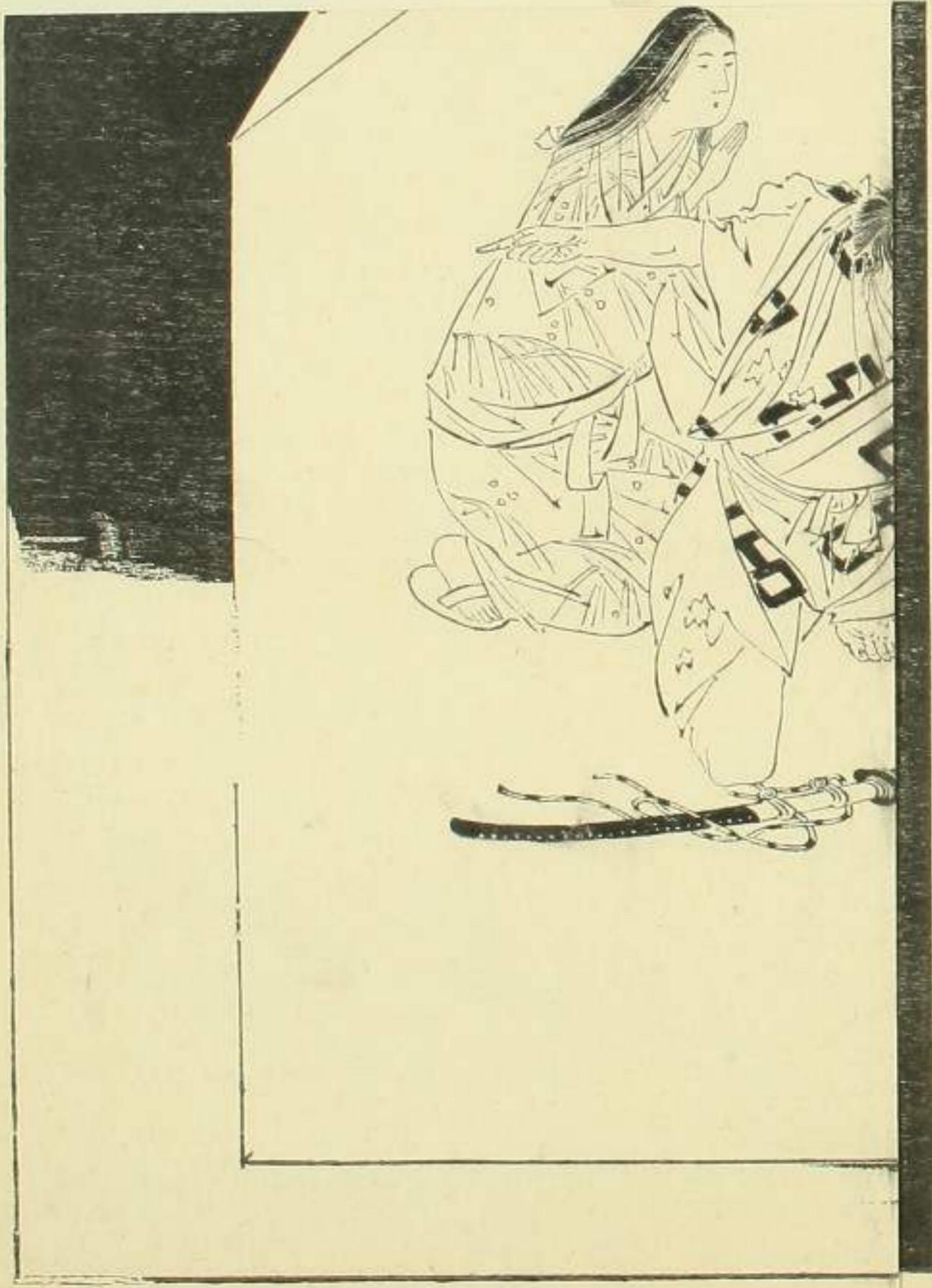
されて下さりませ。其の代りには何事でも、あなたさまの御用とならば 左「さく
と申さば—ウンニヤ、さかぬ—さかぬ〜。
ト「又たちかゝるを折枝とめる。此の中橋向うより以前の家來、甲乙鳥帽子、太
刀指添を持ち急ぎ出来る。
左「ヤア、よいどころへ。ソレをやつを叩き伏せる。甲乙「心得ました。瀬「ヤア、大身と
て容赦すれば、あまりといへば無體のふるまひ 左「何がなんだ。ソレ、ぶッちめろ。
瀬「何を。
折枝「うろたへ、どめうとして誤ッて灸所をあてられ悶絶する。四人はげしき
立まはり、ト「瀬平、左源太につかみかゝる、左源太鞘のまゝ、指添にて眉間を打
つ、瀬平「アッといッてたぢろく。主従「たちかゝり、散々に打擲する。
左「さア見ろ。者共いそげ。
ト「主従一散に今小路の方へかけゆく。折枝「心づき起あがり、瀬平「が倒れたる
を見て驚き介抱する。瀬平「無念のこなし。

方 の 牧 (二一)

瀬北條をの笠に被て、人を人とも思はぬ左源太 折サ、其の腹立は尤もなれど、主人持の身を忘れ、一徹短慮はお前の病ひ、何處ぞ怪我はしえやんせぬか。ひさう痛みはせぬかいの。これといふのも畢竟は戀の遺恨に六郎さまを憎いと思ふ八當りひよんなことであつたわいなア。

このうち畠山六郎重保狩衣裳騎馬にて弓を携へ、郎黨一人つきそひ、すべて野狩の歸りといふこしらへにて、長谷小路のかたより橋を渡り、こゝへ來かゝる。瀬平星あかりにすかし見て

瀬オ、そこへおこしなされまするは若殿ではムりませぬか。保さいふ汝は瀬平ならずや。折マ、よいどころへ、六郎さま。ひよんなことでムりませぬ。保そなたは折枝合點ゆかぬ此の場の有様。汝が眉間の其の血汐は 折お聞きなされて下さりませ、無念なはたつた今がた 瀬エ、そこどころかーモシ若殿、一大事でムりまする。保ナニ、一大事とは心懸りーシテ、其の仔細は 瀬サ、其の仔細は、如何なる故かは存じませぬと、尼御臺さまの御沙汰とあつて、若君さまには俄の御還御。太



方 の 牧 (二一)

瀬北條どのを笠に被て、人を人とも思はぬ左源太。折サ、其の腹立は尤もなれど、主人持の身を忘れ、一徹短慮はお前の病ひ何處ぞ怪我はしえやえやんせぬか。ひさう痛みはせぬかいの。これといふのも畢竟は戀の遺恨に六郎さまを憎いと思ふ八當り、ひよんなことであつたわいなア。

このうち島山六郎重保、狩衣裳騎馬にて弓を携へ、郎黨一人つきそひすべて野狩の歸りといふこしらへにて、長谷小路のかたより橋を渡り、こゝへ來かゝる。瀬平星あかりにすかし見て

瀬オ、そこへおこしなされませするは、若殿ではムりませぬか。保、さいふ汝は瀬平ならずや。折、マ、よいどころへ、六郎さま。ひよんなことでムりました。保、そなたは折枝合點ゆかぬ此の場の有様。汝が眉間の其の血汐は、折、お聞きなされて下さりませ、無念なはたつた今がた。瀬、エ、そこどころか、一モシ若殿、一大事でムります。保、ナニ、一大事とは心懸り、一シテ、其の仔細は、瀬、サ、其の仔細は、如何なる故かは存じませぬと、尼御臺さまの御沙汰とあつて、若君さまには俄の御還御。大



倉あたりは上を下へ今にも戦がはじまるかと思ふばかりの亂ちく騒動。北條さまが御謀叛とはや一ぱいに噂は口々保ヤ、。瀬兵具を整へ西の御門へ我れ先にと大名がたゝスハ大變と存せしゆゑお迎ひの爲下郎めがこれまで參つてムります。保さてこそ珍變。つゞけ。

ト其の儘馬に一角入れてかけだす。郎黨つゞく。瀬平ついと起ちよろゝとよろめきふみこたへて行かうとする。呆氣にとられてゐたる折枝此の時

あわて、瀬平をとめ、折コレ瀬平どの此の照子さまのお文をば 瀬エ、そこどころぢや

ト折枝を突放し

瀬ありましないわい。

ト一散についてはいる。折枝呆れたこなし。

(其二) 中門外の争論

大倉が谷なる北條時政が邸。中門外。馬の嘶き、人聲、物音、騒然たる初夜の景。こゝへ門内より前の場の牧左源太手に松炬をもち、うろたへてかけいで。左サア事だ、サア事だ。老公の一徹短慮に、かて、加へた牧方の疳癩火のつきさうな眞最中へ、新に油は平賀朝雑どの。こりや大事にならずにやおかぬワ。いざ合戦となつたが最後、流箭一つ飛んで来て、此の素肌では——こりやならぬワ。藤太はぬか。藤太、々々。

ト下手より郎黨藤太いそぎ出で來たる。

左オ、藤太か。事だ。一大事と相成つたワ。本ヒエ、そんなら彌々噂の通り、御所から討手がまゐりまするか。左、討手は如何だか存せぬが風の手も火の手もわるい。所詮は事だ、合戦々々。汝は直さま章駄天走り、邸へ戻つて甲冑もろども、身共が弓矢を持参いたせ。本ヒエ、左、ヤイ、なせ起たぬ何をうち——時刻が後れる、急げ。本、御免なされて下さりませ、こゝ腰がぬけましてムリます。左、ヤア、うぬれ、臆病者めが。勇將の下に弱卒なし、疾く参らずばぶツをな

すぞ。本、まゝ、まゐります。

ト此のトタン、向うより同じく左源太の郎黨藤内はたゞにて一さんにかへ來たり、左源太主従に突きあたり、けしとぶこと。

左、ヤア、無禮奴、何をいたす。内、ヤ、御主君——た、大變でムリます。左、大變とは。内、表御門へ、う、討手の大軍。左、本ヒエ。内、有無をいはず無二無三に——アレ、あしこへ。左、ナニ、あしこへ——ヤ、いかにあまたの——ヤ、い、い、い。内、本無二。

ト藤太、藤内、こけつまるびつ門内へにげてはいる。

左、ヤア、不忠やつ、まて、うぬれ。ヤア、かたぐ——コレ、まッてくれ——いであひめされ——いであひ、い、い、い。

ト左源太、臆病の思入、いろ、うろたへ、ト、腰のぬけたるこなし。すぐに向うより、稻毛重成、入道、同じく男次郎重政、物具に身を堅め、兵器を携へ、郎黨大勢ひき具していで來たる。

左いでわひめされ〜。稻「そこにゐるは牧、左源太どのではムらぬか。左くわばら〜。政コレヲ左源太どの輝英どの左南無阿彌陀佛〜。稻「これはしたり輝英どの。左ヤ、貴殿は——オ、稻毛どのでムりましたか。稻「驚き入ッたる今宵の珍變若君御前の御事より、老公御夫婦に御嫌疑かゝり程なく御討手としきッて風説 政信僞はわかぬぞ、びツくり仰天 稻「スハ老公の御一大事萬一讒者の寄せ來ん備へ 政日ごろの忠節此の時と取るものも取りあへず手勢を引き具し稻「稻毛父子推参いたすと、すぐさま御披露 稻「政下されたし。左さては討手と——イヤナニ、う、討手をひきうけ一人にても防戦なさんと存せしどころ持病の痲氣に敵しがたく 稻「ヤア、何はまかれ奥の御模様シテ、老公にはいづれに御座ある。政平賀朝政どのには參着ありしか。稻「シテ、御方には御異變なきか。政「シテ、相州には 左「マ、マ、さやうにたゝみかけてお尋ねあつても——まゝ痲氣が、動氣が——兎も角も御披露〜。まばら〜。

ト左源太あわて、門内へはいる。

稻「ヤア案外なるうろたへ者——もどかしい奥の様子心元なし。ヤイ汝等はこゝに据へてゐよ。伴まゐれ。

ト稻毛父子門内へ入らうとする、ト向ふにて

保「まばら〜。

ト畠山六郎重保鳥帽子直垂ばた〜にてかけ來たり

保「申すことありまばら〜。稻「誰れかと思へばおことは重保 政「珍事の仔細は知られつらん、稻「悠長らしき其の打扮 政「呼びとめられしは 稻「何等の所要だ。保「こは心得ぬ其のお言葉不思議の御嫌疑か、ッたるは、當北條家未聞の惡名まづ第一の御詮議は、讒者の有無をとりまらば、老公御夫婦の御濡衣乾し奉るを急とすべし、然るに何ぞやげう〜しく、兵具を携へ馳けつけられしは、道路の匹夫を驚かし、嫌疑を加ふる粗忽の振舞 政「ヤア、おしだまつて聽いてゐれば、おのが不覺を棚へあげ、我々親子をさみなす暴言。高木風をまぬかれず、當家を妬む卑劣のともがら、舌刀を研ぐと兼ねての風説。讒者のあるなし調ふるうち、討手理不盡に

寄せ来たならば、六郎には何とせらるゝ。保たどへ御討手寄せたりとも、三代相恩の御所に向つて、一矢たりとも弓引かんや。さらぬだに此の年來外戚の威權にはこり、我意の振舞おはするなんと、口無悪なき世上の取沙汰。御疑ひかゝつたらば、まづ御謹慎あるべき折柄門内に兵馬を集へ、不穩の振舞これあらんは、いよく以て逆意の疑ひ。稽黙れ逆意とは何のたはごと。我意の振舞おはするとは、前後を存せぬ無禮の一言。和主の如き無分別が、兎角に浮説の基を作る、取りも直さず讒者のかたわれ。保、ヤア聞にくし其の一言。今ひとたびおはせあれ、伯母聲とて、聞棄には致しませぬぞ。稽、何だ。血相かへてそりや何だ。讒者と言つたが何と致した。保、他人の口より出でば知らず、便佞讒誣を異名に呼ぶ、えせ入道のそこもどが、讒者呼ばりかたはらいたし。稽、何がなんと。政、うぬ

ト重政をどりいで、抜かうとする、重保其の手を抑へ

保、こりや何とする、次郎重政。政、何とするとは知れたこと、父をさみなす汝がそつ首。保、フム、すりやそれがしを斬らんず心か。政、知れたことだ。保、何を。

ト重政また抜きかけるを、重保つき戻し、左右にわかれ、双方柄に手をかけ、きつどなる。此のトタン奥にて

朝、兩人ともに、まツた。

ト平賀右衛門佐源の朝雅烏帽子直垂にて、松炬もつたる童郎黨を随へ、門内よりはせいで、二人の間にわつて、いり、よろしくこなし。

朝、大事の折から、嗚呼の鬨諍、兩人ともに、鎮まりませうぞ。保、右衛門佐源のお退き下され。堪忍ならざる次郎が雑言。政、うぬ、そのおとがひ——お退き下され。朝、ヤア、一大事を前にひかへながら、血氣に前後を忘れたるか。入道どのも年甲斐なし、何故おといめなされませぬぞ。

トこれにて入道耻ぢたる思入。

朝、面目なし、右衛門佐源の無體の過言を申せしゆゑ、ついそれがしまで釣り入れられ——こりやヤイ重政、据へをらうぞ。政、ちやと申して。朝、エ、据へをれと申すに。

ト重政まぶくひかへる。

朝イヤナニ入道仔細は已に知られつらん尼御臺がこよひの御處置は近ごろ以て
理不盡千萬まつた今以て義時ぬしのかつふつ何等の音沙汰無きは一定父母をな
みする同腹當家の耻辱未聞の悪名このまゝにはすて置きがたしと烈火の如き御
腹立時宜によつては兵士をひき具し御自身御所へ参入あらんか。利害善悪決し
がたく今奥殿にて御評議最中。保ナニ御自身にて兵士をひき具し 朝重保にも
重政にもどく列席いたさるべし。保法外なる其の御所存 稻玄からばすぐさま
政参候なし 保ことばを盡しおどいめ申さん。

ト此の時門内より以前の左源太かけいで

左かたぐいこれに御座ありしか。相州公の奥方吳羽の前只今俄に裏門口より御
参入でムりまする。朝ナニ義時ぬしの内室が 朝アノ裏門より 保オ、それぞ
さいはひいでくすぐに。
ト重保つゝと先にたち入らんとする稻毛へだて、

稻「ヤア尾籠なり六郎重保。和ぬしは禮義をぞんじをらぬか。

ト手荒く突き戻す。重保くわつとなつて意氣こむを朝雅さそくに押しへだ
て

朝「アイヤ左源太どの稻毛どのを案内めされい。

ト重保無念のこなし稻毛よろしく思入朝雅に會釋して先にたつ。皆々つゝ

(其三) 奥殿の風波

北條邸の奥殿の一室、さんなかに遠江守時政白髪かづら烏帽子直垂、うしろに
太刀持の小童、下手前のかたに、相模守義時の室、吳羽の前、下髪、當時の盛服、手を
つかへてゐる談話なかばの體なり。

時スリヤ全く世上の浮説をしづめん爲の餘義なきはからひ、義時は申すに及ばず、
尼公にも疑念はなきよな。かつふつ他念は無いと申すか。吳何の御他念がムリ

ませうや。そもくこよひの一條は、義時とても寢耳に水あまりの珍事に仰天なし、取あへず伺候の上事の仔細を承らんと、ひそかに用意の其の折から、大江をはじめ和田三浦、在鎌倉の大名小名前後の思慮なく動擾なし、一時に參集なされしゆゑ、いよく廣がるゆゑしき風説一定仔細のはんべること、夫の察しにつゆ違はず、此の流言の源は、禪室さまに加擔のともがら、同志うちさせうす結構にて、申し觸らせし苦肉の策略。時ム、さてはさやうの仔細であつたか。さる深意ありと知らざるゆゑ、只理不盡なるはからひと、老の一徹忍びがたく、すぐさま御所へ推參なし、目のあたり尼御臺を詰問なさんといらだちしは、ア、我れながら、不覺々々。此の上は義時の諫に、去たがひ、ヒツと整して御沙汰をまたん。其のお言葉をうけたまはり、夫に代り御使に立ッたる此の身が心の安堵歸ッてかくと傳へんには、夫相州にも嘸よろこび。そんならいよく御怒りは、時オ、サとけた、さッぱりと解けたはやし。

ト此のトタン、小簾のうちにて

時オ、これはく母上さま、母上さまにもあらためて宵よりの一伍一什を、よう申しわけいたせいと、くれくも夫のいひつけ、牧アコレく、其の間にあはせの追従言葉、やめにして貰ひませう。何ちや、此の母にもあらためて——其のにもとは何のため。コレ、そもともよう知ッての通り、三従は女子の訓嫁いでは、夫に去たがふ時政殿に否が無くば、みづからが何の故障いひませうぞ。えかるにあらためて此の母にもとは——マ、おき、やいの此の母をば——夫はあれどもない

がしろに——マ、我意をふるまふ邪心女と——イエく、其の證據は今宵の措置、三代相恩の御主君をば、毒害なさうす悪人ど、ようかりそめにも疑うた、よう悪名をおつけやツたの。時オ、其の仔細はつい只今、父上さまに申しひらき、根無し

事とはとくより御ぞんじ 咎(とが)フム、すりや根無し事(こと)と知(し)ッてゐながら、義(ぎ)時(とき)も、尼(に)御(ご)前(ぜん)も、事(こと)ありさうに若(わか)君(きみ)御(ご)前(ぜん)を、多(た)勢(せい)で守(まも)護(ご)なし、還(かへ)御(ご)せさせ、此(こ)の鎌(かま)倉(くら)中(ちゆう)一(いち)ばいに、ますく、悪(あく)評(ひやう)募(も)らせしは、只(ただ)此(こ)の母(はは)に、みづからに謀(は)叛(はん)の悪(あく)名(な)つけうす爲(ため)か。吳(ご)何(なん)のマア物(もの)体(たい)ない、さらく、以(も)てそのやうな 咎(とが)さうで無(な)くば何(なん)故(ゆ)に、まづ根(ね)無(な)しごと
の發(は)頭(だう)たる、其(その)の悪(わる)者(もの)をば糺(ただ)問(もん)せいでなせ、浮(う)名(な)をば募(も)らせましたぞ。吳(ご)サアそれ
は 咎(とが)まツた、みづからは兎(う)も角(かく)も、北(きた)條(じょう)一(いち)家(け)の大(だい)耻(ち)辱(じやく)と、よも氣(き)づかぬとは、えいふ
まい、然(しか)るに何(なん)ぞや、義(ぎ)時(とき)は、影(かげ)も見(み)せず、沙(さ)汰(た)もせず、今(いま)となつて、体(てい)よきいひわけ——
みづからは繼(つ)母(はは)ゆゑ、ないがしるにするも、道(だう)理(り)なれど——父(ちち)御(ご)に對(たい)して不(ふ)孝(かう)でな
いか。吳(ご)サアそれは 咎(とが)サアくく、其(その)の返(へん)事(じ)き、ませうか。
ト吳(ご)羽(は)の前(まへ)に、ゆつなきこなし、時(とき)政(せい)始(し)終(しゆう)氣(き)をもむ思(おも)入(い)ありて
時(とき)マ、奥(おく)の腹(はら)立(た)ちも一(いち)理(り)あれど、義(ぎ)時(とき)が申(まを)すも、道(だう)理(り)畢(ひ)竟(けい)は世(せ)上(じやう)の動(どう)擾(じやう)を鎮(しん)めん
ため、餘(よ)義(ぎ)なく一(いち)時(じ) 咎(とが)すりや、義(ぎ)時(とき)の申(まを)すことをば、アノ道(だう)理(り)ぢやとおぼしめすか。
な、さぬ中(なか)ゆゑ、人(ひと)百(ひゃく)倍(ばい)、まはり氣(き)邪(じゃ)推(お)もあるならひと、千(せん)幡(ばん)君(きみ)の介(か)抱(ほう)にも、心(こころ)を摧(くだ)き身(み)

を惱(なや)まし、夜(よる)晝(ひる)苦(く)勞(らう)の絶(た)ゆる間(ま)なく、心(こころ)をつくせし御(ご)もてなしを、何(なん)ばな、さぬ中(なか)ぢや
とて、かりそめにも逆(さか)心(しん)とは——エ、どこを見て、どう睨(にら)んで 時(とき)サ、ハ、それが
おここのひがみで、義(ぎ)時(とき)がうたがうた譯(わけ)では無(な)けれど、咎(とが)ナニ、ひがみぢやど
や、まはり氣(き)とや。成(なる)程(ほど)まはり氣(き)で、ムらうわいの、みんな邪(じゃ)推(お)で、ムらわいの——イ
エ、みづからはひがんである、ひがんであるゆゑ、ひがみの無(な)い、尼(に)御(ご)前(ぜん)にも、義(ぎ)時(とき)
にも、若(も)しや邪(じゃ)推(お)が、あらかど、生(なま)中(ちゆう)無(な)うて、ことかけぬ、政(せい)範(はん)といふ、實(じつ)子(こ)あるゆゑ、苦(く)
勞(らう)の絶(た)ゆる間(ま)は、無(な)く 時(とき)そ、 咎(とが)エ、きかぬ、き、ませぬ。生(う)まれて、女(むすめ)子(こ)の
身(み)となるも、繼(つ)し母(はは)には、なるまいもの——エ、なせ、今(いま)どろ悟(さと)つたぞ。それに
つけても、不(ふ)便(べん)なは、不(ふ)便(べん)なは、あゝの政(せい)範(はん) 時(とき)そ、ハ、さう一(いち)圖(ず)に、仔(こ)細(さい)も、きかず 咎(とが)エ
ハ、其(その)仔(こ)細(さい)は、聽(き)くに及(およ)ばぬ。義(ぎ)時(とき)が疑(うたが)うたを、みづからを疑(うたが)うたを、有(あ)理(り)ぢやとわ
るからは——さうぢや、みづからが心(こころ)は、定(さだ)めた。

ト牧(まき)のかた憤(ふん)怒(ど)の形(かたち)相(あ)ついと起(た)ち、すぐに奥(おく)へゆかうとする。時(とき)政(せい)吳(ご)羽(は)の前(まへ)は、ッど驚(おどろ)き

時こりや何處へ 異まあくおまちなされませい。牧エ、はなしや——はなし
て下され。たつた一目和子に、政範——時マ、マ、まあく下に。

ト時政牧の方をとめる、牧の方狂氣の如く、どいむる兩人を振拂ひ、奥のかたへ
かけ入らんとする。此の時下手より前の場の平賀朝雅重成入道の二人急ぎ入
り来たり、やうく牧のかたをとりおさへる。牧のかた聲たて、泣き伏す。

時政、吳羽の前氣を揉み立寄り、何事かいひ慰めんとするを、朝雅といめ

朝、吳羽の方には、六郎重保何事やらん願用ありとて、御便宜を彼方の一間に——此
の場はそれがし心得たり——まッた考公には——稻毛どの、ソレ最前の一伍一什
を。

トよろしく皆々に吞込ませる。

稻、オ、いかにも——老公には、憚ながら、御閑室にて暫時の間——吳羽御前にも、マ
、あちらへ。

ト吳羽の前心得て下手へ、時政は小童をつれ稻毛と共に奥へ、皆々はいる。あ

と牧のかたと朝雅と残る。牧のかた尙泣き伏してゐる。朝雅すりより、あたり
へこなしあッて

朝、先刻よりの御怨言、一々御尤とお察し申す。義時の疑ひは、畢竟尼御臺の御さし
がね賢女なれども、さすがは女性さかしきだけに疑念深く、兎もすれば御まはりぎ、
これまかしながら上下君臣と別かれさせ、いまだ母上の御氣質を、ようお酌取遊ば
されぬゆゑ——さもあれ不貳のまごゝるは、竟に天地に通ずるためし、必ずお心に
懸けられまするな。牧ノウ推量して下さりませ、あの政範さへ無いならば、けふよ
り前にも幾たびか、口へだして、いひたいこと、主であらうが、何であらうが、まことを
いへば、我が子も同然、それに何ぞや、將軍家の威を鼻にかけ、後妻と見くびつて、事に
つけ物につけ意地くねわるい尼御前、そのかた組の義時夫婦、いひたいことは、山々
あつても、ひとつは、主といふ名前が、楯又た二つには、政範をば、跡目にもせう、下心か
ど、義時はじめ一門に、肚さぐらるゝが、くちをし、こらへこらへてゐるたものを、邪推
にも、ことをかき、千幡君を毒害なし、あの政範を將軍家の跡目になさんくわだてと

は——よう邪推したぢやムらぬかいの。此の邪推の鹽梅ではよしや今度の濡衣は、此のまゝに乾いても不憫なはあの政範——貌ばせなら、聲音なら、千幡若に似たいけに、おひゆくさきの末々まで、嘸世の人にも目をつけられ野心もあるかと疑はれ、如何なる愛目を見やらうぞや。それを思へば此の母が心はちぎるゝ思ひぢやわいのう。朝そのお歎はお道理千万今大小名多しと雖も、何人か老公の威權に及び申さうや。其の内方たる母上は、若し御實母でおはさうなら、尼御臺は申すに及ばず、恐れながら將軍家とても、憚り重んじたまはんずらん——まッた御愛兒政範ぬしも、ゆめさらさやらの懸念もなうて、立身出世あるべき筈を——げにまゝならぬ世とはいへど、容貌こそはよう似たれど、發明伶俐は千幡君にはるかに優る稟性——こよなき家門に生れながら、げに母上の仰の如く、先を取越し案ずれば、心にかゝる和子がゆくする。牧サアそれゆゑに今日を限り、時政どのとの縁を切つて黒髪おろし——みづからさへ無いからば、和子が身に嫌疑もあるまい——どうぞあの子の行末は、ナウ婿どの、朝雅どの、頼むは御身の外には無い、稻毛親子とも協議して、どうぞ頼ない政範の方になつて下されいのう。

稻「アイヤ其の御思案、よろしかるまい。」
トまづかにいひ、牧の方の下手にすまふ、牧の方朝雅よろしく思入。
稻「イヤナニ、牧の御方、和子の行末を案じさせられ、御隠居遊ばされん御決心は、さることには候へども、御方おはしまさず相成りなば、平賀朝雅どのの在すと雖も、他は悉く他人も同然、和子の後楯ほどく無く——まッた承る所によれば、怪しからぬ今宵の浮説は、前將軍家に一味の輩が申し觸らせしことゝあれども、一旦かゝるよからぬ風説、鎌倉中に廣かつたれば、容易に疑ひは取消しがたし。イヤナウ朝雅どの、一たび染つたる白き糸は、また故の色に復るを難んず。濕るれば草枕の諺あり。御高慮は、いかいでムるな。」

ト氣味あひにていふ朝雅も思入あつて
朝「げにそこものいはるゝ如く、世上一ばいに喧傳したれば、彼の悪説の根を絶つ

こと一朝一夕には叶ひがたし——まったいちはやく根を絶たざれば枝葉を生じ花實を結ぶ。

ト稻毛と牧の方どへ思入あつていふ。此の間牧のかたぢつと思入。

牧ほんに言はるればそれも有理——すりや如何にせば我が子の身の爲 稽されば——それがしが存ずるには——所詮疑ひのかゝりし上は毒食へば皿の喩——

さきんすれば他を制す——此の上はいッその事に 牧エ。

ト朝雅コレとおさへ

トあたりへこなし。

朝ハテ卒爾千万——壁に耳が

朝ござりまするぞ。

ト三人よろしく思入こなし。

第二段

(其一) 薬師堂の落慶供養

上のかた石の階段岡の上に新築の鐘堂階上階下共に三ッ鱗の紋附いたる幕を張り、はるかに大藏郷の山野森林の遠見正面にはッたて小屋新御堂普請小屋場と書いたる棒杭材木いろく立てかけあり。木工四郎作(五十格好)同じく甲乙丙丁いづれも烏帽子袴の時装長き板材にゐならび又は大なる角材に腰かけ銘々下賜の酒を飲んでゐる。恰も本堂にて供養最中、鉦太鼓など賑かにきこゆる。すべて鎌倉大藏郷新御堂背面の躰。

甲ナント北條さまの御威光はすばらしいものか。たつた三月の間に、かういふ滅法界もない薬師さまのお堂が出来た。何でも世の中は威光と金だ。乙、さうとも。お大名衆も多いが、威光くらべぢやア、こちらの北條さまに齒はたゝねえ。四、ほんに齒がたゝぬといへば、お惘然に二品頼家さまは、どうくお薨りなされたけ

(二三) 牧 の 方

な。頼まれぬは人の身の上誰れあらう前の大將軍さまともあらう御身が——ア
 情ないく、なんまみだぶく。甲「ヤレまたお株のお念佛か。おめへのやうに常
 住はかなんでゐた日にやア、所詮は人間をやめにやアならねえ。工「さうよく、世
 の中は廻り持よ。騙る平家久しからず、あつちが下りやアこつちが上り、天運とや
 らが順環して、北條さまの御全盛。四「こちどらが願うては、ねつから聴かッまやら
 ぬ神佛も、全盛な北條さまが願はッしやれば、二つ返事の御利益。甲「牧の方さまの
 御願が叶ひ、御秘藏子の政範さま、お齡はたつた十四なれど、從五位下左馬ノ介さま
 にならッしやッて、今度御臺所さまお迎ひの爲に御上洛、御副役は平賀右衛門佐さ
 ま、畠山六郎さま。四「其のお祝ひやら、御祈禱やら、お堂の落成たお慶びやら、前代未
 聞の此の御供養。乙「其のお庇でこちどらまで、たらふく酒が飲めるといふのは、ナ
 ント有難いことではないか。

ト皆々よろこぶ、四郎作ひとり浮かぬ顔。
 四人盛ンなれば天に克つ、お惘然なのは前將軍さま、あのやうなお身分でも非業と

第 二 段 (三三)

いふことはまぬがれない。アなんまみだぶく。乙「コウくく、何ぞといふと
 二言目に、ヤレはかねえの、無常のと、北條さまの御全盛におめへはケチをつける氣
 だな。四「めッさうな、なんでそのやうな。乙「ウシニヤさうだ。せうかすると平常
 から、奥齒にはさまつた物のいひやう。なんまみだぶつの譯をきかう。ヤイなせ
 なんまみだぶつだ。

ト立ちかゝる、皆々どめる。
 四「マ、い、い、とことよく。乙「よかねえ。なせなんまみだぶつだ。甲「マアサマ
 アサ、なんまみだぶつは口癖だアな。乙「その口癖が氣にくはねえ。甲「そんな無理
 をいふもんぢやアねえ。乙「何だど無理だ。四「コレサ、マアい、とことよく、
 乙「よかねえ。皆々「マアサ、乙「きかねえ。

ト立ちかゝり總立になる。此の騒ぎのうち、上のかた石段より、前幕の牧ノ左
 源太家來二人つれて出で來たる。
 左「かしましい鎮まりをらぬか。

トこれにて一同うろたへ下にゐる。

左場所柄をも辨へぬ不屈者めが。昔へい〜 左もはや御供養も相濟んだれば、御下向に程あるまじ、立騒いで無禮あらば、どいつもこいつも首がないぞよ。昔ヒエ、左以後をきつと慎みをらうぞ。昔へい〜。左汝等には用事はない穢いものを取りかたづけ、きり〜と退散いたせ。昔へい〜、畏りましてムリまする。

ト皆々はいる。あと左源太家來に向ひ

左コリヤヤイ、牧ノ御方には、こよひ御祈願の御趣意あつて子の刻まで御籠り、たいし相州どの左馬ノ介どのには、もはや御歸館に程あるまじ、予は少々此のところの所要あれば、其の方共身共に代はり、必ず共に粗相なきやう 家心得ましてムリまする。左ゆけ〜。

家來はいる、左源太残り

左ヤレまづこれで相濟んだが、さて、これからが此の方の一大事ぢや、是非とも今日、まづ入道から口説きおとし、あの美しい照子の前を、申しうけねば相ならぬが

どうぞ首尾よくあの入道を。

ト思案の思入此のうち醫師紀河の宗近人をもとむる體にて下手より入來たり

崇そこにおいでなされますは、牧ノ左源太さまではムリませぬか。左あのうつくしい照子の前を 崇モシ〜、左源太さま〜。左申しうけねば相ならぬが 崇コレサモシ、左源太さま。

ト背をうつ、左源太びつくり

左エ、びつくりいたした。和主は醫師の紀河の宗近ではないか。崇よいどころでお目にかゝりました。今日の御供養には、御一門御參會と承り、稻毛ノ入道さまに、火急の御内談がムりました。どうぞ閣下さまのお肝煎で、おあはせなされて下さりませ。左何ぢや、稻毛どのに火急の内談、ハテ似たこともあるものぢやわえ。此の方も稻毛どのに火急の内談第一は此の方の内談、其の方の内談相すまんうち、此の方の内談——イヤさうでない、此の方の内談相すまんうちは、其の方の内談

相濟まんうちは——エ、何だか原意がわからなくなつて去もうた。ヤ、入道は何とせられた今一應尋ねてまゐる、和主は此のあたりに相待ちをりやれ。室、ありがたうムりまする。

左源太石段を上り、はいる。

室、ハテ何のことか、ねッからわからぬ。それはさうと、どう考へても、あの毒薬

ト、いひかけて、あたりへこなし。

室、一足飛に立身して、御典薬になりたいたいばツかり、ツイ稻毛さまの口に乗り、うツかり調劑はまたなれど、どう考へても腑に落ちぬは、稻毛さまの口ぶり——きのふ大工の四郎作が、問はず語りの噂といひ、萬一ひよんなまきぞへに——エ、思ひだすもそゝげがたつ。どうあつてもあの薬を、コリヤ取りもどさにやならぬわえ。

ト、心配の思入。こゝへ向ふより稻毛入道の女照子の前、腰元折枝、かつぎなり、塗笠を持ち、いで来たり

折御病後のおからだゆゑ、嘸お艸臥でムりませう。アレあそこに見えまするが、今

度出来ました新御堂でムりまする。照、スリヤあの御堂に、六郎さまは、折さやうにムりまする。照、エ、うれしや、早う案内してたもいの。折、マ、おせきなされまするな。よう心得てをりますわいなア。

ト、折枝ささにたち、小屋の前へ来たり、宗近を見つ

折、モシ、ちと物が尋ねましたい。畠山の六郎さまは、よもやまだ、アノお下りではムりませいな。室、オ、さうおッしやるは、稻毛さまの——お腰元ではムらぬか。二人、エ、室、オ、あなたさまは御息女さま。

二人は悪い處で見つかつたといふこなし。

室、よう御参詣でムりましたナ。ヤレ、おすこやかな其の御様子、もうおさッぱりと、なされたカナ。折、さうおッしやるは、宗近さま、わかるいどころ——イエ、アノわかるいどころか、ずんとおよろしうムりまするわいなア。

ト、二人貌見あはせ、困ッたといふ思入。

室、それは、重疊々々。ヤ、重疊といへば、先以て幸ひの上、天氣、此の上もない御供

養會、入道さまにはさぞお疲れ、ちやうど愚老も入道さまに 哲アモシ、いさゝか仔細あつて、けふ此のところへ姫さまがおこしあつた其の事は、入道さまには内々ゆゑ 崇ナニおこしあつた其の事は、入道さまには内々とは 折ハイヤノ極内でもりますれば 崇ハテナ、すりや最前お下りでないかとあつたは 折ハイヤノそれは 崇アノあれは 折サア島山の六郎さまに 崇ナニ島山の六郎さまに。成々々、成る程。折アノいさゝか、わたくしが、お願い申す事あつて 崇アイヤ、その儀は兼ねて、成るほど、如何さま——こりや御内密が御尤。よろしう、申した。幸ひ愚老序ムれば、六郎さまを此のところへ 折スリヤアノあなたが——それはマア、忝うぞんと申す、が、どうぞ入道さまには 崇よう、念には及ばぬ。よう、ゆる。

トひとり吞込んで石段を上り、はいる。
折むさくるしうは、ムり申すが、マこれへなど、去ばらくお掛けなされませ。

ト折枝材木の塵を拂ひ、主従腰をかける。照子の前思入あつて

照父上の目を忍び、たつた一言六郎さまの御心根をきいたる上と、やうく、あくがれ来て見れば、忽ち人に見咎められ、あさましい目を見たわいのう。折アレまたしてもお氣の小さい。おいひなづけの中といひ、おちいさいから御一所にお育ちなされたお従兄弟、密事といふではなし、何のマアその御遠慮。今にもあれ六郎さまが、こゝへお出遊ばしましたら、存分お怨みをおツしやりませえ。いざ御婚禮といふ間際になつて、何ぢや、仔細がある、破談する——橋市の賣買ではあるまいし、ヨウマあのやうに言はれたもの。サ、何がお氣にめしませぬ、家柄か、御標緻か、お育ちか、お氣だてか 照ア、コレ、又してもはしたない。誰彼時でもこゝは往來。折ホイ、わたくしと、まこと、が、あんなり、貴嬢がお内氣ゆゑ、マ此のやうにおツしやらば、思ふたのが口へ、ホ、い、い、い。マそれにして、あんなり、なは、先方さま、一年二年三年と、ツイ延び、に沙汰もなく、藪から棒の御破談は、どうした表裏でもりまするか、さつぱり合點が、まゐりませぬわいの。照サア、薄々は知つての通り、そも此のたびの御破談は、伯父婿、島山重忠さま、公け私しの事につき、祖母上御存生の

其の頃さへ父上とはお心合はず、それを祖母さまが苦勞にして兩家の爲にと五歳まで六郎さまとみづからをば、御膝元で手鹽にかけお育てなされし海山の御恩がへしもならぬ間に、祖母さまには御大病其の御いまはに忝なや、六郎さまとみづからをば、行末必ず夫婦にせよ、それぞすなはち天下の爲、兩家の爲ぞとくれぐれも繰り返しての御遺言。何辨へぬ子供氣にも、世に嬉しかりし約束の、反古となつたるけふこのごろ。

ト照子の前愁の思入。此のトタン、折枝ふと石段の方に目をつけ

折ア、モシあそこへ六郎さまが嬉しや、お従者もおつれささらず。幸ひあたりに往來もなし、ナア申し日ごろのお怨み存分におツしやりませ。

ト折枝下手へゆきかける。

照ア、コレ何處へ。ナウコレ待ッて、そなたがこゝにゐやらいでは、折イエ〜速に歸りまする、ツイアノ一寸、照ア、コレ折枝——ナウまッて——ア、コレ折枝さかぬふり、足早に下手へはいる。照子の前あとを追うて下手へ行く、此

のうち、島山の六郎重保、石段を下り人を求むる風情、四下へこなし、上手を見廻しながら真ん中へ、照子の前は下手を見やりながら真ん中へ、双方おぼえず突きあたりてびっくり、よろしくこなし。六郎無言にて上手へ戻らうとする、照子の前こらへかねし思入、思ひ切ッてかけより、六郎の袖をひかへる。

照、嗚、まッて下さりませ。保、さういはるゝは、稻毛の御息女、照子の前どの。何ぞ御用ばし、ムりまするか。

ト袖を拂ふ、照子の前うつむいてすゝり泣き黙ッてゐる。

保、さてはそれがしに用事の人とは——公向の御用ならば、只今にも承らん私事に候は、往日申進せし通り。御用とは何事で、ムるな。

照子の前ヤハリ無言で泣いてゐる。六郎ツカ〜と行かうとする、照子の前あわてゝおひすがり、また袖をひかへる。

保、馴々しおはなしなされい。照、六郎さま。あんまりでムりまするわいなア。親と親とはどうあらうと、自からとあなたとは、六歳五歳まで一所に育ち、大きうなつ

ても北條の御別邸では面をあはせ互ひに氣心知りあうて親と親とが仲たがひを、必ずなだめ行末は祖母上さまの御遺言を、保ヤア祖母上の御遺言を、忘れぬ御身が何として祖父時政公のを説き惑はし祖母上をおしこめまゐらせ北條家の後妻となりし、あの牧の方に阿りへつらふ父と兄とを諫めたまはぬ。照サ、それにこそは譯あること、保剩へ、そのみならず前將軍家禪室様をば御身が父の重成入道讒言なせしそのみか、修善寺にての御他界は——御横死と専ら取沙汰。照エ、保「此程の問答も庭訓に戻る憚り。さらばでゐる。照ナウまッて下さりませ、父入道にそのやうな非道の行ひあらうとは、保イヤ其のいひわけ無用でムらう、非道の嫌疑解くるまでは、まッた父と一つで無い、忠義の證據の見えざるうちは、照すりや其の證據が見えたなら、亡き祖母さまの遺言通り、

ト照子の前思はず取りすがらうとするを、六郎ついと身をすさり
 保ヤア、公私を混せし其の一言聞く耳は持ち申さぬ。
 ト口早にいひ見かへりもせずはいる。此の以前石段より牧ノ左源太酒に酔

うたるこなし酒おくびをしながら下りかけ此の躰を見てびツくり嫉妬の思入ぬき足して下り來たり、普請小屋のかげに去のぶこと。照子の前よろしくこなし、聲たて、泣き伏す。ト「貌をあげ思入あッて

照いはうと思ひし万分一も——あんまりすげない、六郎さま。
 ト此のうち左源太よろめきながら忍び足に立ちいで、照子の前のうしろへ來て

左「あんまりすげないで、照子の前
 トだしぬけに抱きしめる。
 照エ、誰れぢや〜。左「み、身共ぢや。照エ、慮外な誰れぢや〜。左「アイタ
 アイタ。ハテ大事ない〜。身共ぢや〜。
 〆 トいひながら手をはなし前へ來て、まッて貌をだす。
 左「ソレ身共ぢや。ハ、ハ、ハ、ハ、牧ノ左源太輝英でゐる。
 照子の前むッとしてきツとなり

蒙味の細民まで 稗信心膽に銘し 政隨喜の思ひを 二人いたしましてムリま
 する。牧、建立の其のはじめにかゝる大造を營まんは前將軍家二品禪室伊豆にて
 御他界の間際といひまッた近年御賦役かさなり士民疲勞の折柄ゆゑ世上のおも
 はくもいかいなんど、例の畠山重忠父子まッた義時の異見もありしがもとより此
 れは私し事病身なる左馬ノ介が、一身安全の宿願ゆゑ更に下民をわづらはさず夫
 時政が自力の營み如來も御納受ましましてか、滞りなきことたびの落慶。これとい
 ふのも畢竟は、親子の衆の骨折ゆゑ、ほんに嬉しう思ひまするぞや。稗惶れ入ッた
 る其のおことは、滞りなき御落成は、全く以て、時政公の御威徳、人皆なづきえたがふ
 ゆゑ、令せざれども事はかどりまた、く間に此の大造 政天が下廣しと雖も、北條
 家の御威光に、ならぶものなき御全盛 稗憚りなく申さうならば、將軍家は置き物
 同然誰がいッし鎌倉山の星月夜、星は即ち大小名誰が目にもつきは將軍大日輪の
 執權は、光あまりにまばゆきゆゑ、名所の名にこそうたはれざれ、照らすは月の幾百
 倍

トいひかける、此のうち政範よろしく思入、牧の方重成を目でおさへ、政範へ思
 入あッて
 牧、イヤナウ、其の星月夜といふことは、星影月に似たるをいふとか。鎌倉山にいひ
 かけしも、名所ゆゑにはあらずと聞く。オ、それはさうと、日もはや全く暮れはて
 たり、ドレみづからは改めて、誦しかけし御經を。今がたもいうた通り、夜半の風の
 身にさはらん、和子は館へ片時も早く
 トこなしあッていふ。
 眞仰ではムりますれど、母上が子の刻まで、御こもりあるからは、それがしも子の刻
 までは 牧、イヤナウ、それは要なき遠慮。義時どのも、右衛門佐も、さきだッて歸ら
 れたり、母の身は案じずとも、早う館へ戻りやいのう。稗、あのやうに仰せあるに、お
 違背あるは却ッて御不孝。御方の御意にまたがひ、サ、御館へお歸りあれ。今こ
 ろは遠州公にも、嘸かしおまぢかねに候はん。政サ、お歸りなされ〜。
 ト皆々すゝめる。政範心の残る思入やがて決心して母に對ひ

鶴さやうならば母上さまお先へ退るでムりませう。牧オ、それがよい。レ次郎、侶まはりを 政ハ、心得ましてムりませう。

ト次郎立たんとする此のトタン下手にて「うせう〜ト左源太の家來藤内藤吾前の場の木匠四郎作をひつたて堂の前へ來る。次郎たちあがり廣椽に

いで

政ヤアさう〜しい何事なるぞ。吾ハッ稻毛さまへ申上げます主人左源太の命にて御境内に非違なきやう警固いたしまかりありしにうさんなるは此れなる老奴 内最前暇を遣しましたに尙うる〜と徘徊なし 吾只今もお幕の蔭より、ま

きりにこなたをさしのぞきけしからぬ獨りごと 内なんまみだぶつとちやんばんに、お館をさみなす口吻此奴胡亂と存せしゆる 二人ひつたてましてムりませる。四なんまみだぶ〜。政ナニお館をばさみせしとは。吾左馬ノ介さまがお十四にて從五位下に御昇進は法外過分と申せしのみか 内榮耀には餅の皮分に過ぎた御全盛此の行末が懸念など、吾存外なることを申し散らし、剩へ前將軍

家の御他界をば當お館の御まわぎと、いはぬばかりの奇怪の雜言。四なんまみだぶ〜。 稻ナニ前將軍家の御薨去をば當家の御所爲と申せしとな。容易ならざるその一言。察する所そやつめは前將軍家をそ〜のかし御謀反す〜めたてまつりし、比企仁田が餘類ならん。次郎さつと詮議いたせ。吾仰の如くこやつめは、もとは比企さまにお出入せし木匠めでムりませう。 稻さてこそ〜。油断ならざる當節柄、必定同類これあるべし。ソレまばり上げて白状させい。四アコレ待ッて下さりませ、お處刑は厭ひませねど、白状することはムりませぬ同類も何もムりませぬわい。ツイ思ふことが口へ出て、アなんまみだぶ〜。 政ヤアいけしぶとい其の老奴ぶちのめして白状させい。吾内心得ました。

ト藤内藤吾たちかゝる。此のうち左馬ノ介思入あッて 鶴兩人控へい。吾内ハ、鶴無用なるぞ。吾内ハ、。

ト二人ひかへる。稻毛親子不審の思入 稻何故に政範どのには 政此の拷問を 稻無用なりとは。鶴其の老人の申す所

は、一々ことわりぢやとぞんじまするゆる。政何とおッしやる。
 トこれにて牧の方もよろしく思入。政範少しく膝をすゝめ
 鮎長兄相州義時とのすら、御齡四十までは小四郎にて、いまだ受領の御沙汰無く、ま
 ッた父上時政公は、草創の御功臣御舅にて在せしかど、君御一代の其の間は曾て受
 領のお許しなく、六十歳の御時まで、北條四郎と申せし由。其の例には似もやらす、
 寸功もなき若輩が分に過ぎたたびの任官冥加の程もおそろしとみづからすら
 思ふもの——其の老人が正直の言葉に科がムりませうや。稻左馬ノ介の、お言
 葉ながら、それはちとちがひ申すぞ。積善の家には餘慶あり、父祖の徳は子孫に報
 ふ。時政公の御功勞によつて、此のたびの御任官何の其の遠慮に及びませうや。
 政況や才智拔群にて、大人も及ばぬ政範との、御任官に何のひがこと。それをさみ
 なす此の輩奴剩へ、前將軍家に最負なし當家をそしるは必定曲者。いで、それがし
 が苦を加へ、本音を吐かせ御覽に入れん。
 トまた立ちかゝるを

鮎「アイヤ、其の御折檻には及びませぬ。政とはまた何故にな。鮎老人が正直は、面
 と言葉にあらはれたり、曲者とは思はれませぬ。前將軍家の御他界に、不審をい
 くも尤なれば、當家の所爲をわやしむも、ことわりかどぞんじまする。喃母上、長兄
 はじめ重忠とのが御異見ありしは、このこと、此の政範が過分の任官まつた御他
 界の間もなきに、目ざましい造營供養人皆目をそばだて、心のうちでそしつても、威
 勢におそれ、言はぬと聞く。老人が直言は、此の方のよき誠め、慮外をゆるし、放免あ
 るやう、母上へ願ひまする。
 ト此のうち四郎作涙を流し、思入
 四「アありがたいおこゝろさし、活如來さま〜。かういふお方があればこそ、ぞん
 な業も消滅し、一人出家して九族天に昇るとやら。アなんまみだぶ〜。
 ト牧の方ヒツと思入あつて
 牧なるほど、和子のいやるもことわり、殊には供養會の折でもある、薬師如來の寶前
 にて、苛責の苦はいとあさまし。ナウ次郎、其の者の詮義は無用そのまゝ、放ち遣し

ませうぞ。政スリヤアノこやつをこのまゝに 牧いかにも。これも罪業消除の
いとぐち 政 稻毛 牧 イヤナウ、これがまことの放生會ぢやわいのう。

ト 稻毛 親子がてんのゆかぬといふ思入。

政 ヤオレ者共命冥加の耄奴めを、ナツレ、きりくどぼったてませう。

ト 藤内 藤吾に向ひ、まばりあげて邸へつれゆけトこなし。政 範それと見て取
りし思入。

鶴 ア、イヤ、その老人には、いさゝか問ふべき仔細もあれば、それがし只今引立て申
さん。政 それには餘りに憚り多し、かゝる卑しき下人をば 鶴 それがしが勝手に
れば 政 ぢやと申して 鶴 ハテ勝手ぢやと申すに。政 へー。鶴 左様ならば母上
様御兩所にも御免下さりませう。鶴 左馬ノ介どの、お立ちなるぞ。

ト これにて従者小童大勢いで來たる。政 範四郎作に早うついて來いとこな
し。四郎作手を合せ拜むこと。皆々政範を警固し、向ふへはいる。

牧 圖らぬ事に思はぬ暇どり、御身がたも嘸氣づかれ。餘事は左源太が心得居れば、

遠慮なら退出して、一日の疲れをお休めあれ。ドレ更めて御經を。

ト かねたへの經づくゑに向かはんとする。此のうち入道親子貌を見合はせ、思
入あつて膝をすゝめ

稻 アイヤまばらく。最前より申上げんくどぞんじながら、兎角何かと人目の妨
げ、さしひかへまかりありしが、せんころ竊にきこえおきし、南蠻傳來の秘密の藥劑

牧 エ、稻 やうくのことにて、手に入れましたりませう。

ト 懐中より式の如く包みたる藥劑をとりいだし、牧の方の前に置く。牧の方

稻 さて此の毒藥の効能といッば、効神の如しと雖も、不思議の藥劑故、皮膚の色も變
らず、外目には只急病と相見ゆれど、四五日にて衰弱なし、竟には全く命を取る、おそ

ろしき大毒藥。牧 エ、稻 まった此の如く色もなく絶えて香りもムらぬゆゑ、如
何なる食にお加へあるも、決して勘づかるゝ氣づかひなし。時機は失ふべからず、
御臺所御下向以前に、御下手あるが最上策。さすれば万一にも事露れ、一大事に及

ふといふとも朝雅上洛の其の間に、かなたにて策をめぐらし、かやうくと兼ねての手配り、やつがれたた策略あり、決して御懸念に及ぶべからず。何はまかれ、此の品は、またと得がたき奇薬なれば、人目にかゝらぬ其のうちに、何卒お納め下さるべし。

ト此のトタン御堂のうしろ、下手幕蔭より、前の場の醫師、紀河の宗近うかいひいうる。同時に同じく上手、立木のうしろより、北條相摸守義時、忍びすがたにて立ちいで、様子を窺ふ。宵闇にて、四下おぼるげなるこゝろ。此のうち牧の方いひだしに、くいといふ思入よろしくあつて

「イヤナウ重成の、今更となつて、此のやうなこといふときは、嘘や、女子はいふ甲斐なし、何事も出来ざる、頼まれぬ根性ぞと、嘘さげすみもなされうなれど、榮耀に限りは無しとかや、今更やうく、心附けば、空怖ろしい身の罪障。此の身の榮花我が子の譽ありし昔の月見れば、盈つればかけし宿願の、忽ち叶ふ如來の靈驗——あらたかなるを見るにつけ、ぞゝる懺悔の萌せし折柄、けふまた導師が供養會にあり

がたかりし御宣説——空怖ろしくかたじけなく、さつぱり心が變はりましたわいの。政、頼、エ、。牧、いつぞやの商議は、只一時の夢と思ひ、淺ましいその品は、早う取り納めて下さりませ。

トこれにて親子貌見わはせ、呆れし思入、入道膝を進め、稱牧の御方、そりや御本心で仰せらるゝか、イヤサ御本心で——ナニ御本心——ハテナア。

トよろしく思入、ずつと寄りて聲をひそめ

「イヤナニ榮耀には、際限なし、盈つれば虧くると仰せあれど、人間わづか五十年、花咲かぬ木も秋來れば、落葉に漏れぬ有爲無常。十二分と望をかけ、やうやく八九分が世のならばし。はじめよりちいこまり、三ヶ國の受領もあらば、世の思ひでとおほしめさば、兎角思ふとはたがひ易し、老公は早や古稀の御齡、一旦萬一の御事あらば、厄御臺は申すに及ばず、相模守の苦手なれば、笑止や、和子のうしろ、楯は、天にも地にも朝雅の——たゞ一株の稚櫻うきをみ山にうづもれて、日蔭の春をや送

りたまはん。政心憎しとおぼしめす、尼御臺が御權柄も、當將軍家の御腹ゆる。主客たちまち處をかへ、尼御臺になり代はり、新將軍家の御母と、かしづかれたまはんもお心一つ。稻いま日ッ本國に、天子はあれども無きに等し——六十餘州に此の上なき、榮華の手蔓が目前に散らつくものをいふ、甲斐なや、事成らんず今となり俄に二の足ふませせらるゝは——さては左馬ノ介どの、御任官にて——さすがは女性。すりや從五位下で御満足か、イヤサ、左馬ノ權ノ介ど、日本六十餘州の總追捕使大將軍のみくらゐとは、天地のちがひと御存じ知らずや。齡ばへなら、貌ばせなら、瓜を二つの政範どの、新將軍家とならべて置いて、何らを取ると申さんに、似たるが中に勝劣あり、品といひ、器量といひ、たが目にも和子へ落札——然程の器量はありながら、くちをしや、御陪臣のひこばへゆゑ、右を見ても左を見ても、皆丈高き老松古柏。政其の古株に蔽はれて、花は咲くとも見えがくれ埋もれたまはん行末を、御無念とはおぼしめさぬか。牧サア、その行末も氣がゝりなれど、生中のこと、まいたさば自身は兎も角も、政範が身の上に、稻サ、生中のことならば、其の御懸念もことわりな

れど、六十餘州の大君をつみなはんもの天下に無し。事なつたる曉には、やつ七郷は築山同然。政七里が濱も泉水ついき。稻將軍宣下の御拜賀に、千幡どの、衣冠束帯、去年の拜賀を見るにつけ、姿かたちもそっくりあつた、何と見るやうではムりませぬか。政かほと申せど、御がてんなく、いふ甲斐なくも、掌に握りし寶を棄てさせらるゝか。牧サアそれは、稻尼御臺にはわるすむせられ、相州どのには邪魔がられ、さらでもいとあぢき無き、老後を送らせたまはん所存か。牧サアそれは、稻機會は失ふべからず、此の藥劑は天の賜。政片時も早くお用ひあつて、稻モシ御方、政牧の御方、稻いかいでムる。政いかいでムる。

ト兩人つめ寄る、牧の方ヒツと思入。此のトタンどろくど俄にはげしき山風の音。堂内の燈火一時に消え、毒藥の包ひらくど庭上に飄りおつる。

政ヤ、只今の山嵐に、稻誰そ無いか。ともしびく。政父上、大切なる藥劑は、稻オ、いかにも。ヤ、無いぞ。誰れかある、ともしびく。

ト此のうち入道親子堂内をさぐりまはりて、藥包をさがすこと。

和正しく風にて庭上へ——ッレ次郎人の來ぬ間に 政ハ。

ト此のうち下手より醫師宗近窺ひいで、這ひまはりて薬の包を拾ふ、トタンに上手より義時うかいひいで、一寸たちまはり、次郎其の間へはいりダンマリ模様、ト義時薬の包を奪ひて元の幕蔭へ身をかくす。醫師は一散に向ふへ逃げてはいる。

政さてこそ曲者。

ト向ふを見込みキツトこなし。堂内の牧の方稻毛不審の思入。左源太松炬をとってかけいづる。

(其三) 山下の人殺し

正面岡の裾を見せ所々に立木、藪だゝみなどよろしく、上手に大なる松の立木。下弦の月やうく昇りたれど、四下は尙おぼろげなる心、すべて大藏郷南の山下道の體。爰へ向ふより前の場の木匠四郎作「なんまみだぶく」ト念佛を

どなへながら出で來たり、よき所にどまり

四若殿さまのお慈悲にて、借しうもない命を拾うたれど、世の成行を見るにつけ、淺ましいことばツかり。御最負うけし比企さまはじめ、仁田さまも御滅亡、上つがたから下々まで——アあさましいく、ちやうど瘦犬の食争ひ、之れを思へば、早う如來さまにひきとられた女や婆々アどんが羨ましい。なんまみだぶく。

ト念佛をいひく正面へ來る。此のトタンばたくにて、向ふより醫師紀河の宗近、一散に逃けて來て、四郎作に突きあたり、けしとんで飛びこえる。同時に又ばたくにて、稻毛の次郎、拔刀にて一散にかけて來る。宗近うろたへて松の幹に上らうとして、上られぬことなし。此の中倒れたる四郎作起き上る、次郎かけつけ宗近と思ひ、一刀に斬倒す。宗近之れを見て、腰のぬけたることなし、松の幹にだきついて藏れてゐる。次郎死骸に立ちより、月影に透かし、貌を見ること。

次ム、さてこそ。

ト引起こし懐中を探ることよろしく、トッさがしものゝ見わたらぬといふ思入不審だといふこなし。
去一度ならず二度までも様子を窺ふ不敵の曲者心はやり只一刀に——エ、まなしたり。正しく外に今一人。

ト思入。宗近これを聞きふるへる。
去詮義の手蔓を失ひしは、我れながら不覺の至り。

トよろしく思入。此のうち下手に松炬の見ゆるこゝろ。次郎驚き、急に血刀を拭ひ、鞘に收めんとする、トタンに下手より左馬介政範、老僕に松炬をもたせ、太刀持の小童をつれ、潜行の體にて出で來たる。次郎つゝと出で、血刀にて松炬をたゝき落す。老僕驚いてけしとふ拍子に、四郎作の死骸につまづき、ワツといッて逃げる。此の聲に驚き、小童も太刀を持つたるまゝ、一所になり、一散に元來しかたへ逃げゆく。政範指添へに手をかけキツトとなる。此の間に次郎元來し方へ一散に逃げのびる、之れと同時に紀河の宗近松の蔭より這ひ

だし、起き上り、上手へ逃げうとする。政範目早く見どめ
曲者まで。

トこれにて宗近また腰のぬけたるこなし、へタクタとなる。政範走りよッて襟上をとる、宗近ふるへながら手をあはせる。

眞合點ゆかざる此の場の光景。オ、無慚なる下人のまかばね。今逃げ去つたる曲者は、必定汝が同類ならん、眞ッ直に白状いたせ。まわゝゝわたくしは、どゝ同類ではふりませぬ。御免なされて下さりませ。

ト此のうち政範月影にて宗近の貌を見ること。

眞汝は醫師の宗近ではないか。ま、エ、さうおッしやりまする貴下さまは——オ、若殿でふりましたか。眞、ヤイ宗近定めし仔細を存じをらう、眞直に申さずば、疑ひは汝にかゝるぞ。

ト四郎作の死骸に立ち寄り、つくゞ見て

眞こりやこれ正しく最前の——ヤイ宗近、此の夜深に何用あッて、汝はこゝらに徘徊

徊きををるぞ。宗、その儀は。鶴、老人を殺せしは何者ぢや。宗、サその儀は。政、ヤア胡亂な眞直に申さずば父上に申しあげ、嚴重に申し附けうか。宗、マ、申し上げます。ぢやによつて愚老めが、この場に居あはせました其の事は、何卒お慈悲に、御内分に、鶴、ナニ此の場に居あはせしを、内分にして呉れいとは。宗、愚老が此のところ、居あはせしことが知れますれば、此の首がムりませぬ。その老人は愚老と見ちがへられ、ツイばつさりどやられました。ヤレおそろしや。政、シテ何故に其方は、此の場に居あはせしを包み藏すぞ。宗、その儀は、どうもあなたさまには、鶴言はずば、邸へ引つたてやうか。宗、ぢやと申して此の事ばかりハ、鶴、ム、童と侮り白状せぬな。此の上は、邸へ歸り、仔細を父上へ申しあげん——さうぢや。ト政、範行かうとする、宗、近あわて、袖をひかへ。宗、申します。ぢやによつて御大事を、立聞しました其の事は、何卒あなたさまのお慈悲で、お包みなされて下さりませ。鶴、ナニ立聞きせし大事とは。宗、サア其の大事といふは、鶴、其の大事とは。

ト宗、近絶體絶命だといふ思入。

宗、何をおかくし申しませう、いつぞや稲毛の入道さま、ひそかに愚老をお招きなされ、云々の仔細がある、毒藥調合仕れど、のツびきならぬお頼み。慾に迷うて毒藥を、ツイ調進致したれど、よく思へば心ならず、御供養會はこれ幸ひ、御退出をまちらけて、入道さまにお目にかゝり、何卒藥を取戻さんと、待つ間のたいくつ御堂の脇、聞くともあしにお三方が、世に怖ろしい御相談。鶴、ナニお三方とは。宗、稲毛さま御親子と、鶴、稲毛父子と。宗、御母上の牧の御方。鶴、エ、シテ其の怖ろしい御相談とは。

此のう、ち立木の茂りたる間より、北條相模守義時、前の場の忍び姿にて、ひそかに立ちいで、二人の問答を立聞きしてゐる。

宗、恐れ多くも將軍家へ、私しめが調進せし、其のおそろしい毒藥を、トいひかける、義時つゝと出て、抜きうち、宗、近を斬り倒す。宗、近すく息絶ゆる。政、範おどろき飛びすさり、指添に手をかけ、キツとこなし。

義 お騒ぎあるな左馬介——義時なるは。

ト血刀を拭ひ鞘に收める。

義 ヤ、さういふお聲は——オ、あなたは兄上此の體は。義 ホ、不審はもツとも——まづこれへ。

トこれにて政範前へでる。

義 下人は口のさがなきもの——かりそめにも母上の御ン身の上にかゝはる大事

——ふびんながらも——ナ

ト死骸へ思入。

義 スリヤ兄上には、最前よりの一伍一什を 義 いかにも——まツた御ン身が懸念の種たる、其の怖ろしき藥劑も、仔細あツてそれがしが、圖らず手に入れずなはちこゝに 義 エ、。すりや今さゝし一條は、アノ眞實でムりまするか。義 申すもうたてき事なれども、我れはたいさゝか仔細あツて、圖らず今宵の御密談を 義 エ、。すりやいよゝ母上さまが 義 コレ。御密談の其の最中に、さど吹きおろす山嵐

方 の 牧 (四六)

義お騒ぎあるな左馬介——義時なるは。

ト血刀を拭ひ鞘に收める。

鯨ヤ、さういふお聲は——オ、あなたは兄上此の體は。義ホ、不審はもツとも

——まづこれへ。

義下人は口のさがなきもの——かりそめにも母上の御ん身の上にかゝはる大事

——ふびんながらも——ナ

ト死骸へ思入。

鯨スリヤ兄上には、最前よりの一伍一什を 義いかにも——まツた御ん身が懸念
の種たる其の怖ろしき薬劑も仔細あつてそれがしが、圖らず手に入れすなはちこ
ゝに 鯢エ、。すりや今さゝし一條は、アノ眞實でムりまするか。義申すもうた
てき事なれども、我れはたいさゝか仔細あつて、圖らず今宵の御密談を 鯢エ、。
すりやいよゝ母上さまが 義コレ。御密談の其の最中に、さど吹きおろす山嵐



——まづこれへ。
トこれにて政範前へでる。

義下人は口のさがなきもの——かりそめにも母上の御身の上にかゝはる大事
——ふびんながらも——ナ

ト死骸へ思入。

鶴スリヤ兄上には、最前よりの一伍一什を、義いかにも——まッた御身が懸念
の種たる、其の怖ろしき薬劑も、仔細あッてそれがしが、圖らず手に入れずなはちこ
ゝに、鶴エ、。すりや今き、し一條は、アノ眞實で、ムりまするか。義申すもうた
てき事なれども、我れはたいさ、か仔細あッて、圖らず今宵の御密談を、鶴エ、。
すりやいよ、母上さまが、義コレ。御密談の、其の最中に、さど吹きおろす山嵐



燈火消えし宵闇の御堂の庭に吹きとぶ藥劑——ゆくりなくも手に入れたり。是れ天道の助くる所か。焦眉の大事は除きたれど、心にかゝるは此の行末。篋エ、なさけなや、淺ましや、さういふお心おはさうとは、さら〜思ひもかけざりしが、心ならぬ事あるゆゑ、供養會の歸途、内意を含め、從者をかへし、最前ひそかに兄上の御館までまゐりしところ。義、同じ心に我れもまた取つてかへせし新御堂。篋、藥師如來も母上の其の邪まな御心をまもつてはたまはらぬか。何足らぬことも在さぬに、なせそのやうなおそろしい世にあさましい御くわだて。エ、なさけない母上さま。

ト政範よろしくこなしあつて、なげく。
 善聲高し、人や聞く。子は親の爲にかくすと、かや此の上は死を以ても、兄弟互ひに母を諫め、道ならぬ御心を、正路に戻しまゐらすべし。畢竟おことを秘藏のあまり、ふと御心の迷はせられ——イヤサ、誠心を以て諫めんになど御迷ひの晴れざるべき。ゆめ忠孝を忘れたまふな。とはいふものゝ、兒故の間には。篋エ、義、アイヤ、

子ゆゑに迷ひ、子ゆゑに悟る、煩惱やがて菩提のことわり。一つ環の接目となるは、子を思ふ親の愛着心——迷ふも悟るも子を可愛しと思へばこそ。天にも地にもかへじとまで、復なきものにおぼしめす、おことが諫めまゐらさば、御迷ひの晴れんは必定。よくよく分別し賜へよ、母上、父上の御大事、まッた天下の御爲なるぞよ。ト思入あつていふ。政範ヒツと思入。義時懐中より毒薬の包を取りいだし、此の品は御身の手に——御異見申さん其の折の、一つの證據ともなるべければ。

ト政範薬をうけとることありて

範「サアそれにつぎ兄上に 義ア、コレ。あの人聲は、正しく迎ひの

ト下手へ思入。此の時下手より、以前逃げゆきし老僕小童先きに、義時の家臣數人、松炬をもちて入り來り、二人を見て

甲「ヤ、それに渡らせらるゝは、乙「我が君では、ムりませぬか。丙「オ、左馬ノ介さまにも、丁「御安泰にてゐらせられ、皆々祝着至極にぞんじます。義「オ、汝等は

左馬ノ介を警固し、片時も早く上館へ 皆ハ、ア。

ト松炬をふりてらし、死骸を見て驚く。

義「ア、コリヤ。此の場の様子は、他言無用、老公の御下問あらば、下館よりと申しあげよ。イザさらば左馬どのにも、範「さやうならば兄上さま。義「サ、おゆきやれ。何事も明日の日また

ト氣味あひ。政範心の残る思入、皆々に警固せられ、上手へはいる。あと義時ひとり残り、思入。

義「女子と小人とは、養ひがたしと——機運おのづから循環して、天北條氏に福す、十かへり松の榮えも、今の間、その機を知らぬ女性の猿智恵——ア度しがたしと。ふびんながら、政範は、遂には幹を枯らすべき、其の毒蕪のは、ひこる原、それとなく謎をかけ、みづから枯れよと、勸めおさしが、齡にはまして、利發なれば、所詮は與へし毒薬にて——ム、心外一物無し、仁義骨肉、觀すれば、皆方便。愚昧ある者、此の理を覺らず、親疎に執着して、親を傷ひ、名に執着して、實を殘ふ。テモあさはかな人ぞ、

ろぢやなア。

第三段

(其二) 七夕の大雷雨

正面廣椽附の奥座敷照子の前居間の體書棚小簾など飾りつけよろしく下手
 さげて廊下續き廻り椽の別室。居間前秋草の茂りたる前裁まよろしく流れ。
 下手枝折戸。よき處ろに數脚の机をすゑ幾本の燈臺に火を點し香爐供物な
 ど總て古式の通り。居間の上手に照子の前机をひかへ菊燈臺の下に梶の葉
 に古歌を書いてゐる女童甲乙小手卷に巻いたる願ひの糸一いろ十筋づゝ五
 色小手卷の數五ツを竿にかけてゐる。
 甲「どせに只一夜てふ棚機つめの契さへこそ羨まし身はすて小舟梶の葉にこが
 るい思ひかくとだに誰れかさゝぎの橋わたし 漣稻毛の入道重成が此の秋の
 かりやしきつぐらぬ庭の千草かけいつしかくいるまよるく水小萩がくれの蟲

の聲星祭る夜の風情なり

ト此のうち女童糸をかけまふ。照子の前梶の葉に歌を書きかけ

照「オ、ふたりとも太儀であつた。用あらば呼ぶ程に遠慮なう退つて休みや。や
 んがて折枝が戻りやツたらよい褒美をとらせませうぞや。甲「ありがたうムりま
 する。乙「さやうならば 甲乙「わたくしどもは 照「オイノウ。若し折枝が戻りや
 ツたらすぐにこちへというてたもや。甲乙「かしてまりました。照「ゆきや〜。
 甲乙「ハ、ア。

ト廊下よりはいる。

漣「どもしのかげに照子の前まよんぼりと筆さしおき

ト此の間歌をかきかけて愁のこなしあつて

照「いつぞや薬師の御堂にて父上大逆の御所行ありと重保さまのお物語り、びつ
 りはまたなれどよもやと思ふ未練から心ためさん方便かと重保さまをば疑ひし
 が思ひぞあたる昨日けふ。萬一疑ひが眞とならば日ごろの願ひは皆うたかた生

き存へて何たのしみ。あの折枝にいひつけて實否を探る其のうちも心にかゝる善と悪。吉左右か、悪左右か幸ひこよひは七夕の願ひ一つは叶ふといふ、あの遣り水に祈願を籠め、此の梶の葉を當座の歌占。さうぢや〜。

淨、ひとりうなづき前栽に降りたつ裾の秋の風、千草の蟲も音をどめて、かたわれ月のかたふくや、空くろく〜と雨もよひ、

ト文句の通り、照子の前歌をかきたる梶の葉をとりて階子を下り、まよろ〜

水に立ちより、空に向ひ祈念すること。

照、我が祈る事は一つぞ天の河空に知りても違へざらん。表は吉兆裏は悪兆。淨、祈願をこめて抛入る、折からさつと落す風、おなやと見る間、梶の葉は行衛白萩夏萩のまづえがくれに流れゆく。

ト照子目をねふり、梶の葉を水中に投げる。ドロ〜と風の音、梶の葉、まかけにてはるかにとび萩の下枝にかくれて流れゆくこと。

照、エ、どんな。もしもやこれも、願事の

淨、若しや叶はぬ知らせかど、又女氣のしをり戸口息せきかけ入る腰元の折枝は目早く

ト照子の前愁然と流をみやり、よろしく思入。下手より折枝急がはしくいで來たり、折枝戸をあけて内に入り

折、オ、照子の前さま、こゝにおいでなさいましたか、一大事になりましたわいなア。

照、エ、大事とは心が、折、マ、あれへ、こゝは端近

淨、誘はるゝも誘ふも、胸轟くや遠鳴りの神來たるらん、大空は、ぐるみ渡りて物すこ

ト折枝こなしあつて照子の前を促して居間に上る。此の間遠雷の音。

照、シテ大事とは、その仔細は、折、お氣のせくはお道理ぢやが、容易ならぬ御大事、大さい聲ではいはいはれぬこと。大殿さまがお留主ゆゑ、心をゆるし飲ッたか、左源太さまのけふの泥酔お邸からの歸路でがな、小間物巷路の往來で、のめらしやるやら、反吐すやら、お侶は鈍な藤内どの、恰どそこへ出合がしら、貧乏くじと引きおこし、水ま

ゐらする。貌洗ふはづみに落ちし一通の穢い物で汚れたを洗ふはづみに封とけて、ふつと読んでびつくりぎやうてん。マ、これ読んでごらうじませ。

浄いひついでさしだす一通をふるふ手にどり見るよりぎつくり

ト文句の通りわつて
照ヤ、これは父上から牧の御方への 折アモシ

ト折枝よろしくこなし。

淨封もたのみも切れ果て、讀むごとくに驚きの苦痛どかはる阿鼻叫喚わつとばかりに泣き伏せしがすつくとたちまち文まきをさめ奥の間さしてかけいづる

ト照子の前密書を讀むく驚く思入悲歎のこなしよろしく大なきに泣く。

ト、決然と貌をあげ密書を手に持ち、急に奥の方へゆかうとする折枝あわて、袂をひかへ

折ア、モシ何處へ血相かへて——こりや何となされました。照エ、止めやんな、そこ退いた。面とあうて證據は此のふみ。折スリヤお前は大殿さまに、其れを證

據に御意見を 照ハテ知れたこと、そこ離しや。折イ、ヤめつたに離させぬ。如何お年がゆかねばとて、お前はお氣でも狂うたか。これはごまでの御大事、けふまでもお前にまで、お包みなされし御悪事を、今さら御意見なされたとて、おいそれと大殿さまが、何でお聴きなされませう。毛を吹いて疵とやら、破れかぶれといふ事が、どんな大事にならうも知れぬ、お心しづめ、コレ申し、マア、おまちなされませ。照、それちやというて、此のまゝには 折サア其の邊をわたくしも案じたなりやこそ此のおしらせ——マア、下にござりませ。短氣は損氣、此の折枝が、一生の智恵袋事の破れにならぬやう、あざといながら思案がある——マ、下にゐて下さりませ。

淨言葉を、つくいなだむれば、又は、りゆるむ女氣に涙のみこそ、さきだてり

ト折枝よろしくとめる照子の前下にゐて又泣き沈む。

折コレ泣いてゐるところでない、此事餘所より露見せば、お家は滅亡、それのみか、焦れてござる重保さまに、彌勒の世までも逢はれませぬ——サ、ちやによつて

分別どころ、大殿さまの御爲にも、お前の爲にも此の大事は、成ッても大事、洩れても大事、外から露見せぬうちに、コレ申シ照子の前さま、お前の口から内々で、かやうかやうと重保さまへ 照エ、折マ、お聴なされませ。仁義に強いと一ぱいに評判高い、畠山様、ふツとあうた其の時は、つれないやうにお見えなされても、親御様も、重保さまも、お情ふかいお氣質と、よう呑みこんだ此の折枝——サ、たどへ日ごろは、どうあらうと御親類なり、御大事、たのめば引かぬ義、俠心に、さツとあぢやう双方の、破れにならぬ、そのみか親御さまとは、別々の、お前の心も、掲焉に、成るか成らぬか、大事の瀬戸命にかけて、折枝がお使ひ。幸ひこよひは、重保さま、だま腰越にござる筈、お侶がしらは、瀬平どの、此の折枝が、一生懸命、足らぬところは、口上で、十が十まで、まおほせませ。かういふうちも、心がせく、ちやツと一筆、此の事をば 照それちやというて、親の悪事を、折洩らす、が却ッて、孝行なら、何の仔細が、ムリませう。たどへお前が、どのやうに、御意見あらうと、日ごろから、聴く親御さま、ちやムリませぬ。ましてや、此れは、牧の方さま、兄御さま、で御合體、生中な事、いひだせば、毛

を吹き疵の、それよりか、北條さまにも、御縁者なら、仁義に強い、畠山さま、何のお爲に、わるからう。迷うて、ござるところで、ない、幸ひあれに、筆硯——エ、モ鈍な、御料紙

浮ひどり、氣を焦る、まな先へ、ひらめく、稻妻、鳴る、神に、おなやど、すさる、後にも、キラリ、稻妻、及の、ひかり、おツと、たまぎる、聲の下、ぬツとい、でし、稻毛の、入道

ト折枝、料紙、筆硯を、とり、そろへて、照子の、前の、前へ、持、行かん、とする、ト、タンに、雷、近く、鳴る、稻妻、室内に、入る、折枝、ビツくり、たじろき、背後の、襖に、つき、あたる。襖、越しに、刀、刃、あらはれ、折枝、手を、負ひ、倒れる、ト、襖を、け、ひらき、稻毛の、入道、血、刀を、

照ヤ、あなたは、父上さま——こりや、むごたら、しう折枝を、ば、
 誰、かけ、寄る、姫を、は、ど、け、た、ふ、し、
 ト、文句の、通り、あツて

稲いは、うやうなき、不孝者、めが。子は、親の、爲に、匿す、といふ、其の、一、大事を、他人に、知

らせし主親の破滅を思はぬ揃ひしも揃ひし横道者めがうぬ。
淨照子の前貌ふりあげ

ト照子の前起きかへりきつとなつて

照コレ横道といふことを父上あなは知つてかいなア。頼なんと 照今更いふ
はおそけれどもなさけない御くわだて如何なる天魔の魅入れしぞやたとへ非道
の御大望が首尾よう成つても十年廿年只かりそめの御榮花天知る地知る後の世
の報應はおろか此の世でも大悪人の名を取つて浅ましい御最後を今日のまへに
見るやうな。横道者といふことをかりにもおッしやるお心なら御法體にもはぢ
たまひコレ喃申し父上さまお心あらため下さりませ。
淨袂にすがりかきくどけば手負ひもやうく面をわけ

ト折枝手さすをこらへ這ひより

折此の折枝が人智恵も所詮はお家を思へばこそ人で無しとはお情ない。悪事を
おぼしたちたまふも御子孫の御爲に成就ても成らず成就ぬときは何御ぞんじ無

い姫さままでかゝりやつながら悪縁に焦れてゐる御方どのえにしの絲の断れた
なら取りも直さず姫さまの御玉の緒を断らしやりまするがコレ親御さまの慈悲
かいなア。姫さま不便とおぼしめし怖ろしい御くわだて思ひとまつて下さりま
せ 照オ、よういうてたもつたぞ。それはとまでにみづからを——コレ手は浅
い氣をたしかに——必ず死ぬまい死ぬまいぞや。
淨手負ひにひつしと抱きつきいたはる袖に滾々と流るゝ血汐血の涙入道は耳に
もかけず

ト文句の通りよろしくある。

頼ヤア身勝手なるよまひ言女童の知ることかえ。助からぬ汝が命きりくどく
たばりをれ。照エ、なさけない其のおことばすりや此れほどに申しても道なら
ぬ企をば 折思ひとまるお心は二ムモシござりませぬかいなア。頼ハテくど
いしれたことだワ。照ハ、ハア。
淨はッどばかりに泣き伏せしがもう此の上はと父が指添ぬくより早く喉へおは

やど這ひ寄る折枝ひつたくつて我れど我が乳の下深く貫くきつさきさつと流る
血は瀧津瀬折枝は苦しき息の下

ト照子の前つゝと寄りて入道の指添を抜き自害せんとする折枝指添をひき
たくりて我が乳の下を貫く照子驚き介抱する。

折ア、モシかまうて下さりませぬ。どうせ死にゆく此の折枝が最期に残すたつ
た一言——お前様は今こゝで空に死なしやる御身で無い。叶はぬまでも異見し
て命のばり親御さまもまた兄御さまも助かつて願の通り六郎さまと——たい
力艸は六郎さま

淨隙を見おはせ片時も早うといふ舌こはる斷末魔入道怒りの聲荒らげ
稱ヤア死際まで要らざる入智恵にツクき不忠の下司女め。

淨手負をはつたと椽より下へ喃無慙やど照子の前かけ寄る頭にはたいがみ抱き
おこせば絆断れてはつたり落つる指添の血汐を洗ふ雨の足車軸を流す如くなり

ト入道折枝を階段の下へ蹴落とす照子の前かけよりて介抱すれど折枝は已

に息絶え雷雨彌々はげしくなる。

淨折しも奥よりかけ来る次郎

ト次郎重政下手廊下口よりかけいで

政父上こゝに御座ありしか、一大事と相成りましたぞ。稱ナニ、一大事とは 政ヤ
、折枝があゝの體は 稱、大事を知つたる下司女むすめ照子をそゝのかし訴人せん
どいたせしゆゑたちどころに成敗せり。シテ、大事とは何事なるぞ。政、密事
を知つたる紀河の宗近當晩より行衛知れずさてこそは油断ならずと思ふにたが
はず宗近めは、當夜南の山下にて、義時の手にかゝり空しくなりしと只今注進。稱
ヤ、スリヤ、義時がこなたの密事を 忝氣取りしからは露見は目前。父上にはこ
れより直に執権邸へ御越しあつて御方と萬事の御商議。稱、オ、先んずれば他を
制す此の上は一刀兩斷——時宜によつては義時もろとも 政、幸ひ平賀の右衛門
佐どのも、こよひはいまだ腰越宿り、それがしより密使を走らせ、いざといはば兼ね
ての計畧。稱、オ、何事も餘事はおぬしに——かういふうちも心が、イデ、

すぐに

淨はや立ちわがる椽端にこれ喃まつてと照子の前

淨エ、又しても邪魔なとめだて 政父上にはこゝかまはず 淨オ、合點

淨奥の間さしてどはしり入る

ト文句の通り照子の前椽端にかけ上りとゝむるを次郎立ちふさがる。此の

ひまに入道奥へはいる。此の間雨休み雷遠く鳴る。

照此の上は——オ、さうぢや。

淨はしりよつて死骸のそば落ちたる指添血染の柄取る手をおツかけ、まッかど止

め、

ト文句の通り照子の前自害せんとする重政とびかゝり其の手をおさへ

政ヤア血迷うたか、たはけものめが。折枝が最後は自業自得何うろたへて此のあ

りさま。照エ、何ゆゑとは何事ぞいのう。かくまで根深き御悪事を知りつゝ御

異見言はうにこそ、非道をすゝむる不孝不義。兄で無い汚らはしい、そこ離して下

さりませ。政ヤア兄に向ひ無法の雜言。コリヤおぬしは狂氣したな。マ、離せ。

照いや〜離さぬ、そこ離して

淨兄妹争ふ其の折柄又一しきり降り来る雨蓑笠出立甲斐々々しく枝折戸口より

かけ入る郎黨

ト文句の通二人争ふうち下手より稻毛の郎黨籠手田の勘六蓑笠でたちにて

勘大殿さまの御いひつけ腰越への火急のお使ひ、一大事の御書状は、はや御出來で

ムり升るか。オ、心得た。今即刻

ト指添をもぎとつて、かなたへ抛げやり

次いひよくむる仔細もある書院先に相待ちをれ。勘ハ、畏ッてムりませる。

淨はッど答へて引かへす、又吹き落とす山嵐に横ぶる強雨はたいがみ庭には千艸

の逆浪だちなびき倒るゝ供物机まるぶ小手巻竿もろどもに五色の絲のさら〜

方 の 牧 (二八)

ト此の間照子の前もがき狂ふをおさへながらふツと糸に目をつけ

政オ、これ究竟。 淫これ究竟と五色の小手巻ひちぎつてさそくの機轉氣も半亂の妹の小腕ねち

あけて泣き入りもがくをいましめ繩餘るはぐるく椽先の柱にまつかど身づく

るひ 次不便ながらもまばしの究屈 淫いふ間も心は奥のかた足を空にぞ入る後に

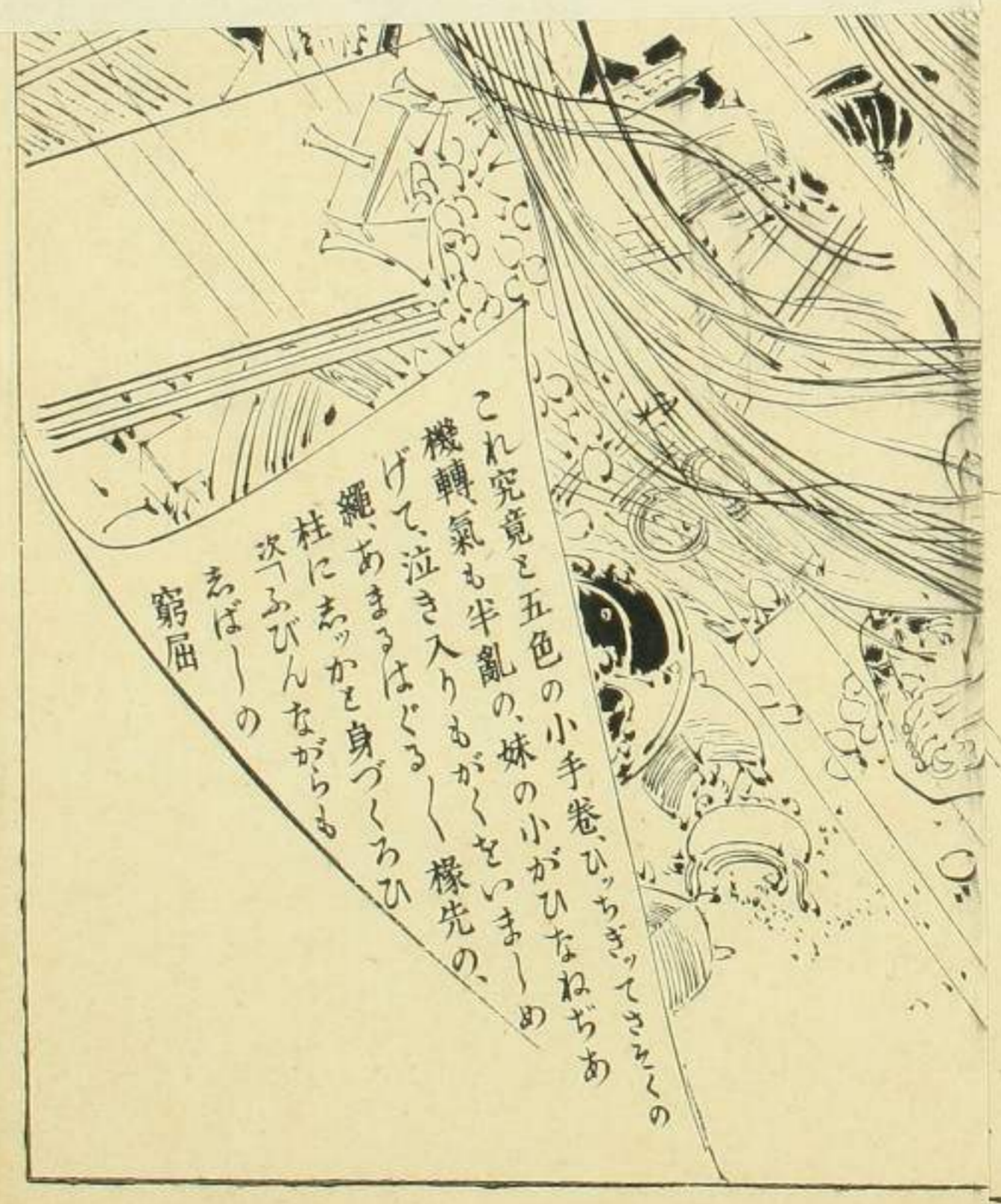
ト此の間大あらしになり前裁の飾り付けはたくと倒れること五色の絲竿

のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣きくるふ照子の前を五色

の糸を一束ねにして取繩のやうにして之れにて縛り椽先の柱に結びとめ其

のまゝ急ぎ奥へはいる。 淫無慚なるかな照子の前は姿も亂れ黒髪もおどろくどふりみだす雷雨が軒に

いましめこれや五濁の身を色絲にもがくほど尙搦み繩



これ究竟と五色の小手巻ひちぎつてさそくの
機轉氣も半亂の妹の小がひなねちあ
げて泣き入りもがくをいましめ椽先の
柱にあまると身づくわひ
次ふびんなから
まばしの
窮屈

ト此の間照子の前もがき狂ふをおさへながらふツと糸に目をつけ
政オ、これ究竟

淫これ究竟と五色の小手巻ひちぎつてさくの機轉氣も半亂の妹の小腕ねち
あけて泣き入りもがくをいましめ繩餘るはぐるく、椽先の柱にまつかど身づく
ろひ

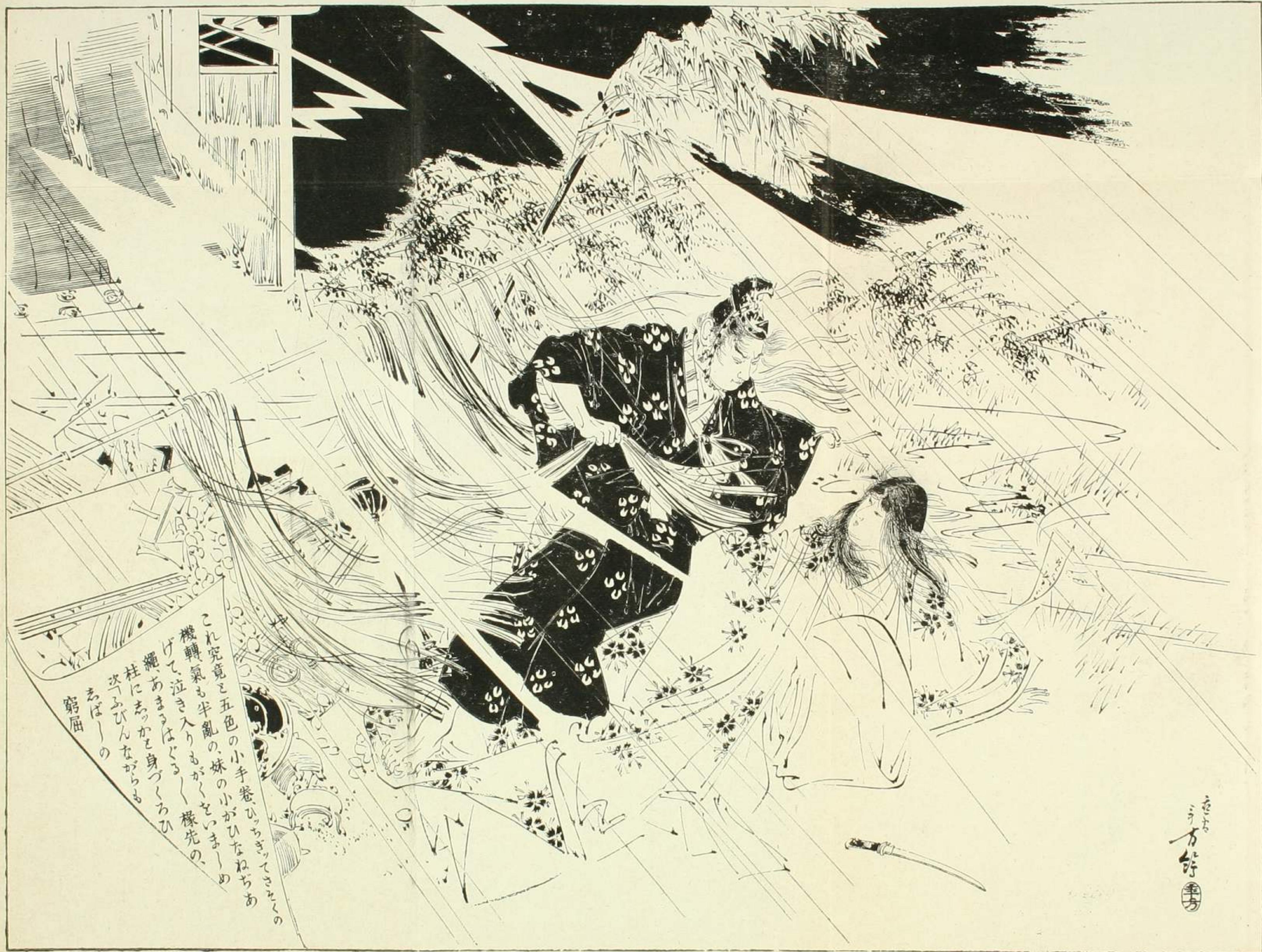
次不便ながらもまばしの究屈
淫いふ間も心は奥のかた足を空にぞ入る後に

ト此の間大あらしになり前裁の飾り付けはたくと倒れること五色の絲竿
のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣きくるふ照子の前を五色
の絲を一束ねにして取繩のやうにして之れにて縛り椽先の柱に結びとめ其
のまゝ急ぎ奥へはいる。

淫無慚なるかな照子の前は姿も亂れ黒髪もおどろくとふりみだす雷雨が軒に
いましめのこれや五濁の身を色絲にもがくほど尙弱み繩



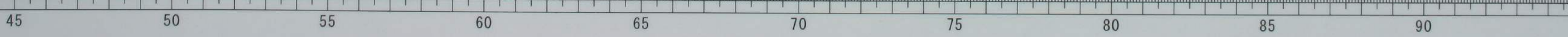
三才
方行
方



これ究竟と五色の小手巻ひちぎってささくの
機轉氣も半亂の妹の小がひなねぢあ
げて泣き入りもがくをいま一
繩あまうはとる 椽先の
柱にあか身づくちひ
次ふびんながらる
あば一の
窮屈

ささの
うが好
方

あけて泣き入りもがくをいましめ繩餘るはいるい椽先の柱にあかど身づく
ろひ
去不便ながらもまばしの究屈
誰いふ間も心は奥のかた足を空にぞ入る後に
ト此の間大あらしになり前裁の飾り付けはたくと倒れること五色の絲竿
のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣きくるふ照子の前を五色
の絲を一束ねにして取繩のやうにして之れにて縛り椽先の柱に結びとめ其
のまゝ急ぎ奥へはいる。
淨無慚なるかな照子の前は姿も亂れ黒髪もおどろいどふりみだす雷雨が軒に
ささしめこれや五濁の身を色絲にもがくほど尙弱み繩



照「喃誰れぞ来て此の絲解いて——たもいのう。叶はぬまでも今一度、いうて見た
ら、どめて見たら。」

淨「我れを忘れてかけいだし、おせればまるぶ軒の端に、ひらめく稻妻横しぶきさら
でも袖の雨やさめ、骨身もそぼつばかりなり。」

ト文句の通り、いろ／＼ありて、ト、まばられたるまゝ泣き伏すこと

照「エ、情なや、もはや時刻もおくれたり、此の上は折枝もろとも、父上の御爲に、ま
で三途のみちを走るべ。幸ひあそこに指添が。」

淨「おぼえずかけよる目先にぬれそぼちたる、以前の密書照子の前きつと目をつけ
ト文句の通り。ト、軒端に落ち散りて雨にぬれそぼちたる、以前の密書に目

をつけきつとなる

照「折枝が最期の遺言に、叶はぬまでも此の事を、六郎さまにひそかに知らせ——オ
、それよ、こよひは六郎重保さま、まだ腰越にゐるなら、こゝからは七八里、たとへ百
里が千里でも、思ひこんだる女の念力、幸ひあらしの暗まぎれ、父兄と一つで無い、此

の身の心を神佛の、おはれみたまはば此の一念、やはか貫かいでおかうか。一念凝ッては石ともなる。南無や八幡大菩薩観音さま、薬師さま、こよひにちいまる一家の運命。南無叶へたまへ、きッてたべ。天道さま佛さま。エ、きれぬか、くちをしや。

淨躍り上りどび上り、正體なげくかうべの上、黒雨をつんざく稲びかり、又もや目につく以前の指添

ト照子の前、いろくもがき狂ふことありて、ト指添に目をつけ

照ム、此の身も共に切らば切れ——あの指添で——オ、さうぢや。運かけよる軒端にぐわらく、轟くいかづち氣は半乱身を横さまに白刃の上伏しまるびく、糸もろどもに身をすりつけ、きらんく、と狂乱の頭にひらめく稲びかり、左右に波うつ五色の絲のもつれ乱る、黒髪は横ぶる雨にさかたてがみ、駈かへす裳裾のからくれなる、壯丹はな咲く石だに川に、母失ひし兒獅子の悲しみ、狂ふ風情なり

ト照子の前半狂乱となりて指添のはとりへかけ寄り、文句の通り身をすりつけ、糸を切らんとするまぐさいろくあり。ト、數ヶ所に疵を負ひ、尙きれぬこなし。

照エ、きれぬか、きれぬかいのう。

連七顛八倒身もだへし、もがき狂へばいつしかに、雪の肌、紅の雨、篠みだす、大叫喚かくどはるかに、次郎重政、あなやど驚きかけ、いづる椽はな間近く、ぐわらく、又もや破る、いかづちに、おッたまぎる、右左り、つんざく柱燃え立つ、炎いまいめも、ふッつど氣のつく照子の前

ト重政奥よりはしりいで、照子の前をとりおさへんとするト、タン、椽の柱に落雷する、二人ながらアッといッて倒れる。照子の前は刃の上へ手ひとく轉ぶこゝろ。

照ヤ、きれいした。チエ、かたじけなやうれしやなア。淨手に取る指添、肩先より流る、血汐の雨、瀧津瀬、腰越さしてぞ

ト照子文句の通り、一散に向ふへはいる。

(其二) 旅館の曲者

腰越驛旅館の中門外。深夜の躰。こゝへ平賀朝雅の郎黨甲乙丙松炬をふりてらして、上手よりばた〜にてかけいで

甲「合點ゆかざる今の物音」乙「ついで聞いてえし女の聲」丙「何にもせよ、どくと實否を」甲「たいし申さん。」

甲乙丙、下手へはいる。引きちがへて、下手より北條政範の郎黨△○□同しく松炬をもちて出で來たり

△「ヤレ〜何の事だ。藤澤までどのお侶觸れが急に腰越とかはつたゆゑ」○「けふばかりはのんびりと、宵寐の果報と思ひの外」△「ぐつすりよい心持に寐入つたところを」○「さやつといつた女の聲と」□「今の物音で起こされたが」△「何の事だ、女はおるか鼠一疋」○「立ちさわいだ躰もムらぬ」三「ハテサテ馬鹿々々しい。」

此のうち下手より以前の甲乙丙、戸板の上へ前の場の籠手田勘六(簀笠打扮)の死骸を載せていで來たり

甲「そこにゐるは北條どの、御家來衆ではムらぬか」乙「只今かしこの古木の底にて」丙「うさんな死骸を」三「見つけてゐる」△「ナニ、うさんな」△○「死骸とは」

ト皆々立寄る、甲乙丙、戸板をおろし

甲「最前の大がみなり、一定此のあたりへ落雷とぞんじをりしが」乙「御覽なされ、あの折雷火に撃たれしものにや」丙「まッ此の如くくすぶりかへり」△「いかさま、甲斐々々しき此の打扮」○「こりや曲者に」△○「相違ムらぬ」甲「此のまゝには捨置きがたし」○「いで我々も諸共に」丙「めい〜主君へ」皆々「申しあげん。」

ト此の時中門内より

鶴「アイヤ、あゝるに及ばぬ。朝、それへまゐつて」二「檢分なさん。」

ト小童に松炬をもたせ、左馬ノ介政範右衛門ノ佐朝雅中門よりいで來たる。

朝「只今委細は聞き知つたり、面體は見わかずとも、衣服身のまはりに見覚え無きか。」

籃「懷中を改め見よ。△○ハ、長ッてムリまする。」

ト△○勘六の懷中を改むること、密書のなかば雷火にて焼け焦げたるをとりいだす。

甲「なかば焼け焦げてはムリますれど、こゝどやら怪しい此の一通。」

トさしだすを政範うけとり

籃「さてこそ。松炬これへ。」

ト政範密書を繰りひろく朝雅も立ち寄り見る、小童松炬をさしだし紙面を照らすこと。讀むうちに政範朝雅双方一度に驚くこなし。

籃「ヤ、これは

ト朝雅さそくに小童の松炬持つ手を抑へる、ト火炎密書に觸れてすぐ燃えあがる。

朝「エ、何を粗相

ト小童をひきとらへ

朝「いたしをるのだ。」

ト突きとばす。小童よろめき倒れる。皆々驚くこなし。政範朝雅双方よろしく思入。

(其三) 奥庭の落花狼籍

畠山重保が寢所の前旅館の奥庭。こゝに前の場の稻毛の女照子の前氣絶してゐるを、重保が郎黨瀬平抱き起こし、重保燭をとり立ちかゝりゐる。

瀬「ヤ、曲者と思ひの外、こりやこれ正しく稻毛の御息女。重ナニ稻毛の——照子よのどな。」

ト重保も驚きて顔を見ること。

保「げに思ひがけぬ照子の前。かゝる深夜に只一人、瀬「ヤ、おめしものも血汐にまみれ、手疵を負はせたまへる御様子。保如何なる椿事出来せしか。何はしかれ、疾く介抱。瀬「心得ました。」

ト介抱することよろしく
保照子どの。瀬照子の前さま。

ト照子の前やうく心づき目をひらき

照オ、あなたは六郎さまか

ト照子とりすがるを重保しツかりとおさへ

保コリヤ照子どの氣がつきしか。照そんならこゝは腰越かいの。すりや一念が
届いたか。チエ、かたじけない。

トうれしき思入ありて泣く。

保氣が、りなり照子の前どの如何なる變事の 瀧起こりましたぞ。保とく仔細
を 瀧お話しなされ。照ナウ重保さま、一大事になりましたわいなア。

ト泣く。

保不覺なり照子の前泣いてゐる所でない。シテ其の仔細は 照サア其の仔細は
——此の一通——マこれを見て下さりませいなア。

ト懷中より前の場の密書をとりだし重保に渡すを受取りて讀むく、大に驚
く思入。

保ヤ、こりやこれ正しく御身が父の入道より——ム、かたうどは平賀の朝雅
——容易ならざる此のくわだて。照圖らず折枝が手に入れし其の密書にて知ッ
たれども何とせんかた談合を立聞く父が非道の及不便や折枝はあへない最後。

保ナニアノ折枝が 瀧エ、 照それさへあるに父兄が惡事露見と見てとッて、
平賀どのへ火急の内通、一定君の御大事と聞き知る此の身はいましめのえんにか
らまれ猶豫せば親を地獄へおとすも同然思ひ切つたる未練の繩目、あなたを力の
此の御訴訟御方はじめ父兄にも別條無いやう重保さま此の身不便とおぼしめし、
調停なされて下さりませ。

トよろしくこなし。此のうち重保密書を讀み了はり

保驚き入ッたる大逆無道此の文面による時は毒藥調進の一條は、牧の方は申すに
及ばず、あの右衛門ノ佐朝雅も、一味たること揭焉なり。ヤイ瀬平汝はすぐさま飛

脚の準備。我れはこれより奥へまゐり、此の密書を證據に、日ごろより不審と存せし、あの朝雅めが作り忠義の面ひッばき、きツと糺明いたしくれん。照エ、すりやあなたは此の事をば、アノ表沙汰になされうとや。保オ、サ照子どの、御身の心中も不便なれど、驚き入ッたる入道が大逆心、御身どの縁もこれまでなるぞ。照エ、ハ、ハ、ハ。保ヤ、イ瀬平何をうぢく。瀬ア、モン仰ではムリますれど、女性の御身ではるくど、雷雨も恐れず腰越まで、おこしなされし照子の前さま、親御さまのお命を助けたいばツかりの、其の御孝心をお察しなされ、何卒此の儀は穩便に。保ヤアそれしきを汝に聞かうや。天は一物の爲に季節をたがへず、忠義を存する武士が、公道を私情にかへんや。瀬サ、さやうでもムリませうが、あなたさまと姫さまとは、おいひなづけの御中らひ。保黙れ瀬平かゝる大逆露顯の上は、牧の御方として用舎は無い、まして逆家のかたわれをば、縁者などは汚らはしいわえ。照エ、そりや聞こえぬ、お情ない。子の口づから現在の親の非道を御訴訟も、一つは心の潔白を、あなたに知らせはめられて、せめてもそれを功に、親の命を助けうと、思うてゐ

たを情ない、聞こえませぬ、六郎さま。保ヤア見さげたり、照子の前、おのれを清うせん爲に、父を訴人とは不孝の振舞。照ハ、ハア。保エ、時移る、ざりくど支度いたせ。照すりやどうあつても、此の身の願ひは。保くどい、叶ひ申さぬ。照ハ、ハア。

ゆかうとする、袖を捉らへてはなさぬを、手荒く拂ふ。照子はたど倒れて其のまゝ泣きおとし、すぐ懐刀をぬいて乳の下を貫く。

瀬ヤ、こりや何と——早まつたことをなされましたなア。

ト瀬平うるたへ介抱する。

照イ、ヤ早まらぬく。子は親の爲にかくすといふ訓に戻りし不孝の罪死ぬる時刻は後れたれど、只一目でも重保さまに、息あるうちに逢ふことの叶うたは身の本望、たとへ不孝の子となるども、それに心は残らねども、此の身の心を重保さまに知られで死ぬるが、いまはの迷ひ。

トよろしく苦しむ。重保は手負に寄りそひ

保「オ、其の心は此の重保、よう推量して候ふぞや。照、そんならわらはの心中は保「オ、心底見えた。照、チエ、うれしや、かたじけない。

保「ト重保の手をどらへ嬉しき思入、だんくにおちいる。

保「南無阿彌陀佛、とと。

ト照子ばかりとなる、主従よろしく愁のこなし。ト、氣をかへ

保「オ、我れながら不覺千万。汝は死骸を取りかたづけ、急ぎ出立の用意いたせ。瀬、畏ッてふりまする。重、早くいたせ。瀬、ハ、。

ト瀬平死骸をいだし、下手へはいる。

保「いで此の上は、朝雅を糺問なし、時宜によつては、たいちに鎌倉へ引きかへさん。オ、さうだ。

トゆきかける。

朝「アイヤ、おいでに及ばず、朝雅みづからそれへまゐり、委細申開くでムらう。

ト下手奥の植込のかけより、平賀右衛門佐たちいで、氣色ばみて立戻る重保に

向ひ

朝「イヤ、ナニ六郎どの、最前よりのあらましは、は、い物かけにて承つたり、密書を證據にそれがしを疑はる、條道理なれども、それには深き仔細あること。保「ヤア、えらしく、右衛門ノ佐和殿が表裏の心腹は、それがし夙より疑うたり、言葉巧みに陳ずるとも、此の一通が動かぬかすが、ひ速かに觀念なし、尋常に白状あるか、但しは細うちひつたてゆき、問注所の白洲に於て、きつと糺問仕らうか。朝「逆上さい、六郎重保。身不肖なれども、此の朝雅は、忝くも源家の嫡流、頼義朝臣が六代の末孫にて、故右幕下の猶子でムるぞ。出所不明の密書を證據に見事、和殿が一存にて、繩うたる、なら、うッて見られよ。保「ヤア、舌長し。え、打つまいと思はる、か。罪證既に顯然たるに、不明呼ばりかたはらいたし。朝「ハテサテ、死人に口無し、誰れを證據に、其の一通の出所を明すぞ、イヤ、サ、島山と稻毛とは、人も知つたる多年の確執、偽筆、謀書も問々あるならひ——サ、ハ、曖昧不明の證據をいひたて、人もあらうに執權の、其の執權たる牧の方を、大逆罪におとさんなど、ハ——ム、さてはいひなづけと聞き

及ぶ女が自害に動願して——コリヤちと血の氣が上ツたさうな。笑止至極ハ、
 、、、、。保ヤア存外なりたけし。おのが心に引きくらべ此の六郎重保が執
 權の威勢に恐れおめし、かゝる大逆を見のがすとばし思はるゝか。證據不明の
 咎めあらば此の肚かッさばく分の事。六郎が心は鐵石今一言用捨はないぞよ。
 朝フムすりや、理不盡に此の朝雅に、手を下さん所存なるか。コ、今一步進めて
 見よ、私の鬮諍に我が手を下すまでもなし上洛の侶まはりの外に兼ねて京師護衛
 のためひそかに具したる數百の兵一呼すれば前後左右人の山だ。何と一步でも
 出されまいがな。保ム、朝ハテサテ馬鹿なつらな。ウハ、い、い、い。

ト嘲弄する。重保無念のこなし、トッこらへかねし思入。
 保もう此の上は。

ト刀の柄に手をかける。これより先きわけかけたる雨戸に寄りそひ始終を
 窺ひぬし左馬ノ介政範此の時アツと叫び、椽側よりまろび落ち、血を吐き苦し
 むこと。二人ども驚きかけ寄り抱き起こし介抱する。

保「こは如何に——こりや何となされましたぞ。朝「俄の煩悶心得がたし——ヤア
 誰れかある。燭火々々。」
 ト呼びたつるを政範制して苦しむこなし。

「ア、コレまばし——内々にていふことあり——ナウひそかに」。保「ナニ内
 々にて 朝「保いふことありとは。篁右衛門ノ佐どの、六郎どの、世にあぢきない左
 馬ノ介が語るもつらき物語り、ナウ一通り聴いてたべ。六郎どの、手に入りし密
 書に仔細は分明ならん改めいふには及ばねど、まことや慾には頂きなし、獸に心奪
 はるれば紛ふまじき太山も獵夫が眼に入らぬと聞く——情なや母上様此の政範
 を不便とおぼすお心から怖ろしい御くわだて、稻毛の法師が勧めにて毒藥を調製
 せさせ、日毎の供御に加へつゝ、次第に御不例募らんやうくわだてたまふ淺ましき。
 不思議に手に入る毒藥は、兄上の御たまもの。千疋の駒狂ふも、母御が意の駒の所
 爲、其の駒に鞭くるゝは、罪深や此の身ぞと、兄上にをしへられ、はじめて知つたる惡
 因縁——夙より覺悟は極めたれど、未練が残り死にかねて、肌身はなさぬ此の毒藥。

こよひ最後の時^{とき}到^{いた}り、日^ひをろ信^んずる佛^{ぶつ}神^{じん}へ、此^この身^みを犠^ぎ牲^{せい}の誓^{せい}願^{がん}は、母^はが善^{ぜん}心^{しん}發^{はつ}起^きのため、又^{また}二^{ふた}つには天^{あめ}が下^{した}の騷^{さう}動^{どう}未^み然^{ぜん}に除^{のぞ}かんとため。ナウけふあすの此^この身^みをば、不便^{びん}と思^{おも}うて給^{たま}はらば遺^い恨^{こん}を忘^{わす}れ、意^い趣^{しゆ}をすて、母^は牧^{まき}の方^{かた}が惡^{あく}事^じをば、内^{ない}分^{ぶん}にして下^{くだ}さりませ、此^この政^{まつり}範^{のり}さへないならば、源^{みなも}涸^これし濁^{にご}り江^えの末^{すえ}の流^{なが}れはおのづと清^すむ、ナウ聽^きき入れて下^{くだ}されいおう。

ト右^{みぎ}と左^{ひだり}にとりすがりて、よろしくこなし。重^{おも}保^{たも}も愁^{うれ}ひのこなし、感^{あは}れ入^いりし思^{おも}入^いれ。

俣^まけなげに候^{まご}ふ、左^{ひだり}馬^まノ介^{すけ}どの。和^わ君^{きみ}が切^きなる心^{こころ}のうち察^{さつ}し入りて候^{まご}ふぞや。御^ごわぎはひの根^ねだに絶^たえなば、意^い趣^{しゆ}遺^い恨^{こん}は私^{わたくし}しごと——平^{ひら}賀^がどの、所^{ところ}存^{ぞん}はいかに。孝^{かう}子^しの心^{こころ}を無^むにせんこと、武^ぶ士^しの本^{ほん}意^いにあらじ。朝^{あさ}申^{まを}さる、所^{ところ}我^{われ}が意^いを得^えたり、朝^{あさ}雅^{みや}いかでか異^い存^{ぞん}あらん。只^{ただ}こゝに一つの難^{なん}義^ぎ、左^{ひだり}馬^まノ介^{すけ}は、御^ご臺^{たい}所^{ところ}御^ご迎^{むか}ひの正^{せい}使^しなるに、思^{おも}ひがけぬこよひの珍^{ちん}事^じ、勿^{なほ}論^{ろん}上^{じやう}洛^{らく}は叶^なふべからず、さりどて直^{ただ}ちに引^ひき返^{かへ}さば、恐^{おそ}らくは疑^ぎ惑^{わく}を生^{しょう}じ、間^まちがひ出^{しゅつ}來^{らい}のもどぬとならば、眞^{まこと}ナウ、それにも思^し案^{あん}あ

こよひ最後の時^{とき}到^{いた}り日^ひをる信^{しん}ずる佛^{ぶつ}神^{じん}へ此^この身^みを犠^ぎ牲^{せい}の誓^{せい}願^{がん}は母^はが善^{ぜん}心^{しん}發^{はつ}起^きの
 ため又^{また}二^{ふた}つには天^{あめ}が下^{した}の騷^{さわ}動^{どう}未^み然^{ぜん}に除^{のぞ}かんとため。ナウけふあすの此^この身^みをば不^ふ
 便^{びん}と思^{おも}うて給^{たま}はらば遺^い恨^{こん}を忘^{わす}れ意^い趣^{しゆ}をすて母^は牧^{まき}の方^{かた}が惡^{あく}事^じをば内^{ない}分^{ぶん}にして下^{くだ}さ
 りませ此^この政^{まつりごと}範^{のり}さへないならば源^{みなもとの}涸^かれし濁^{にご}り江^えの末^{すえ}の流^{なが}れはおのづと清^すむナウ
 聽^きき入れて下^{くだ}されいおう。

ト右^{みぎ}と左^{ひだり}にとりすがりてよろしくこなし。重^{おも}保^{たも}も愁^{うれ}ひのこなし、感^{あは}れ入^いりし思^{おも}
 入^い。

保^{たも}けなげに候^{まう}ふ左^さ馬^まノ介^{すけ}どの。和^わ君^{きみ}が切^{せつ}なる心^{こころ}のうち察^{さつ}し入^いりて候^{まう}ふぞや。御^{おん}
 わさはひの根^ねだに絶^たえなば意^い趣^{しゆ}遺^い恨^{こん}は私^{わたくし}ごと——平^{ひら}賀^がどの、所^{しよ}存^{ぞん}はいかに。
 孝^{かう}子^しの心^{こころ}を無^むにせんこと、武^ぶ士^しの本^{ほん}意^いにあらじ。朝^{あさ}申^{まを}さる、所^{しよ}我^{わが}が意^いを得^えたり朝^{あさ}
 雅^{みや}いかでか異^い存^{ぞん}あらん。只^{ただ}こゝに一つの難^{なん}義^ぎ左^さ馬^まノ介^{すけ}は、御^{おん}臺^{だい}所^{じよ}御^{おん}迎^{むか}ひの正^{せい}使^しな
 るに思^{おも}ひがけぬこよひの珍^{ちん}事^じ勿^な論^{ろん}上^{じやう}洛^{らく}は叶^{かな}ふべからずさりとて直^{ただ}ちに引^ひき返^{かへ}さ
 ば、恐^{おそ}らくは疑^ぎ惑^{わく}を生^{しょう}じ間^まちがひ出^{しゅつ}來^{らい}のもどるとならば 眞^{まこと}ナウ、それにも思^し案^{あん}あ



車^{くるま}六^{むつ}郎^{らう}かくてあらん限^{かぎ}りは、オ、
 すや〜と寐^ね入^いるが如^{ごと}く、
 や〜と毒^{どく}のき、
 ト左^さ馬^まノ介^{すけ}め

洋引

便と思はれ給はらば遺恨を忘れ意趣をすて母牧の方が悪事をば内分にして下さりませ此の政範さへないならば源涸れし濁り江の末の流ればおのづと清むナウ聴き入れて下されいのう。

ト右と左にとりすがりてよろしくこなし。重保も愁のこなし、感じ入りし思入。

保けなげに候ふ左馬ノ介どの。和君が切なる心のうち察し入りて候ふぞや。御わざはひの根だに絶えなば意趣遺恨は私しごと——平賀どの、所存はいかに。孝子の心を無にせんこと、武士の本意にあらじ。朝申さる、所我が意を得たり朝雅いかでか異存あらん。只こゝに一つの難義、左馬ノ介は御臺所御迎ひの正使なるに、思ひがけぬこよひの珍事、勿論上洛は叶ふべからず、さりとて直ちに引き返さば恐らくは疑惑を生じ、間ちがひ出来のものとなりば、鯨ナウ、それにも思案あ



重六郎
すやかくてあらん限りは、オ、
やー、寐入るが如く、ハ、オ、
ト毒のき、ハ、ア、
左馬介、眠る、
うに、な、り、や、
抱いて、
あ、

り、我れ若しみづから毒を飲み世を早うせしと聞きたまはば、母さまが泣き悔み、またどのやうな御ひがみ。こよひの事は秘しかくし、明日死なうとも駕にて病氣といひたて上洛し、彼方にて煙となし、程経て病死と知らせてたべ。

トよろしくこなし。重保感心の思入。

保「ア、残る限なき心づかひ——如何なればかくまでに器量すぐれて生れながら、朝、魁けて咲く此の花の魁けて散るならひとて、保、芳しき名を末の世に傳へんすべもなさけなや、蕪海より深い母さまの情を仇と身を悔やみ、たんだ一目御、貌を、見ること叶はず死ぬるとは、保、今いにしへにたぐひ無き、蕪いかなる悪縁、重悪因の、朝もつれつながら、保、朝、因果とし。

トこのうち政範うつとりとなる、重保朝雅よろしくいたはる。

朝「コリヤ左馬ノ介、姉もろどもに右衛門ノ佐が、おことに代り末長く、母御の介抱心得たるぞ。必ず心を安んじませうぞ。保、六郎かくてわらん限りは——オ、すやくと寐入るが如く——ハテあやしき、二人、毒のきゝめ。

ト左馬ノ介眠るやうになりて抱いてゐる重保の腕へグタリとなる。朝雅重保見あはせ、双方よろしく思入、こなし。

第四段

(其一) 閑室の密談

北條邸の一室、上手に平賀右衛門佐朝政、うつむきて愁の思入下手よき所に北條家の女房甲乙丙、ゐならび、皆々愁の思入、うつむいてゐる。

朝「二無き者におぼされし、左馬介が不慮の天折、老公のお力落し、牧の御方の御愁傷まのあたり、睹る如く、此のたび下向の途々も、さこそと推察致しをった。スリヤ所詮御方には、御対面は叶ふまじきか。甲「さればでふりまする。御持病の御病は、やうく癒らせたまひたれど。乙「三度のお物もめしあがらず。丙「昨晚も夜もすがら、泣き明させたまひしゆゑ。甲「そのお疲れにやうとく。乙「丙「つい御寝なつてござりまするゆゑ。朝「オ、さもさうす、さもあらん。御寝なるは何より良薬。

ゆめく驚かしまゐらすべからず。まからば身共は此のどこにて、お目ざめの時刻をまたん。遠慮は無用、お身たちは奥へまゐり、御介抱申してよからう。甲「さやうなれば、仰にまたがひ。乙「慮外ながら。三「わたくしどもは。朝「オ、お目ざめを知らせくりやれよ。三「かしこまりました。

ト甲乙丙會釋して奥へはいる。朝雅残り、よろしく思入。

朝「左馬介が非業の最後は、願うても無き我が仕合せ。新將軍家は幼弱にて、到底負荷に堪ふべからず、今天が下廣しと雖も、此の朝雅を除いては、系圖器量双つながら、兼ね備へし者一人なし。はじめはたかゝ執權職を望み、かけし大望も、待てば甘露の日とやら、左馬ノ介世に無き上は、遠州夫婦が舐贖の、其の恩愛を取りも直さず、あの政範と血を分けし、只一粒の愛女、萩の前の戀智たる、此の朝雅が身に集めんと、我が三寸の舌頭次第。機をはづさず、智畧を運らし、稻毛の法師を玉に使ひ、遠州夫婦の心を動かし、機密を氣取りし重保親子、まづ馬鹿者から押しかたづけ、其のほどぼりの冷ぬ間に、將軍もろとも義時めをム、ハテ時節は俟つべきもの。

トにッたり思入此の時下手の扉をひらき、稻毛重成入道ひそかに立ちいで
稻右衛門ノ佐どの。

トあたりへこなし

朝オ、入道どの待ちかね申した。これへ〜。

トこれにて入道朝雅のそばにすまひ

稻「お悦びあれ至極の上首尾。朝、ナニ上首尾どな。すりや兼ねていひ觸らせし彼の流言を信どなし。稻イヤ〜彼奴も流石は曲者容易くは動くべうも無かつしゆゑ、偽書を作り、上使をえたて、遠州公の命といつはり、今般謀叛の輩あつて、鎌倉表へ寄するの由、其の姓名も歴然たれど、事極秘なれば、委細は参着の後、執權の御口傳たるべし、さて右につき、重忠に追討使仰付けらる、早速一族を驅り催し、十分に兵器を調へ、火急の發向、嚴命なり、と眞實しやかに言はせしかば、市に三虎の喩に漏れず、鼻元思案の二郎重忠、信ど心得、狼狽なし、已に昨日武藏の國を出發なせしと、飛脚の注進。朝「ホ、出來されたり、あつばれ〜。此の上は片時も早く、天の人を以て言

はしめし、其の謀叛人は重忠なりと——脚躰は事の破る、基——手を分かつて、老公夫婦に。有無を言はせず、討手の準備、必ず共におぬかりあるな。稻念にや及ぶ兼ねての手配り。執權の一言、次第、討手の先鋒は、倅重政、こよひを過さず、重保めを、由比が濱邊へおびさいだし、まッた重忠めは、武藏の國、二股川を渡らんころ、朝「ホ、ウ、何から何までさすがは入道。まからばそれがしは、奥へまゐるッて、稻「いでそれがしは、遠州公に

ト兩人立ちあがる、トタンに奥の方にて

女共「アレ、誰れぞ來て下さりませ。アレ、御方が、御方さまが——アレ、誰れぞ來て下さりませいのう。

ト物言騒がしく、女中大勢の聲聞こえる。

稻「ヤ、あの聲は——まさしく奥の間。朝「ム、さてこそは案にたがはず——奥の事は御懸念あるな、貴所はすぐさま遠州公へ、稻「心得申した。

ト平賀は上手へ、稻毛は下手へ、大急ぎにてはいる。

(其二) 噴雉の狂亂

すべて鎌倉時代武家寢殿の造作修飾等よろしく、こゝに時政の室牧の方寢衣のまゝ、黒髪みだりがはしく、手に懐刀をぬきもちて髪を断たんと争ふを、前の場の女房、甲乙丙其の他、女童數人取りすがりもみあひ立ち惑ひうるたへゐる。牧の方の枕元には、故左馬ノ介の狩衣立烏帽子など取りちらしあること。

女甲「アレ、おあぶなうムります。女乙「マ、おはなしなされませい。女丙「アレ、誰ぞ早う来て下さりませ。皆々、誰れぞ来て下さりませいなア。

ト女どもよろしく棄せりふにてとめてゐる。前の場の朝雅下手より走り入りて、すぐ泣き狂ふ牧の方を抑へ、皆々に目ませにて退れ〜と命する。皆々心得て下手へはいる。

朝「マ、みこゝろをお鎮めあれ、コリヤ何となされました。

ト難なく懐刀をもぎとる。牧の方我れに返り、朝雅の貌を見てむしやぶりの

く。

牧「オ、右衛門ノ佐どの〜。聞こえぬ〜、聞こえぬわいの。なせせめて死骸なりと、一目見せては下さらぬ事切れてから知らずるとは、言はうやうなき情知らず〜。イ、ヤきかぬ、きませぬ〜。親の心の浅さ深さは、子をもたいでは知られぬか、見る悲しみは百倍でも、たつた一聲聞くならば、諦らめもつかうもの。怨めしい右衛門ノ佐どの、花のやうなる政範を、ようむごたらしう灰にして、送るとは何事ぞいのう。たとへ腐らうが、爛れうが、氷のやうに冷きッて穢い蛆がわかるとまゝ、熱湯のやうな此の母の涙で温め、頬と頬、たつた一目最期の肌膚に〜あひたかつたをむごたらしう〜。たとへ冥土に行かうとも、親子の縁は一世を限り。情なや月日にも、天にも、地にも、かへがたない、あの政範が死にやらうとは〜。一日一夜を泣き明かしても、まだ信とは思はれぬ〜。コレ右衛門ノ佐どの〜。政範は死にやつたかいの、死にましたかいのう。朝「其のお歎きは、お道理とも、ことわりとも、申し慰めん言葉も無けれど〜。マ、まばらしく御心を〜。さやうに悶へさせたまふと

きは又もや例の御癩氣が 牧ナニ癩が募らうとや。募らせたい。いッそ此
のまゝ取りつめて、一思ひに息絶えたら此の苦しきは忘れうもの。とはいふもの
親と子は、たんだ一世と聞くからは、何を頼みにあの世の旅。死んで甲斐なく存
へても、けふより後は何樂しみ——憂世に未練は残らねども死ぬるも益ない此の
身ゆゑせめて和子の菩提の爲——エ、迷ふまい——さうぢや。

ト又だしぬけに懐刀に手をかけるを朝雅すかさず取り抑へて
朝、又してもこは何事。さては餘の御なげきに、こりや御心が狂ひましたな。牧
ナニ心が狂うたとや。何の狂はう、狂はうぞいの——狂はねばこそ忘れぬ——
此の世あの世の哀別離苦。此の狩衣も立烏帽子も、離れぬ夫婦親と子が鼎の脚と
榮えなん末の榮華をわて祝ひに、染めいだしたる三ッ鱗模様こそはちがへども、千
幡どの、召料と地柄も仕立もちがはぬ晴衣。和子が出世をけふあすと、倭指へま
ちし甲斐もなく——空となつたる形見の衣。なつかしい幻影の若しか宿ること
もやと、柱に掛けて起ちつ居つ泣きはらいたる双の目の、めくるめくまでながめて

も心狂はぬ證據には、これは狩衣立烏帽子——たんだ一度ひ通せし袖に、移り香さ
へもムらぬわいのう。

トよろしく狩衣へこなしあつて泣く。朝雅思入あつて
朝、イカニ牧の御方御なげきはさることながら、免れがたき定業と觀念あつても其
のお怨み——さはと御不便におぼしめす御愛兒の政範ぬしが、まことは不思議の
仔細あつて非業の最後を遂げられたりと 牧、ヤ、何と 朝、サ、万一にも其のや
うに申し聞こゆる者あらば如何ばかりの御愁傷思ひやりまゐらすさへ、此の腸は
ちぎるゝばかり。牧、それこそは人の親の心を知らぬ推量ぞや。苔の花の年齢を
定業と思ふにこそ、せめても敵と目ざすべき、怨の的があるならば、此の悲しみの半
分は、怨みにまぎれて忘れうもの、富の敵を求むれば、所詮は我が身我が心と思ひ浮
かぶる苦しさを、ナウ推量して下されいのう。朝、スリヤ御方には和子が横死をま
だいさ、かもお察しなきよな。牧、エ、何とおいやる。
ト双方よろしく思入。

朝「一大事に候ふゆゑ態と胸にをさめ今日まで秘しかくして候へども和子の最後は定業ならず——サ、御驚きは尤なれど——マ、一通りおさし下され。語るも無念至極なれど往ぬる日腰越に宿りし最夜中稻毛の女照子の前兼ねて重保と私通の取沙汰如何にしてか手に入れけん、一大事の密書を携へ雷雨を犯して旅館にかけつけ仔細あつて落命の其の場に手に入る一通を恩義知らずの六郎重保すぐさま證據に取つてかへし尼御臺に訴へんと例の忠義を賣物三味 牧おのれ又しても——朝かくと聞くよりけなげにもさへざりといひる和子政範此の事露顯となる時は母上さまの御身の上 牧オ、朝何卒此の身の人質としせめて首尾よく下向なすまで 牧オ、朝内濟頼む穩便にと土に手をつき涙を流し 牧スリヤ六郎めに手をついて 朝乞ひ願はるれど傍若無人情用捨も知らざる六郎共にといひむるそれがしを逆臣なりと雑言なしはや理不盡に大音あげ多勢を呼ばんと致せしゆゑ無慚や和子の分別無く藏しもつたる毒薬をといひむる間も無く頓服なし 牧エ、情ないとしてたもつた——エ、何とせう如何せうぞいのう。朝

母に代る此の身の最期内濟頼む六郎殿と毒の効に惱亂の口より溢るゝ血は瀧津瀬。 牧オ、くくく 朝鬼神も感ずる無類の孝心 牧オ、くく 朝かりにも人情あらん者は鐵石の心も溶解する筈を苦しむ和子を突きつけて馳け出んとする六郎重保。 牧おのれく、人非人——朝雅どのなせ其の時六郎めを八裂にはしやらぬぞ。 朝サ、六郎一人討つて棄つるは容易き程の事なれども、一大事を氣取りしからは毛を吹き疵を求むる恐れまつた其の折入道より送り越したる密書により忠義面する重忠親子に不思議の陰謀これある由 牧イヤくくさかぬいひわけさかぬ。たとへ和子が命の綱取りとめること叶はずとも其の場で敵はなせ討たつてどの面さげてようめく——卑怯なく見さげ果てた。 卑怯者、薄情者——薄情でゐるわいのう。 朝サ、お怒りはお道理ながら只今も申す如くこれには深き仔細あること——六郎をなだめすかし其の場を穩便につくるおおしは 牧エ、さかぬく——頼みに思ひし現在の實の女が聲でさへ——尼義時が不孝は其の筈。おのれやれ此の上は——一念力には鬼女ともなる生きながら夜刃とな

ツて誰れ彼れのようにしやがあらうか。

ト髪ふりみだしすさまじき形相よろしくこなし。

朝「サ、一大事を御存じなきゆゑそのやうに思し召すも——コリヤとこへまゝ、まばらく

ト牧の方立ちあがり奥へゆかんとする朝雅とめる。

牧「エ、邪魔なのさませう。朝「マ、マ、牧のさませ。平「マ、まばらく——ハテマ

ア仔細をおきゝなされ。

ト朝雅の牧の方をおしする。

時「オ、其の仔細さいた〜。

ト奥より時政あわたいしくいづる。

朝「ヤ、老公にはいつの間に 時仔細は最前稻毛の法師に。ヤア誰れかある〜。

ト下手にて應答する。時政牧の方のそばにすまひよろしくいたはること。

時「奥、無念である〜。尤ぢや〜、尤ぢやはやい。牧そんなら和子が横死の仔細

は 時「オ、聞いた。尤ぢや〜、尤ぢやはやい。牧コレ時政どの敵を取つて下さ

れいのう。時「オ、尤ぢや〜。ヤア誰れかあるはや參れ。

ト侍士一人あわたいしく入り來たる。

時「委細は法師にいひつけおいた。相州を呼べ、相州を——法師もろとも——疾く

急いで、まゐれと申せ。侍「ハ、ハ。

ト侍士急いでいる。

牧「八裂にしてもあきたらぬ六郎め。時「オ、尤ぢや〜。牧怨めしいは右衛門ノ

佐——現在和子の敵と知つて 時「マ、おちついた〜。腹の立つは尤なれど、其

のやうに氣をかせらば 牧「オ、苦しや、胸が裂ける——五臟六腑が惱亂して——

此の黒髪の毛先から——オ、苦しや、一筋づゝ血が出るやうに思はるゝわいのう。

時「サ、サ、道理ぢや——さうあらう〜。サ、尤ぢや〜——尤なれど——右

衛門ノ佐には越度はない其仔細は稻毛の法師が——ヤア義時はまだ來ぬか——

義時「々々。こりや、事ぢや。朝雅「々々、介抱頼む〜。

ト牧の方頼に苦しむ。時政うるたへる。朝雅よろしく介抱する。此のうち下手扉をわけ、相摸守義時其のあとより稻毛入道入り來たる。時政目早く見

時オ、義時待ちかねた。仔細はさいたか——憎きは重忠親子、疾く討手の準備いたせ。義ハ、さてく存じがけぬ不思議の御嫌疑、畠山重忠親子が故禪室の奉爲に、謀叛を企て候はんとは、我れ人ともに夢いさゝか、曾て存じ寄らざる所。夫れ重忠とは、治承四年始めて故幕下に仕へしより、忠義専らに聊も私無し。去々年二品御謀叛の其の砌も、彼れ彼方に候する身ながら味方に參つて忠を盡せり、是れ天下の大義を存じ、まツた二つには、舞男の因を重んじ候ふゆゑ也。然るに今更何の爲に、謀叛企て候はんや。正直の鏡といはるゝ重忠親子、よも亂心は致すまじ、參着の後、糺明あつて罪明白ならば、其の時御誅戮あるも遅かるまじ、眞偽を分かつ御討手に向けられんこと、近ごろ御粗忽かどぞんじます。猶こは相州のお言葉ながら、いさゝか聞棄に致しがたし。眞偽不明と仰せらるれど、たしかな證據は此の入

道親族と心をゆるし、ひそかに送りし彼の一通に、逆意正に歴然たるゆゑ、忠義には親を滅す御訴訟。義、それぞ不審の随一條。故禪室の御謀叛を、密告ありしも和殿なれば、日ごろ重忠と中惡し、と噂高きも和殿にあらすや。猶ヤ。義サ、其の中惡しき和殿の許へ、故禪室のおん爲には、仇にひとしき和殿の許へ、亂心をさばいざ知らず、かゝる密書を送りしこと、何共以て心得がたし。猶スリヤ、相州には拙者が訴訟を、讒言なりと疑ひめさるか。義、イヤさやうではムらねども、其ヤ、其の間答無益でムるぞ。一忠謀叛の企ありとは、今はじめて聞いたれども、思ひあたる日ごろの振舞、必定逆心に疑ひ無し——よし疑ひがあらうとまゝ、和子の爲には不俱戴天——義時はまだ知りやるまいが、政範が最期は横死ぢやといの。人で無しの六郎めが、みづからに冤を被せ、其れゆゑ和子が無慚の最期——そなたの爲にも、弟の敵猶豫する所でない、畠山が一門一族、八裂にしてもあきたらぬ——コレ、義時時政の嚴命ぢや躊躇するは不孝でムるぞ。義、お言葉返すは恐れあれど——まツた政範が最後の始終は、今はじめて承り驚き入つては候へども——さりとてそれは

一家の私事。牧スリヤ私事ゆゑ和子が横死は、敵を取るにも及ばぬとや。義イヤ
 さやうではムリませぬと。牧イヤさうぢや〜〜さうである。後妻の生んだ子
 は、古沓も同然ゆゑ、表だつて敵を取る法無いゆゑ、謀叛人と云言して敵を取らう
 思ふのぢやと。〜イエ〜、さう思うてゐるゆゑ、繼しき中ゆゑみづからをば、讒
 者におとして世の人に疎ませう了簡ぢや。イヤ、聞かぬ〜、さかぬ〜。さは
 までに疎ましくば、今直に此の母の命をたつて謀叛人の重忠親子を庇ひをれ、イ、
 エイナア、いつでも殺されませうわいのう。

ト始終義時に身をつきかけ、よろしくこなしあつて泣く。皆々よろしく思入。
 平賀朝雅思入あつて義時に向ひ

朝イカニ義時ぬし、貴殿の御諫言もさることなれど、重忠逆意の一條は、他にも確實
 なる證據あつて、もはや疑念を殘しがたし、まツた遮つて御諫争あらば、御愛兒に別
 れさせられ、御哀傷の其の折柄如何なる大變出來せんか、これもまた圖るべからず。
 孝道のおん爲に、曲げて奉命これあるやう

トいひかける、このうち牧の方聲たて、泣く時政こらへかねし思入。
 時ヤア異論あらば勝手にいたせ。執權遠江守時政が申しつける入道直さま手勢
 を引具し、六郎めを討ちとり參れ。重忠追討の御教書は、我れこれより參入なし、千
 葉三浦を討手の先鋒〜それ。

トたゝんとする、義時は非なき思入。
 義マ、まばらく〜ハテ是非に及び申さぬ。父上の嚴命母上の御腹立御嫌疑か
 りし重忠一門何とて父母に見替申さん。時スリヤ御教書を申し乞うて。稻今
 よりすぐさま。朝出陣あるか。義いかにも命に従ひませう。時オ、満足。まか
 らば義時は我れもろとも〜入道には討手の準備。義、稻ハ、ッ。時、右衛門ノ佐
 は奥の介抱。朝ハ、。

ト義時、稻毛おの〜思入あつて會釋し、同時に座を起ちて下手へはいる。時
 政は奥へはいる。其のあと泣き伏し、伏する牧の方むくと起き向ふを見込
 み、よろしく思入。

牧チエ、心地よや嬉しやなア。日ごろより憎しと思ひし重忠親子我が子の敵六郎めを——オ、忘れたりむぎ——と一思ひに殺しては——あきたらぬ腹が癒ぬ——八裂にせにやならぬ我が子の仇——コレ生捕って具して来いと入道のあとおツかけ疾く吩咐けて下さりませ。朝こは何事ぞ御怒りに前後をお忘れあそばしましたか。重保は彼の大事を知つたるからは有無をいはせず討つて取るが上分別——モン御用心はそれのみならず——御免。

ト牧のかたの耳に口寄せさやくこなし。牧のかた驚き怒り、貌色次第にかはる。

牧スリヤ政範が飲んだる毒は 朝かねて因果をいひふくめし其の源は尼御臺か相州たること疑ひなし。牧チエ、せんすべもあらうものをスリヤむむたらしう分別なきあの政範をだましすかし諫むる法にも事をかきたった一人の愛児をば——ナニ根を絶たば幹枯りよとや——何の枯れう朽ち果うぞ。おのれやれ此の上は其の計畧の裏を搔き怨かきなる尼義時——子を殺さるゝ苦しみを、おのれ今

に

トよろ／＼とたちあがり足元にころがる立烏帽子に目をつけ
牧この烏帽子は左馬ノ介が將軍となる其の時を心で祝うて千幡若と同じ仕立に製らせし大臣のかぶりもの今更見るも怨めしい。我が子の影は浮かばねども此の烏帽子を見るにつけ、またり貌なる尼が面千幡若のまやツ面が

ト烏帽子を搔掴みて悔やしき思入。
牧おのれ此の怨み

ト烏帽子をメリ／＼とひきさく。
朝ア、モシ。牧晴らさでおかうか。

ト烏帽子をなげいだし、よろしく泣きおとす。

第五段

(其一) 杜かけの伏兵

由比が濱邊に近き杜かげの晩景。こゝへ下手より稻毛の次郎重政烏帽子腹巻にて物の具せる郎黨大勢從へて出で來たりよき所にとまり

政イカニ者共承れ。今般島山重忠竊に逆意を企つるの由訴人あつて露顯に及び已に御討手をさし向けらる。然る處同苗重保當鎌倉に在るこそ幸ひまづ彼奴より討つて取れど執權職の嚴命蒙り最前已に奇計を運らし釣りいだし置いたれば程なく此の處へ參るは必定。さきだつて埋伏なし不意に起こつておつとりまき有無を言はせず討つて取らん。一同此のむね心得候へ。皆々かしこまつてムリまする。政ム、はるかに聞こゆる蹄の音——ソレ、玄のべく。皆々心得ました。と重政さきに、一同上手へはいる。初夜の鐘。向ふより島山六郎重保烏帽子腹巻騎馬にて長刀を携へ、郎黨數人つきそうていで來たる。此方へ來ると、寢烏騷立つことあり。重保が馬驚きはねあがる、ト、よろしく乗りしづめる。保、ハテけふな——こよひに限つて栗毛めが、まばく物に驚きをるわえ。さるにても心得がたきは、逆臣寄すると道路の風説信玄からす存せしに、已に御討手を差

向けらる加之又候ふ、一手の賊軍寄せたるゆゑ、疾く斥候せよと嚴命受け取るものも取りあへず立ちいでしが——雲漏れいづる片われ月行く手は隈無き由比が濱敵あるべしとも思はれず——合點ゆかざることもちやなア。

ト不審の思入。このトタン左右にぞつと鬨の聲して以前の稻毛主従、めいめい得物をひらめかし、無二無三に競ひかゝる。問答のひまなく重保主従よりしく防ぎ、ト、稻毛勢叶はず、左右へひく。

保、ヤア、何奴なれば理不盡に名宣りもかけず、無法の振舞。

ト稻毛の重政木蔭よりたちいで

政、何奴とは無禮至極。逆臣島山重忠父子を誅戮せよとの嚴命によつて、汝をこゝに俟つこと久し。姓名は名宣るに及ばず、鎌倉殿の嚴命也、速に伏罪せよ。保、ヤア、舌長し、汝等こそ、嚴命あつたる逆臣ならん。姓名名宣つて伏罪せよ。政、問、無益

——ソレ、討つて取れ。保、何を。

トこれにて又亂戦となり、重保馬上長刀を揮ひ、多勢を追うて上手へはいる。

あとに重保が郎黨殘る稻毛勢を敵手によろしくたちまはり、トッ下手へおう
てはいる。

(其二) 由比が濱の血の雨

上手に、畫心に岡の裾を見せ、破馴れ松などよろしく、下手奥のかたへ深く、沖を
見せたる濱邊の夜景。片われ月やうく空高く昇りたる躰。こゝに重保が
家來瀬平、旅装にて、多勢の敵兵に圍まれ、數ヶ所に手疵を負ひ苦戦してゐる。

瀬大殿さまの御大事を、片時も早く六郎さまにお知らせ申さん其の爲に、かけつけ
たる甲斐も無く、此の場にむざく討死なすか。チエ、殘念やなア。敵こそごと
ぬかさず 皆々くたばつてまへへ。瀬何を。

ト又たちまはり、トッ瀬平危くなる。上手よりばた／＼にて前の場の重保大
わらは、徒歩血刀を提げ、處々に矢を折りかけ、手疵多く負ひたる躰にてかけつ
け

保思ひがけなき汝は瀬平。瀬ヤ、若殿でムりまするか。

ト此のうち重保敵中にわつて入り、瀬平を救ひ、はげしく働き、トッ殘らずま
める。其のうち瀬平疲れはて、倒れる。重保たちより宜しく介抱すること
保ヤ、瀬平汝は往日密事を、傍附け、本國菅谷へ遣し置きしに、思ふにたがひし此の
對面、如何なる珍事の起つたりしぞ。コリヤヤ、瀬平重保なるぞ。手は淺い心を
たしかに、瀬オ、若殿さま、六郎さま——無念至極でムりまするわい。保オ、何
よりも心懸りは、父上の御身の上——本國の様子は、何と。

トこれにて、瀬平、痛手を忍び起直るこなしよろしく
瀬いぬる日、御内意承り、平賀どの、一條を片時も早く大殿さまへ、言上なさんとお
國表へ、夜を日に急ぐ其の途々、逆臣寄するの雜説は、疑ひもなく平賀の徒黨と、一圖
に下司のえせ推量、かやうく云々と、尾端を添へたる言上の折も折とて、俄の御上
使、鎌倉表に逆臣あり、追討の爲今即刻、一族こぞつて、驅り催し、兵器を整へ、發向せよ
と、北條さまより嚴しき内命。保ナニ、執權より密使を以て——シテ、父上には

進發ありしか。瀬さん候ふ、遠州さまの御親筆疑ふべくも候はねば、すぐさま一同御用意あつて、今朝已に武藏國二股川まで御着ありしが、保ム。瀬流石は大殿御賢慮深く、此たびの御内命は、何共以て心得がたし、其の方急ぎ鎌倉なる重保が許へ馳参り、委細の様子を心得ましたと、韋駄天走り、途中に行きあふ討手の大軍——合點ゆかずと、手だてを運らし、仔細を聞くより、びっくり仰天——大殿さまには謀叛の御嫌疑——こはいかに、件の討手が指して行くるは二股川。保ヤ、ハ、ハ、ハ。瀬此の事さつそくあなたさまに、お知らせ申して御分別と思ふに、たがひし此の場の有様。あなた様にも數ヶ所のお手疵。瀬さては、讒者の舌刀にて、我ればかりかは父上まで——チエ、くちをしや、無念やなア。

ト向ふを睨み、よろしく思入。此のトタン又俄に、関の聲して、ドンチャンはげしく打込む。

瀬この上は、やつがれ此處に踏みどまり、敵を防ぎ候ふべし。若殿には、いざ疾く此の場を、保おるかや、瀬平。命を惜むも、君父の爲君には、已に棄てられまつり父

上にも重圍のうち——數ヶ所の深手を負うたるからは、生きて逢はん望なし——いで、もろともに、此の場に於て、花々しく討死なさん。

ト此のうち下手より、稻毛の重成、入道物の具に身を堅め、長刀を携へ、あまたの軍勢をまたがへ、出で來たり

稻死にぞこなひの六郎重保速かにすかうべ渡せ。縁者のよし、此の入道が、最期の引導渡しくれん。保ヤ、よいどころへ、奸邪の小人。汝を殺すは、最期の忠勤、共に冥土へ行く父に、語る此の世の土産となさん。稻、何をこしやくな。者共、ソレ。

ト又亂戦となり、主従手痛く働く。重保は入道を討ち取らんと、荒れ廻り、入道危なる。此の時、上手に、関の聲して、前の場の次郎重政、再び手勢をひきゐて、いで來たり、父に、應援して、主従にかゝる。これにて、雨勢上下に入りかはり、重成入道の一群は、瀬平を追うて、上手へはいる。あと重保一人となり、大勢を敵手にはげしく立ちまはり、ト、下手へ逐ひ崩す。重政一人残り、一騎打となり、ト、重政危くなる。此の時、上手より重成入道かけ來たり、此の躰を見て、驚き、長

刀をひきそばめ、ひそかに重保の背へまはり、油断を見て重保の脚を薙ぐ。重保どろどろとある。

保「武士に似あはぬ卑怯者めが。」

ト重政すぐに斬殺さんとするを、入道とめて

「イヤレ待て、重政急ぐに及ばず。日ごろより馬鹿正直の父を見真似に、小賢しき堅子めが賢人面長幼の禮を存せず、よう幾度も此の入道に、赤い顔をさせをったな。中にも諸人の面前にて、飾を落し入道せしは、妻の菩提を吊ふ爲佛の道に入るとは偽り、實は北條どの、息女たッし妻を病に失ひたれば、婿舅の縁切れんかと懸念なし、執權の最良をつながんため、えせ入道の阿諛追従、僧衣の袖の墨染より、腹の底こそ黒けれど、うぬ、よういうたな、さみしをったな。胸に徹して忘られぬ、其の返禮に最期の引導——ヤイ、よく聞け、ようぬ等親子は此の入道が舌三寸のいひまはしで、まんまど首尾よく謀叛の悪名——何と骨身に徹へたか。」

トよろしく思入あッていふ。

保「ヤ、すりや父上の御最後も——さては汝が讒言なりしか。稻知れたことだワ。」

保「チエ、いはうやうなき、人非人めが。」

トよろしく無念のこなし。

稻「やかましいわえ。引導濟んだ上からは——ソレ、重政。」

トよろしくこなし。重政心得て斬らんとする、重保痛手ながら奮戦する。入道こらへかね、長刀を揮つて只一薙に、あはや薙倒さんとする、其のトタン、向ふにて、エイと箭聲して、箭一つ飛び來たり、入道の肩頭を射貫く。入道尻居にどろどろとなる。又一箭とび來たるを、重政さそくに切ッておとし、驚きながら向ふを見込み

政「鎌倉殿の殿命受け、討手に向ひし我々親子に、名宣りもかけず無禮の手向ひ。何奴なるぞ。」

ト此の時向ふにて

義「ヤア、何奴とはたけくし。賊臣稻毛重成親子、鎌倉殿の殿命受け、相摸守北條義

時、只今討手に向うたり。尋常に誅に伏せ。

ト此のうち重保またどうとなる。重成入道辛うじて箭をぬき、長刀を杖に起

きあがり

稻何な 稻政など。

ト向ふより北條義時烏帽子腹巻、左手に弓を持ち、馬上馬側に義時の腹心深見

三郎二郎致興軍兵大勢ついで來たり、よき處にとまり

義忠臣島山重忠父子を、讒言を以て陥れし罪跡已に、顯然たり、陳すとも及ぶべから

ず。深まツた、二股川の戰場へも、結城七郎朝光との、只今汗馬を走らせたまふ。義

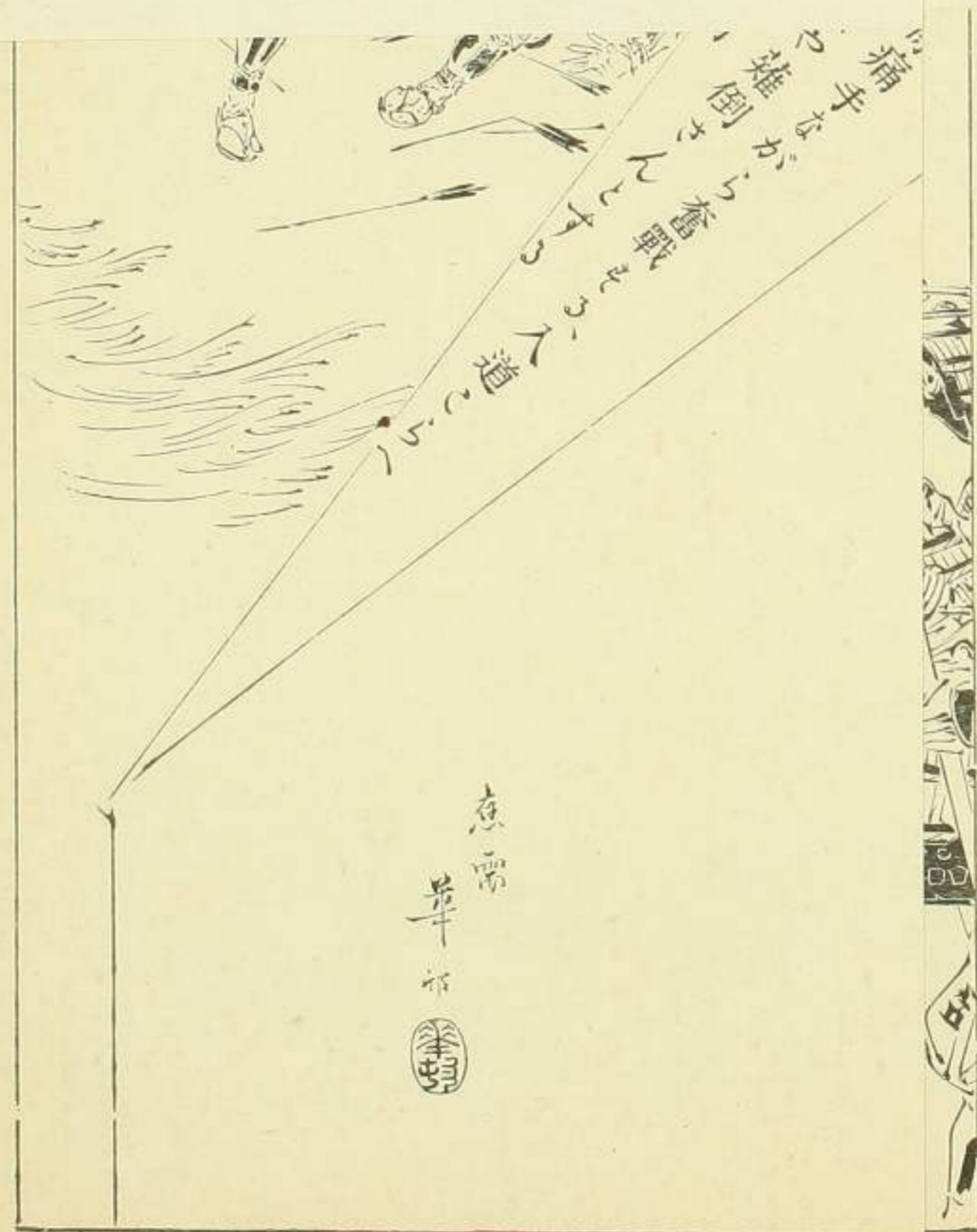
只憾むらくは時刻おくれ、恐らく宛死を拯ふに由無し。國家の蠶賊、深義士の怨

敵、義せめても、深く誅に伏せよ。稻は、存じよらぬ無實の御嫌疑。政、讒言など

どは、我々親子、稻かつふつ以て、稻政何を證據に、義、ヤア、卑怯なり、稻毛親子。

證據は汝等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ致興。深ハツ。

ト從兵へこなし、稻毛親子うろたへて逃げんとする、義時が從兵一齊に競ひか



意富
華千
朝

時、只今討手に向うたり。尋常に誅に伏せ。

ト此のうち重保またとらと成る。重成入道幸うして箭をぬき、長刀を杖に起

きあがり

稻政な 稻政など。

ト向ふより北條義時烏帽子腹巻、左手に弓を持ち、馬上馬側に義時の腹心深見

三郎二郎致興、軍兵大勢ついで來たり、みき處にとまり

善忠、臣島山重忠父子を、讒言を以て陥れし、罪跡已に顯然たり、陳すとも及ぶべから

ず。深、まツた、二股川の戰場へも、結城七郎朝光との、只今汗馬を走らせたまふ。善

只、憾むらくは時刻おくれ、恐らく宛死を極ふに由無し。國家の盜賊、深、義士の怨

敵、善、せめても、潔く誅に伏せよ。稻、こは、存じよらぬ無實の御嫌疑。政、讒言など

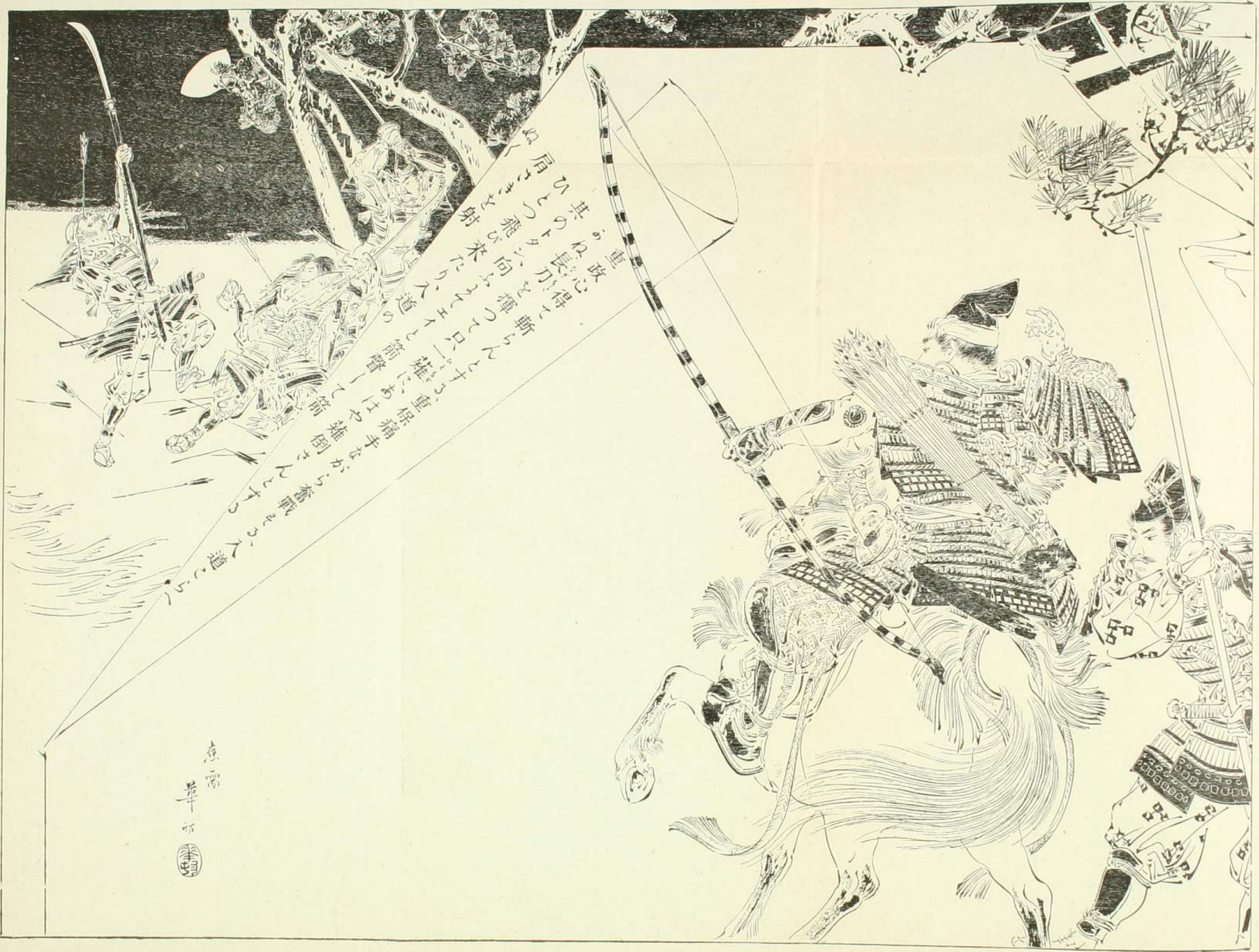
どは、我々親子、稻、かつふつ以て、稻、政、何を證據に、善、ヤア、卑怯なり、稻、毛、親子。

證據は、汝等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ致興。深、ハツ。

ト從兵へこなし、稻、毛、親子うろたへて逃げんとする、義時が從兵一齊に競ひか

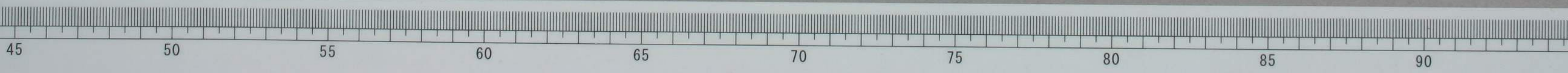


稲政の腹心に
深見の長刀を
義時の怨敵に
稲政の腹心に
深見の長刀を
義時の怨敵に



意高
華印

稻何な 稱政など。
 ト向ふより北條義時鳥帽子腹巻左手に弓を持ち馬上馬側に義時の腹心深見
 三郎二郎致興軍兵大勢ついで來たり、まき處にとまり
 善忠臣島山重忠父子を讒言を以て陥れし罪跡已に顯然たり、陳すとも及ぶべから
 す。還まつた二股川の戦場へも結城七郎朝光との、只今汗馬を走らせたまふ。善
 只懐ひらくは時刻おくれ恐らく宛死を極ふに由無し。國家の盜賊 還義士の怨
 敵 善せめても深く誅に伏せよ。稱こは存じよらぬ無實の御嫌疑。政讒言など
 とは、我々親子 稱かつふつ以て 稱政何を證據に 善ヤア、単怯なり稻毛親子。
 證據は汝等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ致興。還ハツ。
 ト從兵へこなし稻毛親子うらたへて逃げんとする、義時が從兵一齊に競ひか



ゐる。親子一寸たちまはッてすぐ逃げいだすを、皆々追うて上手へはいる。
あと義時残り、思入馬より下り、重保のそばに立ち寄り、死骸を引起すことあり。
義ム、さては全くことされしか。良材ともなるべかつし、樸の儘の此の若者——
惜むべし。まことや堅子事を誤る——彼の人世に在さん間は——聊かも心を
ゆるしがたし。如何なれば小人の蛾の燭火に赴く如く、只眼前の利祿に急ぎ却つ
て自滅を求むるおろかさ

此の時奥にてエイ、オーと勝鬨の聲きこえる。義時うなづき
義どはいひながら一舉兩得——朽木の稻毛親子直に過ぎたる二郎重忠——まこ
とに造化の妙配劑

トにッたり思入。此のトタン重保の死骸バタリと倒れる、義時ギツクリ、すぐ
に氣をかへ

義ウフハ、ハ、ハ、ハ、ハ。
ト冷に笑ふ。

第六段

(其一) 浴室の逆謀

浴槽口を正面に見せたる浴室、上手下手、ともに扉あり。上手の板の間には衣桁、其の他浴室の飾り付よろしく、こゝに牧の方が腹心の女ばら、魚、米、升、魚は板の間を拭ひ、米は衣桁の位置を直し、升は今湯加減を見果てたるさまにて高くまくりあげし袖を禪と共にゆるめながら

升、ヤレ、くたびれた。ナウ皆さんも休ましやりませ。かうしておけばいつ何時將軍さまがお渡りあつても、まづ大事ないといふもの。魚、さればいな、これでこちは大事なけれど、ナントマア陰陽師とやらも頼まれぬものではないか。身の上知らずと世話にもいへど、恰ど今月十六夜は、天一神さまに向うたから、御方違と將軍家にお勧め申した其お成りが、米取りも直さず冥土へ出發。御方さまが兼ての御差配、わたしら三人御内意うけ、此のお浴室でたつた一突。升、よう智恵のまは

る尼公さまも、政範さまの御菩提を、とむらふ爲の發心と。魚、殊勝らしう珠數つまぐり。米、人前ばかりの御經讀誦。升、其のまっかいな御方さまの、深いたくみに、まんだとはまり。魚、場處もあらうにうっかりと、此のお邸へお方違。米、折から恰ど義時公も、急の御用で俄に御他行。升、君傍さらすの鶴の目鷹の目、こちどの手には阿波の局も、けふは持病のいたつきにて、つい御倍に洩れたとやら。米、一から十までトン、拍子。魚、御願成就はこちどの立身。升、ほんに浴室は源氏に祟る。米、禪室さまも伊豆の修善寺。魚、義朝さまも尾張の内海。升、ほんに争はれぬ。三人、ものぢやなア。

ト此の時下手の扉を明け、牧ノ左源太禪英、今旅先より歸つたといふ服装にて浴室をのぞき

左、御方はこゝに御座あらぬか。魚、オ、さなたかど存じましたら。米、御方さまの御内意うけ。升、御旅行ありし。三人、左源太さまの。左、コレ。他處にては人目の憚り、輝英、只今立歸つたと、ひそかに御方へ傳へておくりやれ。三人、かしこまりまし

てムりまする。魚、ドレそんならば、わたくしが

ト魚、たんとする。上手の扉のうちに

牧、まゐるには及びませぬ。今そこへゆきませぬの。

ト扉をあけ、牧の方、下髪質撲なる服装、すべて有髪の尼といふこしらへ。手に

珠数をたづさへ、五六歳の女童に秋艸を折り入れたる水桶を携へさせ、まづま

づと入り來たり

牧、オ、輝英。思うたより早い歸着、御太儀でムりましたの。左ハ、お悦びあら

せられい、まづ以て万端上首尾。牧、ホ、以來しました。シテまた花洛の平賀

朝雅どのへ、機密を傳ふる早飛脚も。左ハ、其の儀も昨夜亥の刻ころ

牧、ア、コレ。誰れやら足音。

ト上手へこなし。程なく上手の扉をあけ、下髪盛服の侍女一人、いそがはしく

いで來たり

侍ハ、御方さまへ申しわけまする。只今御先觸として、相州さまの夫人吳羽の前

さまはや御入りにムりまする。まッた程無く將軍家にも、結城七郎さま、伊豫のお

局、雀尾のお局をはじめ、御方々御侶にて御入御げにムりまする。牧、オ、心得た。

ト魚、米舂に向ひ

牧、さあらば、うちたちも衣服をあらため、御でむかへの準備万端。三人かしこまり

ましてムりまする。

ト牧の方、女童に向ひ

牧、そもじも共に。オ、その花はいつもの持佛へ。童、かしこまりました。

トこれにて魚、米舂、女童、侍女、皆々牧の方に會釋して上手へはいる。あと牧の方、

方、左源太のこる。牧の方、思入あッて

牧、ム、首尾は上々。今一時が成否のわかれ目。女どもにいひつけし、其の手配も

ど、のうたれば、方に一つも仕損すまい。よしまた浴室で去そんずども。左、御渡

殿の左右には、牧、兼ねて伏せおく、あまたの力士。左、有無を言はせ、ヒツぶせて

牧、まゐるしをあぐるが——合圖の狼煙。左、いざ御大事と見るや、否、まづ第一に參

着すべきは、無念に亡びし稻毛が殘黨。左、其の外譜代恩顧の面々、機密を知れるも知らざるも、狼煙を見たらば馳せ參れ。時政公の内名と、一々御内意合せたれば、牧、在鎌倉はいふに及ばず。左、十里以内の御味方は、牧、狼煙の煙の消えぬ間に左、馳せ集らんは案のうち。牧、俄に他行し義時のこゝにあらぬは究竟一。目指す敵は東御所と、年老いたまへと遠州との。左、其の御出馬のまっさきがけは、此の輝英が出世の發程。牧、無二無三にひんがし御所。左、手むかふ奴輩斬りたて、焼きたて。牧、尼前はすぐにおしこめ同前。左、ついで目指すは和田の一黨。牧、大江、廣元は不覺人——外には手にたつ者もなし。左、御事成らんはまた、くうち。牧、ア、ラ心地よやなア。

ト兩人よろしく思入。

牧、オ、それよ、念にも念を入れよのことわざ——おことは股肱の力士等に、尙あためて機密をふくませ。左、まからばこれより。

ト左源太急ぎ起ちあがり、かけいでんとする。

牧、待ちや。左、ハ、ハ。牧、必ずせくまい、まそんずまいぞや。左、心得ました。牧、「のさや」。左、ハ、ッ。

ト左源太下手へはいる。牧の方ひとり残り、よろしく思入、ト、にッたりと打笑むトタン、上手の扉をあわたいしくわけ、北條時政立烏帽子水干安からぬ顔持にて進み入り。

時、オ、おことの居どこを、こゝかしこ尋ねてをった。ナウ、さしか、って談合すべき、一大事が出来た。牧、エ、。一大事とは心が、り。穩かならぬ御面持——シテ、仔細は、時、マ、下に。あたりに他聞の虞はなさや——マ、下におはせ。

ト時政あたりへこなしあつて上手に、牧の方は下手に、そばちかくすまふ。

牧、もしや大事が露顯なせしか——シテ、何者が、時、ア、イヤ、にあらず。其の儀は、かつふつ氣づかひなければ、牧、スリヤ一大事とおほせあるは、時、ナ、其の一大事の仔細といふは——コリヤ、奥よ氣をまづめて、よう一通りさいてたもれ

よ。御方遣の御事昨朝はじめて仰せいだされおことに其の事語りしまでは——
 もとより尼御前の振舞は御身が日ごろの異見により不快らずは存じをりしが——
 さりとて未だ予に於ては何等の別心もなかっしところ——已に左源太輝英もて
 筒様くの手配なし、まッた云々の仔細によつて幼弱なる當將軍が虚位を擁して
 在さんには、所詮諸人の怨を招き、當家も共つふれ天下大亂の兆其のことわりかや
 うくと、理を盡したるおことが辨論——まッた世になき政範が横死の仔細をは
 じめて知り、牧コレく——一大事とおほせあるゆゑ、如何なる大事かと思
 うたれば、時マ、聞いてたも、聞いてたもれ——其故予れも心動き、そなたの意見
 に合體なし、ふと一大事は思ひたちしが、牧ナニ、ふと一大事と、時マ、其の出
 來ごゝるも、つい今がた、牧ナニ、出來心、時、何心もなう入御なつたる實朝公の其
 の面影——見れば見る程いたいけらしい——血すぢの縁の孫とはいへ心の迷ひ
 か、政範めに、牧フム、すりや將軍家の面はせが、アノ政範に似たるゆゑ、それで心が
 變りましたか、イ、エイナ、千幡若と政範とが、よう似たくとは十年以來耳胼胼の

出來るほど、イヤサ、穿入るほどきゝふるいた。それに何の不思議がある。酷う肯
 たればとて薬は薬、毒は毒、誰が斑猫を玉蟲に代へて鏡の匣に收れ、猫によつて似た虎
 の兒を生長うなるまでぞたつるぞや。肯たのが何の珍らしい。それを今さら新
 らしさうに——ア、きこえた——スリヤあれほどにわつつくといつ、昨夜よもす
 がらいうたることを、時サ、牧ヤッぱり成さぬ繼母根性、譏諷ひがみと思つて
 かいの、イ、エイナ、二世どちぎりし夫にすら——二十餘年が其の間心知られし夫
 にすら、時マ、牧、イエ、さうぢや、さうでム。成さぬ中の尼御臺や、義時
 夫婦が目の敵に、わらはの過失をわなぐり求め、額に波うつ今となつて、和子政範が
 逝りしを、よい潮時と此の母を、西の海へも掻い流さん、不孝非道の振舞も——先妻
 の子となれば——それはほどまでも可愛いか。頼朝の、後見して、日本國六十
 餘州に、武名威名を轟かせし、遠江守時政の、老いては小荷駄に息はづむ、牡馬に
 も劣るかいの。一旦かうと誓うたことを、何ぢや出來こゝろぢや、偶然思つた、時
 そゝそれ、時エ、それもこれも畢竟は——子故の暗の袖の雨に、色香あせゆく、姥

櫻、妾に愛相が盡きたゆゑ、とく散れがしの。時、かゝ、かつふつさういふ譯ではな
 けれど、まだ其の他にも。牧、エ、さかぬ。時、仔細といふは。牧、さかぬ。
 時、こよひの手筈は浴室に於て、左右なく討取らんず結構なりしが、最前局等の間は
 ず語り、いぬる日の御神灸如何にせしか、其の跡いさゝか咎をなし、腫物の如く膿も
 ったり、さるによつて、兩三日は、入湯遠慮せらるゝ由、さいたる時は、疵もつ腫、さては
 と胸を躍らせしが、吳羽の前の話といひ、童小姓の言葉といひ、疑ひ危む仔細も無け
 れど、まづ此の一事に膽を落し、手筈は書餅と思ふと、共、只今語りし一伍一什、未錬と
 いへば未錬なれど、如何に天下の爲なりとて、血で血を洗ふくわだては。牧、ハテ、大
 の蟲をたすけうには、小の蟲の二百三百——よい手本は頼朝どの、血で血を洗うて
 研ぎあげし、鎌倉山の星月夜、其の血の雨の洗濯を、現在幾度も手つだうた、覚えある
 身が今となつて——エ、もうさかぬ、さゝませぬ。問答無益、怨むも愚痴——さう
 ぢや。

ト牧の方懐より手早く懐刀をぬき、いだし、あはや自害せうとする、時政あわて

時、こりや何と——まア、マア、マア。牧、はなして——はなして下され。頼む
 夫は心がはり、思ひ子には先だ、れ、なに憎まれに生きながらへう——そこ離して
 下さりませ。時、堪忍しやれ。誤、まア、たり。此の上は初志の如く、今より
 更に手だてをめぐらし、有無をいはず討つてとらん。牧、エ、その氣休め聞きた
 うない。やッぱりわらはい。時、ヤア、さゝ分けなし、大事の瀬戸際時おくれなば事
 の破れ。牧、スリヤ、其の言葉に相違ないか。時、念にや及ぶ論より證據。
 トついと起ちて浴室の一隅に装置したる呼鈴を引き鳴らす、トすぐにばた
 にて、牧ノ左源太下手より出で來たる。
 左、お召しありしは。時、オ、近かう。左、ハッ
 ト左源太進み寄る。
 時、手筈いさゝか間ちがうたり、此の上は是非に及ばず、汝はすぐさま力士をひきつ
 れ、奥の一間へ亂入なし、有無を言はず、さるしをあげよ。
 牧、ア、モン。

き、そこへ忍ぶこと。やがて上手より牧の方さきについて、吳羽の前女ども大勢ついていで來たる。此のうち明月となること。

牧「イヤナッ吳羽の前、今噂ありし平家を語る琵琶法師とやら、其の名を聞くもはじめなれど、折から月も薄ぎぬ脱ぎ、千艸の蟲もとりどりに、音色あはする秋の樂平家亡びし物語も、時にどつての御なぐさみ、君にも嘸めでたまはんとく、其の法師をお招きあれ。吳ハ、お許しとあるからは、急ぎ召寄するでムリませう。誰そある中門際にひかへさせし、最前の琵琶法師を、釣殿へ案内しや。女、かしこまりました。

ト女一人上手へはいる。此のうち女共一同むかうを見て

女甲「アレ、御所さまが、はや御出御にムりまする。女乙「オ、ほんに將軍家が、御童衆をお敵手に。女丙「鬼ごとの御たはひれ。女丁「まッさきなは荏柄の御秘藏、小平太さま。女戊「ほんに鬼ごど、皆々見えませすわいなア。吳日ごろに似ぬ好い御機嫌——アレ、あぶない——岩かど、松が根。モシ母上、おでむかひいたしませうか。モシ母上

ト此の間牧の方向を見つめてゐる。

吳「モシ 牧「エ、

ト牧の方びツくり氣をかへ

牧「サ、おでむかひしやらぬかいのう。

ト此のトタンはた、向うより和田嵐長の末男小平太、七八歳の童姿、一人に走つてでる、ついで將軍實朝卿十二歳狩衣、堅烏帽子、小平太を追うて出る。すぐ其のあとより北條次郎朝時十三四歳の童形御、太刀をさしげもち、少しおくれ伊豫の局、笹尾の局、結城七郎朝光、五十恰好、其の他近侍女房大勢ついで出る。

伊「モシ、おあぶない。世お怪我ばし遊ばしするな。

ト此のうち牧の方、吳羽の前一同でむかふ。トタンに小平太かけて來て、吳羽の前の袖の下をくいる、追ひすがりて實朝卿まろびかけるを

牧「ア、あぶない。

ト牧の方おぼえずだきとめる實朝其の手にすがりて
實ア術なかつた〜ヤ、そなたは祖母前

ト牧の方の手にすがりながら見あげる、牧の方ゾツとしたる思入、ト、氣をか

牧オ、御前さま、お慮外おゆるし下さりませ。マ、みづからとしたことが、おゑしや
くもおそなはり〜ホ、ホ、ホ、失禮御免下さりませい。

ト作り笑ひして上手へ請ずる。このうち皆々集ひ

葦、どこもお怪我はムりませぬか。ヤイ〜小平太氣をつけませうぞ。眞何ともな
い〜。サア釣殿へゆかう〜。奥ほんにマアいつものに似ぬ〜うるはしい御前
の御機嫌〜さやうならば御案内〜サ、いづれも 葦、御案内 皆々「下さ
りませう。

ト吳羽の前さきにたち、一同實朝卿を圍繞し、上手へはいる。此の間、牧の方は
始終實朝に目をつけ、恍然と下手に立ッてゐる、皆々心づかずはいッて去る。

牧の方我れ知らず二足三足上手へ往き、尙見送ッてゐる。此の以前、左源太舟
より半身をあらはした、び〜こなたを窺ふことあり、此の時不審の思入にて
陸に上り、あたりへこなしあッて、牧の方の傍へ來たり、小聲にて、モシ〜と呼
ぶ。牧の方聞えぬ思入。

牧かほとまでにも背たりとは〜鳥帽子姿も〜狩衣までも 左、モシ、御方、牧
和子が料に、そツくりそのま、左、コレサモシ、御方さま。

ト左源太牧の方の袂を引き、大きく呼ぶ。これにて牧の方ビックリ思入。

牧ヤ、そなたは左源太 左、手筈も首尾も、十二分と存じましたに、何故お見のがし、あ
らばしましたか。牧オ、

ト牧の方夢のさめたるやうの思入。

牧ム。此の上はかねての手筈〜万一にも去そんじなば、合圖は柱にまかけし
狼煙〜左源太ぬかるな。左、心得ました。牧ソレ。

ト牧の方きッと思入、懐中の短刀に手をかけながら、急ぎ足に上手へはいる。

あとに左源太呆れし思入。此のうち月又昏くなる。
 左さつぱり譯がわからぬわえ。何はまかれ、一まづ彼奴等を
 ト懐中より合圖の蟲笛を取りいだし、吹かうとする。此のトタン、上手奥の植
 込より、以前の深見三郎次郎以前のまゝの服装にて、つゝといで、無言にて立ち
 より、灸所をわてる。左源太ウツといつたまゝ、倒れる。深見懐中より捕縄を
 とりいだし、難なく縛り、蟲笛を奪ひて、月影に透し見ること。

第七段

(其一) 月前の平家琵琶

上手に寄せて釣殿やうの建物正面の外は小簾を下し、欄干廻り椽下手奥へ
 や、斜に池水に臨みたるころ。左側の椽側より、同じく下手奥へ、又斜に橋
 形の渡殿其の止り、四面に小簾を垂れたる離れ小島の水亭、これも四方椽欄干
 附。すべて北條邸の奥庭、泉水築山の遠見よろしく、渡殿のかなた、八月十六夜

の明月空高くさしのぼりたる體。釣殿のまん中よき處に、實朝卿其のうしろ
 に和田ノ小平太御、太刀をさゝげてゐる。上手や、前のかたに結城七郎朝光
 北條相模ノ次郎朝時、其の次に吳羽の前下手や、前の方に伊豫の局、笹尾の局
 其の外女房侍女おのゝよき處にすまひ、さて椽側に近くや、下手に、盲目の
 琵琶法師、恰も一曲語り了りたる體、琵琶をいだき、頭をさげてゐる。皆々感に
 入り、中にも伊豫の局、笹尾の局、結城朝光などは、涙を催せしこなし。
 益信濃ノ前司行長ぬし、近きころ入道あり、公用の暇々に、平家と名づくる物語を、物
 せられ候ふ由、兼ねて承り及びつれど、かくまでいみじき作ぞとは、存じもかけず候
 ひしに、伊折も折とて、仲秋の御釣殿の月の底に、篁只讀みて、だにと思はれ、す
 る、哀れも深き御物語を、伊妙なる琵琶のいといなは、益諸行無常の世の姿を、さ
 ながらに見る心地して、篁を、る涙の催され、女、何わきまへぬわたくし、も
 まで、女、面白いで、皆、ムりました。
 ト皆々感心の思入よろしくある。

吳御意に叶ふか、どうあらうと、御聞には供へながら、胸安からずぞんじましたに、冥加に餘る御感のお言葉——法師にもさぞ面目。琵琶のはまれと申さうか、筆のはまれと申さうか、取りも直さず當家の面目——かくと傳へはんべらば、御もてなしに奔走のあるじ夫婦も嘸よるこび——かたじけなう、ぞんじあげます。葦イヤナウ御方只一曲ではあまりに本意無し、何をがな今一節。篋ほんに結城さまの御意の通り、こたびは何がなをさないに因みましたる一條を、伊オ、それこそは、しほに、我が君は、じゆ童御たちの、葦いかさま、お氣にめすことでムらう。何とぞ御所望下されたし。

ト 吳羽の前へむかひ三人よろしくある。

吳心得ましてムります。イヤナウ法師方々の御褒美は、世にありがたい其方の面目。あのやうに仰せらるゝ、何をがな今一曲。法ハ、冥加至極に存じます。さやうならば、恐れ多くはムりますれど、幼君に因みまして、先帝御入水の一條を、葦オ、その一段は、さうかし。伊ナニ、御入水の一段とや。承らぬ其のうちか

ら、いにし昔しの惚ばれまして、そゝる哀れをおぼえするわいのう。

ト 伊豫の局目を拭ふこと、此のうち琵琶法師撥を取りて、調を整へ平家先帝入水の條を語りいづる。

平家「其の後は、四國鎮西のつはものども、皆平家を背いて源氏に附く、今まで隨ひ附き奉つたりしかども、君に向つて弓を引く主に對して、太刀をぬくれば、彼の岸に着かんとすれば、浪高くして叶ひがたし、此の江によらんとすれば、敵矢先を揃へて待ちかけたり、源氏の國あらうひ今日を限りとぞ見えし、さる程に源氏の兵ども、平家の船に乗り移り乗りうつる、水主楫取ども、或は射殺され、或は切り殺されて船をなほすに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。」新中納言知盛の卿急ぎ御所の御船へまゐらつさせたまひて、此の世の中の有様さりと、どこぞ存じ、が、今はかうにこそ候ふらぬ、見苦しき物どもをば海へ入れて、船の掃除めされ候へど、掃き拭ひ塵ひろひどもへに走り廻つて、手づから掃除し給ひけり。

ト 此のうち皆々感に入り、伊豫の局涙を催せし體にて、鼻汁をかむことなど。

和田ノ小平太やうく退屈したる思入ト、實朝のうしろにて吹呟する實朝
卿うしろを見かへり睨む真似小平太戯れてわびる真似。
平家「女房たちはさしつどひていかにや新中納言どの軍のやうは如何にや如何に
ど問ひたまへば只今に珍しき吾妻男をこそ御覽せられ候はんすらめどてからか
らど笑はれければ女房たち何條只今の戯れやとて聲々にをめき叫びたまひけ
り

ト此のうち女房たちいよく感に入り落涙の體。次郎も默然としてうつむ
き結城朝光も頭をうなだれ悵然として聽きはれてゐる。小平太實朝の耳に
口よせ何事かさやく實朝うなづく。

平家「二位どの日はどるより思ひ設けたまへることなれば

ト此の時橋殿のかなたなる水亭の小簾かけより牧の方半身をあらはしこな
たへ思入。

平家「鈍色の二ツぎぬ打かつぎぬり袴のそば高くどつて神聖を脇にはさみ寶劍の

腰にさいて

ト此のうち牧のかた懐刀を取りいだし目くぎを去めすこと。

平家「我れは女なりども敵の手にはかゝるまじ

ト牧の方きつと思入あつて橋殿へかゝる。

平家「主上の御傍にまゐるなり君に御志思ひまゐらせん人々は急ぎついきたまへ
やとてまづいど舷へぞ歩みいでられける

ト此のうち牧の方ひそかに橋殿を渡りはて、こなたへ近づかんとする同時
に實朝卿小平太うなづきあうてそつと座をたち左側の縁へぬけいづる。牧
の方目ばやく見えてきつと思入足早に橋殿を逆戻りして再び小簾かけへかく
れる。皆々心づかぬ體。

平家「主上今年は八歳にぞならせおはします御年の程より遙かにぬびさせたまひ
て御かたちうつくしう傍も照り輝くばかんなり

ト此のうち實朝卿小平太互ひに含笑みながらさやくあひぬき足して橋殿

へかゝる。

(其二) 橋殿の一刹那

ト牧の方再び小簾かけより半身をあらはす實朝之れを知らず何事か小平太にさゝやく小平太うなづき橋殿を走りもどり前の釣殿の背面へはいる。隠れ遊びのこゝろなり。牧の方また身をかくす。實朝小平太の合圖を待つ思入にて水亭の前のかたへ釣殿へ思入あつて徐かに歩みゆく。やりすとして牧の方ひそかにうしろより忍びよる。

平家「御ぐし黒うゆらくいど御背中すぎさせおはします」

ト牧の方懐刀をぬき逆手に取り只一突どうかひ寄りながら横貌が我が子に似たりといふ思入あつて突かんくとして突きかぬるこなし。

平家「主上あきれたる御ありさまにて」

ト實朝何氣なくふと見かへる牧の方はツとこなし懐刀をうしろへかくす。

(ト此の次の「平家」の詞及び地を消し琵琶の撥音のみをあしらふ。)

實「オ、祖母前か。まろはびツくり去たわいのう。」

ト牧の方思入よろしくトヤやうくくにそら笑をよそほひ

實「ホ、ホ、お慮外おゆるし遊ばしませ。ツイアノ物で——オ、それく——

アレ、御覽じませそれく、あれなる水の面に 實「エ、何が 實「それく、月影 實「ヤ

魚がとんだ。アレく月が——碎けるく。」

平家「まづ東に向はせたまひて伊勢大神宮にお暇申させおはしまし其後西に向はせたまひて西方浄土の來迎に預らんと誓はせおはしまして御念佛候ふべし

ト此のうち牧の方脚躡の思入こなしよろしくトヤ思ひ切つて懐刀をふりあぐる、トタンに釣殿の方にて小平太合圖の口笛を吹く。

實「ヤ。」

ト實朝ふりかへる牧の方覺えずあどさざる實朝心づかずつかく橋殿の方へ走りゆく、トタンに釣殿にて

豊後が君さまく。

トあわてたる聲々、同時に撥音バタリと止む。牧の方はツとこなし、ぎツとなり、すぐ實朝に追ひすがる。此の間一刹那。實朝釣殿の背面へかけ入る。牧の方ついでにかけ入る。トタンに小平太。

小「アレ、御方が——アレイノウ。」

ト同時に釣殿の中とよめきわたり、人聲物音はげしく聞える。すぐ牧の方、懐刀をもつたるまゝ、かけ戻り、橋殿の柱を一刀切る。すぐにすさまじき物音して、狼煙上りしところ。牧の方、すぐに釣殿へかけ入り、トタンに釣殿より、吳羽の前懐刀の柄に手をかけ、さきにたち、侍女大勢、甲斐々々しきいで、だちにて、たちいで、吳羽前より、しく、牧の方をとめて。

吳驚き入ッたる御振舞、母上御亂心、あそばしましたか。慮外ながら君の奉爲、そこ一寸もお進みあるな。

ト此の間遠寄せになり、ドンチャン次第にはげしく聞える。牧の方、思入あッ

て

豊「ヤア、ござかしき其のとめだて——そちたちに問答無用。ヤア——左源太はやまぬれ。

トすぐに上手へ行かうとする。吳羽の前とめる。一寸あッて上下に入りかはり、ト、牧の方、懐刀をふるひ、切りぬけうとする。立ちはりあッて、女ばら、皆々、下手へ、牧の方、上手へ。

(其三) 釣殿の大團圓

牧の方、釣殿の正面へ来る。吳羽の前、さきに女ばらづゝいて追ひ來たる。此の時、釣殿の上手より、深見三郎二郎、烏帽子直垂の下に腹巻して、兵をまたがへ立ちいで、よろしく、牧の方を遮る。牧の方、ギョツとして立ちどまる。

豊「ヤア、御不覺なり、牧の御方、御謀反、たちまち露見に及び、將軍家には恙なく、はや御還御と相成ッたり。豊「ヤア、すりや空しく、豊「かくなる上は、御懺悔く。豊「たと

へ釣殿は逃るゝとも四方を取りまく一味の軍勢 深「ヤア、おろかなる其のお言葉
只今恰も義時公中をどばして御歸館あり群る中へかけいらせ獅子の一聲おのゝ
く百獸怨敵たちまち懾服なしたり。吳「すりや我夫には御歸館ありしか。深「聞ゆ
る太鼓貝がぬが、目ざす敵は御方御夫婦。 吳「ヤア、ハハハ。深「いでこの上は尋常に
吳「御悪心を御懺悔あつて 深「御所のお沙汰を御まらあるべし。 吳「夫もろともみ
づからが、一命かけても御どりなし 吳「ヤア、なめすぎたり、取なしとは。 左源太は
いづこにゐる——左源太——

ト此の時、正面奥の小簾のかけにて

義「アイヤ、母上、其の左源太輝英も、已に誅に伏して候ふ。此の上は是非もなし、尋常
の御懺悔。 吳「ヤア、あのお聲は 昔々「相摸守さま。

ト此のトタン遠寄ばたりと止み、正面奥及び左側は小簾悉く落ちて、釣殿見透
しになる。正面旗側より北條相摸守義時、烏帽子水干侍士若干ひきまきたがへ
右手に三方をさゝげ、侍士一人に左源太が首級を提げさせ進みいづる。 吳「羽

の前深見等、左右に退き、おのゝよろしくすまふ。ト義時「うやゝしく牧の
方が立ッたる下手よき處にすまひ

義「左源太づれば申すに及ばず、上洛中の朝雅をも、即刻誅伐の御沙汰あり、已に御教
書を下され了んぬ、滅亡三日を越ゆべからず、まッた父上時政どのにも、一念已に御
發起あつて、まッこの通り御落飾。

ト三方に載せたる白髪のもどをりを示す。牧の方無言にて、よろしく思入。
義「此の上は母上にも、只いさぎよき御改悛——申すに忍ひす候へども、罪業消除の
御落飾——ひとへに願はしう、ぞんじたてまつりまする。

トよろしく愁の思入あつていふ。 吳「羽の前深見は、じめ、一同愁然としてさし
うつむく。 牧の方は、此の間まよんぼりとして立つたるまゝ、うつむいてゐる。
義時「も言ひ終はりて、落涙の體、皆々しばらく無言。此のうち牧の方まづかに
懐刀を取りなほし、突然乳の下を貫き、アツと叫びて倒れる。

深「ヤア、御方には、是は何故の 二人「御生害。

ト吳羽の前深見左右よりかけ寄り介抱する。牧の方苦しみながらよろしく二人をどいめ

世何故の生害とや。子故の間の雲破れ時しもこよひ十六夜の月に眞如の影拜み和子の蹤追ふ死出の旅。今更いふべき言葉もなし親子の因縁義時との疾く介錯頼みまする。

トよろしくこなし。一座をゆりかへる。義時よろしく愁の思入ありて

義男まさりの母上ゆゑかゝる御覺悟もあるべき筈を——アまなしたりおろかにも心づかず——

ト牧の方のそばにさし寄り

義ナウ母上たとへ朝雅亡ぶるとも今懐胎と傳へ聞く妹萩の前は手許に引きとりよしや男兒生まれんども一命にかへて申し乞ひ此の義時が猶子となし行末長く後見せん。せめてもそれを冥土の御つと。

ト此のうち牧の方次第に弱り義時の語を聞き徹に打笑むやうなるうち

衰へて、がツくりと落ち入る。吳羽の前深見驚きさし寄り

深モシ。吳母上さま母上——

ト大きく呼ばうとするを、義時

義ア、コリヤ。

トどいめ

義ア、さすがは母上。

ト觀念の思入あつて

義南無阿彌陀佛。吳深南無阿彌陀佛。

ト女ども侍士等一同皆々手をあはせ、小聲にて念佛する思入。夜半の鐘。



牧の方 大尾

春のや主人白す、拙作『牧の方』はこゝに一段落を成したれども、本篇の趣意はいまだ盡きたるにあらず、此の篇中に只頭首のみをあらはしたる北條義時、深見致興、實朝、卿の三人物は、別に『源實朝』と題したる續稿に於て、其の胴と尾とを描きいださんとす、其のうち義時だけは『源實朝』にて、胴をあらはし、其の續篇『右京兆』に於て其の全身をあらはすべきものとす。

明治三十年五月一日
同 年五月四日
同 年六月十一日
同 年六月十四日
再發行
再發行
再發行
再發行

版 權 所 有



著 者 坪 内 雄 藏

發 行 者 和 田 む 紀

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 築 地 三 丁 目 十 五 番 地 野 村 宗 十 郎

發 行 所 東 京 市 日 本 橋 區 通 四 丁 目 角 春 陽 堂

印 刷 所 東 京 市 京 橋 區 築 地 二 丁 目 十 七 番 地 株 式 會 社 東 京 築 地 活 版 製 造 所

牧の方 附

實價金四拾錢

